高松市埋蔵文化財調査報告　第117集

藤尾城跡
作山城跡

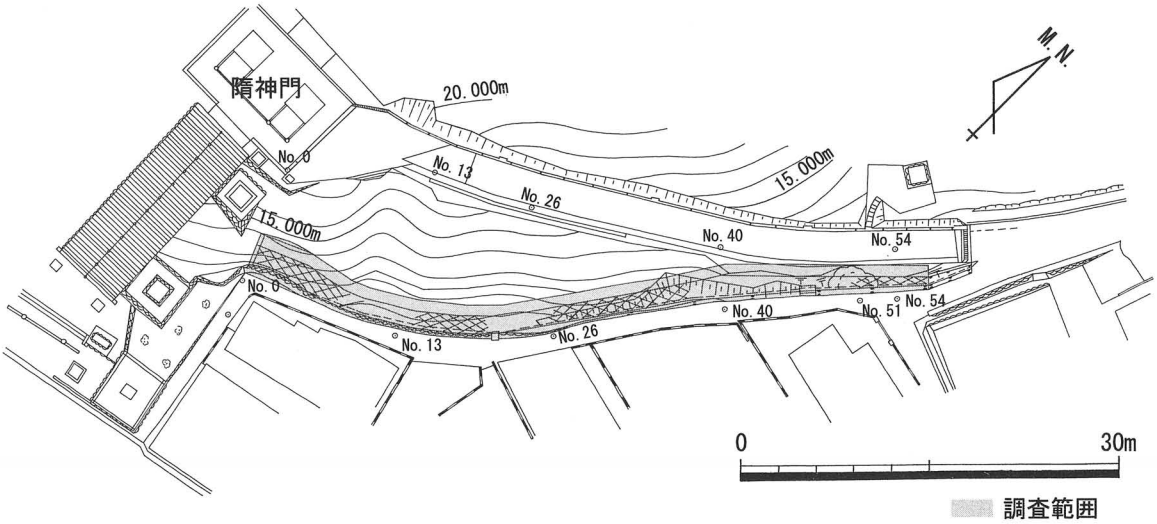
附　柿木荒神

2008年12月

高松市教育委員会

正誤表

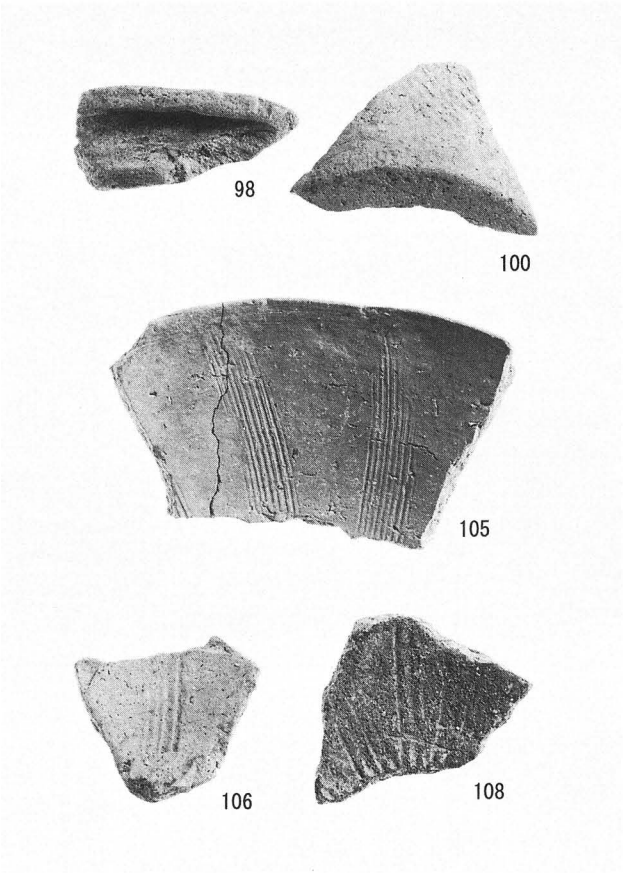
P10　第16図



第16図　第３次調査区平面図（S=1/600）

写真図版４

誤		正
99	→	98
101	→	100



例　言

1　本報告書は，高松市香西本町に所在する藤尾城跡と香西南町に所在する作山城跡の発掘調査報告書であり，あわせて飯田町に所在する柿木荒神から出土した遺物の整理報告を収録している。

2　発掘調査および整理作業については，高松市教育委員会が実施した。

3　各遺跡の調査期間と担当者は以下のとおりである。

藤尾城跡	第１次調査	平成５年12月９日～17日	山元敏裕
	第２次調査	平成８年２月５日～３月14日	藤井雄三，末光甲正
	第３次調査	平成９年１月８日～10日	大嶋和則
	第４次調査	平成19年８月６日	山元敏裕，中西克也，中村茂央
作山城跡		昭和62年３月１日～31日	藤井雄三，中西克也
柿木荒神		平成10年５月25日	山元敏裕

4　調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々から御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略　五十音順）

宇佐神社　香川県教育委員会

宇垣匡雅　大久保徹也　大橋雅也　乗岡 実　村上幸雄

5　本報告書の執筆は，第１章を川畑聰（文化財課文化財調査係長），第２章・第３章第２・３節を中西克也（文化財課非常勤嘱託），第３章第１・４節を中村茂央（文化財課非常勤嘱託）が行い，編集は中西と中村が行った。

6　遺物の写真撮影は，杉本和樹（西大寺フォト）が行った。

7　発掘調査で得られたすべての資料は，高松市教育委員会で保管している。

8　本報告書における表記および記述に関する凡例は，以下のとおりである。

(1) 本文の挿図として，高松市都市計画図「高松市全図」３万分の１と「香西」・「鬼無２」２千５百分の１を一部改変して使用した。

(2) 土色の表記については，藤尾城跡第１次・第４次調査において農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』によった。

(3) 挿図の方位は磁北であり，標高は東京湾平均海面からのプラス値である。

(4) 使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　ＳＰ　柱穴

本　文　目　次

第１章　調査の経緯と経過…… 1
第２章　地理的・歴史的環境…… 2
　第１節　地理的環境…… 2
　第２節　歴史的環境…… 2
第３章　調査の成果…… 5
　第１節　藤尾城跡…… 5
　第２節　作山城跡……19
　第３節　考察……38
　第４節　柿木荒神……41

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　周辺主要遺跡分布図…… 3
第３図　藤尾城跡調査位置図…… 5
第４図　第１次調査区平面図…… 6
第５図　１－１トレンチ土層図…… 7
第６図　石組状遺構平・断面図…… 7
第７図　１－１トレンチ出土遺物実測図…… 7
第８図　第２次調査区平面図…… 8
第９図　２－１トレンチ平面図・南壁面土層図…… 9
第10図　２－２トレンチ南壁面土層図…… 9
第11図　２－３トレンチ東壁面土層図…… 9
第12図　２－４トレンチ南壁面・西壁面土層図…… 9
第13図　２－６トレンチ東壁面・南壁面土層図…… 9
第14図　２－５トレンチ東壁面土層図…… 9
第15図　２－３トレンチ出土・表採遺物実測図…… 9
第16図　第３次調査区平面図……10
第17図　３－１トレンチ土層図……11
第18図　３－２トレンチ土層図……11
第19図　３－３トレンチ土層図……11
第20図　３－４トレンチ土層図……11
第21図　第３次調査出土遺物実測図……12
第22図　第４次調査区平面図……13
第23図　第４次調査遺構平面図・北壁面土層図……14
第24図　第４次調査柱穴土層図……14

第25図　第４次調査出土・表採遺物実測図……16
第26図　作山城跡地形測量図およびトレンチ設定図……19
第27図　Ａトレンチ平・断面図……20
第28図　ＳＰ01～08平・断面図および出土遺物実測図……21
第29図　ＳＫ01～05平・断面図……22
第30図　Ｂトレンチ平・断面図……23
第31図　ＳＫ06～09平・断面図……23
第32図　Ｃトレンチ平・断面図および出土遺物実測図……24
第33図　Ｄトレンチ平・断面図および出土遺物実測図……25
第34図　Ｅトレンチ平・断面図および出土遺物実測図……26
第35図　Ｆトレンチ平・断面図および出土遺物実測図……26
第36図　Ｇトレンチ平・断面図……27
第37図　蔵骨器出土状況実測図……27
第38図　蔵骨器実測図……27
第39図　礫石経平・断面図……29
第40図　「元亀天正年間香西浦図」（『讃岐國名勝図會』）……40
第41図　柿木荒神位置図……41
第42図　柿木荒神出土遺物実測図①……42
第43図　柿木荒神出土遺物実測図②……43
第44図　柿木荒神出土遺物実測図③……44
第45図　柿木荒神出土遺物実測図④……45

挿　表　目　次

第１表　周辺主要遺跡分布図の遺跡名一覧……2
第２表　作山城跡礫石経文字別個数表……28
第３表　作山城跡出土礫石経一覧表……30
第４表　作山城跡墓標一覧表……36
第５表　作山城跡遺構一覧表……37
第６表　作山城跡出土遺物観察表……37
第７表　藤尾城跡出土遺物・表採遺物観察表……46
第８表　柿木荒神出土遺物観察表……46

図　版　目　次

図版１　藤尾城跡
－１　第１次　１－１トレンチ（西から）
－２　第１次　石組状遺構（北西から）
－３　第１次　石３・４（南東から）
－４　第１次　石１刻印「石工」
－５　第１次　１－２トレンチ（南から）
－６　第２次　２－１トレンチ（南から）
－７　第２次　２－３トレンチ土層（西から）
－８　第２次　２－４トレンチ土層（東から）

図版２　藤尾城跡・柿木荒神
－１　第２次　２－６トレンチ土層（西から）
－２　第３次　Ｎｏ13杭付近（南西から）
－３　第３次　Ｎｏ54杭付近（北東から）
－４　第４次　遺構検出状況（東から）
－５　第４次　遺構完掘状況（東から）
－６　第４次　ＳＰ２検出状況（西から）
－７　柿木荒神全景（東から）
－８　柿木荒神近景（東から）

図版３　藤尾城跡
－１　第１次　出土遺物
－２　第３次　出土遺物（軒丸瓦）
－３　第３次　出土遺物（丸瓦　コビキＡ）
－４　第４次　出土・表採遺物
－５　第４次　表採遺物（特殊器台・特殊壺）

図版４　柿木荒神
－１　柿木荒神出土遺物①
－２　柿木荒神出土遺物②
－３　柿木荒神出土遺物③
－４　柿木荒神出土遺物④

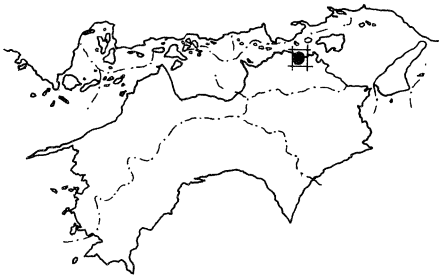
図版５　作山城跡
－１　遠景（東から）
－２　遠景（西から）
－３　調査以前（Ａ・Ｂ・Ｈトレンチ）
－４　調査以前（Ｃ・Ｄ・Ｅトレンチ）
－５　調査以前（Ｆ・Ｇトレンチ）
－６　Ａトレンチ完掘状況
－７　Ｂトレンチ完掘状況
－８　Ｃトレンチ遺構検出状況

図版６　作山城跡
－１　Ｄトレンチ遺構検出状況
－２　Ｅトレンチ遺構検出状況
－３　Ｆトレンチ完掘状況
－４　Ｇトレンチ完掘状況
－５　Ｈトレンチ完掘状況
－６　蔵骨器出土状況
－７　礫石経出土状況
－８　墓標（１号）

図版７　作山城跡
－１　墓標（２号～４号）
－２　墓標（５号）
－３　墓標（６号～８号）
－４　墓標（９号）
－５　墓標（10号～12号）
－６　墓標（13号～15号）
－７　墓標（16号）
－８　墓標（17号）

図版８　作山城跡出土礫石経（1）
図版９　作山城跡出土礫石経（2）
図版10　作山城跡出土礫石経（3）
図版11　作山城跡出土礫石経（4）
図版12　作山城跡出土礫石経（5）
図版13　作山城跡出土礫石経（6）
図版14　作山城跡出土礫石経（7）
図版15　作山城跡出土礫石経（8）
図版16　作山城跡出土礫石経（9）
図版17　作山城跡出土礫石経（10）
図版18　作山城跡出土礫石経（11）
図版19　作山城跡出土礫石経（12）
図版20　作山城跡出土礫石経（13）

第１章　調査の経緯と経過



第１図　遺跡位置図

藤尾城跡は標高19.8mの小高い丘陵上に位置し，現在は宇佐神社が鎮座している。中世の有力豪族である香西氏の本拠地であることから，昭和51年に市史跡に指定され保護が図られている。平成５年度に宇佐神社が社務所建設の計画を本市教委に打診してきたが，当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地でもあり，予定地は丘陵南西側中腹にある山頂部の平坦地に次ぐ広さの平坦地であることから，城跡に関係する遺構の存在が想定された。そのため，事前に本市教委が試掘調査を実施することとなった。現地調査は平成５年12月９日～17日において実施した。調査の結果，石組み遺構や柱穴等を確認したが，出土遺物から藤尾城跡に伴うものではなく江戸時代以降のものであり，包蔵地でないと判断した。これが藤尾城跡の第１次調査である。

第２次調査は，平成７年度に丘陵北西側の麓において，高松市による香西公民館建設が計画されたことが契機である。包蔵地である丘陵斜面を削ることから，斜面および周辺において試掘調査を実施することになった。平成８年２月５日～３月14日において実施し，調査の結果，斜面部において人工改変箇所が認められたが，藤尾城跡に伴うものではなく江戸時代のもので，包蔵地でないと判断した。

第３次調査は，平成８年度に包蔵地である丘陵南東側斜面において計画された急傾斜地崩壊防止工事が契機である。対象範囲が急傾斜で幅も狭いことから試掘調査が不可能であると判断し，事業主体者である高松市が文化財保護法第57条の３（現94条第１項）に基づく発掘通知を提出し，香川県教委から発掘調査の指導があった。これを受けて工事と並行して調査を実施した。平成９年１月８日～10日に実施した調査の結果，藤尾城跡とは関係ない江戸時代の遺構しか確認できなかったが，出土遺物の一部に藤尾城跡と同時期の遺物を確認した。

第４次調査は，宇佐神社が丘陵頂上部で計画した拝殿建替え工事が契機である。平成19年３月に文化財保護法第93条第１項に基づく発掘届出が宇佐神社から提出され，香川県教委から立会調査の指導があった。平成19年８月６日に拝殿基礎工事の掘削に伴って調査を実施し，藤尾城跡に直接関係する遺構は確認されず，それに先行する時期の柱穴等を確認した。

作山城跡がある丘陵は，昭和61年度に丘陵全体を削る計画が出された。地元関係者から文化財保護法第57条の２（現93条第１項）に基づく発掘届出が提出されたことから，香川県教委と協議を行い，城跡の内容が不明であることから事前の試掘調査を実施することになった。昭和62年３月１日～31日に実施した調査の結果，柱穴・土坑・溝・礫石経・蔵骨器等の江戸時代以降の遺構を確認したが，作山城跡と直接関係する遺構が確認されず包蔵地でないと判断した。

柿木荒神については，付近において発掘調査を実施していたところ，地元の方から柿木荒神と呼ばれる祠の土台の工事を行った際，土台部分の盛土から土器が出土したとの通報が寄せられた。平成10年５月25日に本市教委の文化財専門員が訪れたところ，コンテナ約５箱分の弥生時代から近世にかけての遺物が採集された。現地において祠部分の現況を確認したところ，土台工事は終了しており，掘削はこれ以上行われないとのことから，出土した遺物を回収し，調査を終了した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

瀬戸内海に北面する香川県のほぼ中央に位置する高松平野は，西側を五色台山塊，東側を立石山地に囲まれた東西20km，南北16kmの広さである。平野部には讃岐山脈に源を発する新川・春日川・詰田川・香東川・本津川等の河川が北流し瀬戸内海に流れ込んでいる。

東西の山塊は，花崗岩塊の頂部に浸食を受けにくい安山岩が被さるもので，侵食開析から取り残されて山となったものである。一般に斜面は急傾斜で頂部が平坦な場合をメサ，独立丘となった場合をビュートと呼ぶ。いずれも讃岐平野に見られる特徴的な山々である。屋島や五色台はその代表的な山であり，白山，六ツ目山等はメサに分類できよう。

これらの浸食作用が進んだ後，沖積世に入って本津川，香東川や春日川をはじめとする河川の堆積作用により高松平野が形成された。香東川は県内第二位の河川であり，その堆積力は平野形成に大きな影響を及ぼしている。かつて石清尾山塊を挟んで東と西の流れがあったが，寛永年間（1624～1643）に生駒家の家臣であった西嶋八兵衛が現状のように付け替えたといわれている。

藤尾城跡と作山城跡は五色台山系の東麓に広がる緩傾斜面に位置し，南西から延びる丘陵の先端部の標高20ｍの藤尾山と標高16ｍの作山の頂上に築かれていた。五色台山系の東麓には顕著な開析谷が発達してなく，裾近くの緩傾斜面は水田もしくは畑地として利用されている。両城跡の東側は本津川の氾濫原面で三角州帯が広がる。

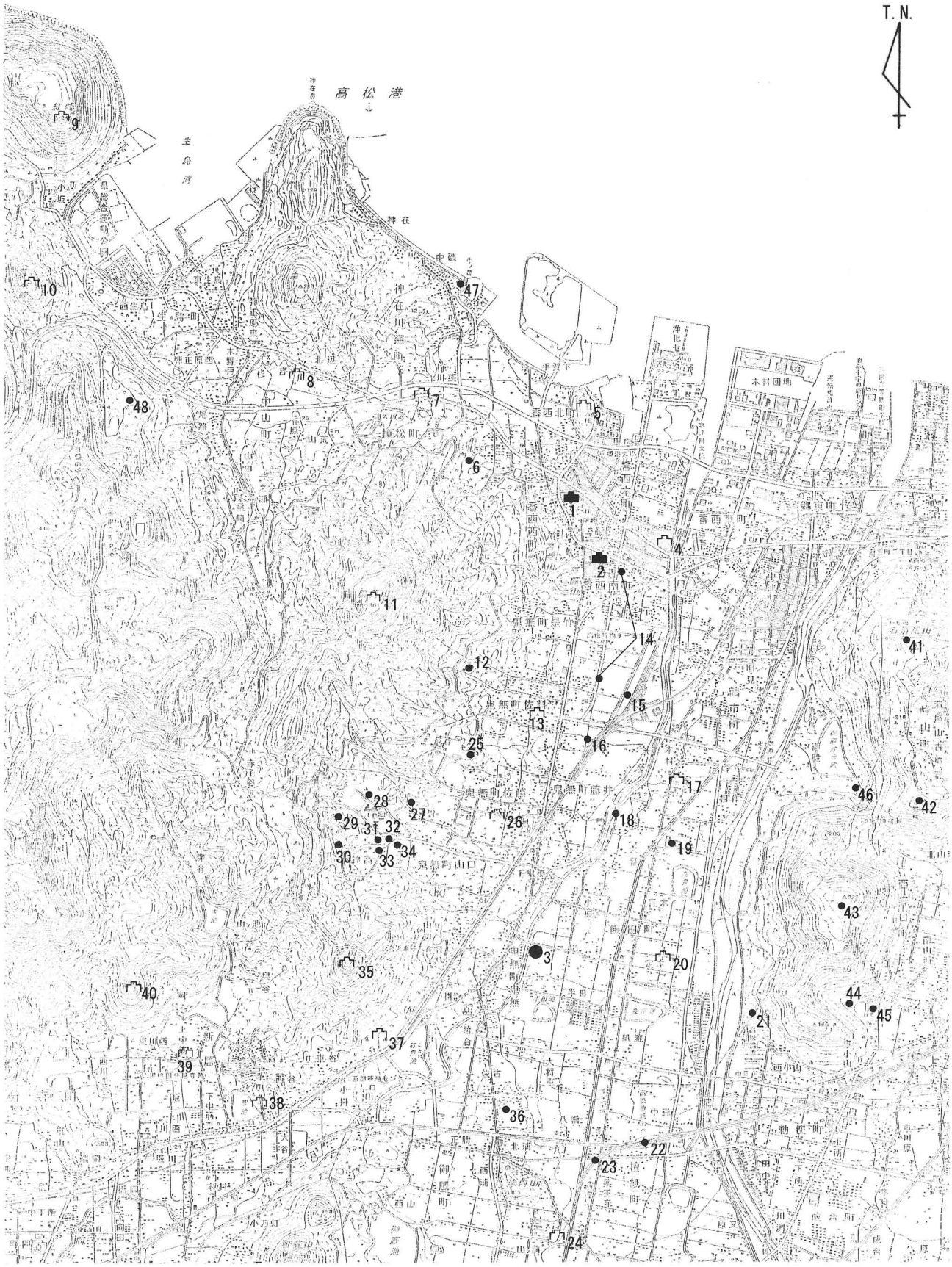
柿木荒神は本津川の東側に位置し，氾濫原面と扇状地帯を画する段丘崖にほぼ接する。西側を除き周辺の地表面は平坦で，条里型地割が整然と施工されている地域でもある。

第２節　歴史的環境

高松平野西部において，最も古い人間の営みが検出されたのは，中間・西井坪遺跡，中森遺跡，香西南西打遺跡等であり，旧石器時代後期に属する石器群が見つかっている。

第１表　周辺主要遺跡分布図の遺跡名一覧

1　**藤尾城跡**	13　佐料城跡	25　今岡古墳	37　衣掛城跡
2　**作山城跡**	14　香西南西打遺跡	26　佐藤城跡	38　宮尾城跡
3　**柿木荒神**	15　西打遺跡	27　鬼無大塚古墳	39　新居氏館跡
4　本津城跡	16　鬼無藤井遺跡	28　平木古墳群	40　新居城跡
5　芝山城跡	17　筑城城跡	29　山野塚古墳	41　石清尾山13号墳
6　勝賀廃寺	18　王墓古墳	30　空家古墳	42　猫塚古墳
7　植松城跡	19　相作牛塚古墳	31　古宮古墳	43　浄願寺山古墳群
8　中山城跡	20　飯田城跡	32　神高池西古墳	44　片山池窯跡群
9　亀水城跡	21　がめ塚古墳	33　こめ塚古墳	45　坂田廃寺
10　黄峰城跡	22　中森遺跡	34　神高池北西古墳	46　御殿貯水池南遺跡
11　勝賀城跡	23　八幡遺跡	35　鬼無城跡	47　牛ノ首遺跡
12　かしが谷古墳群	24　檀紙城跡	36　御厩大塚	48　横立山経塚古墳



第２図　周辺主要遺跡分布図（S＝1/40,000）

縄文時代になると，香西南西打遺跡で草創期と考えられる有舌尖頭器が出土し，西打遺跡では旧河道から前期末の土器・石器が，鬼無町佐料では後期の土器が採取されており，さらに鬼無藤井遺跡では自然流路から晩期の土器が出土している。

弥生時代になると，鬼無藤井遺跡で最大径約70mの規模を誇る二重の環濠を巡らす前期の環濠集落が検出されている。後期の遺跡としては，西打遺跡で竪穴住居跡と掘立柱建物跡，中間・西井坪遺跡で掘立柱建物跡や土器棺墓が検出されている。

古墳時代になると，東方の石清尾山塊には，前期初頭の鶴尾神社４号墳を初めとして，前期に属する双方中円墳や前方後円墳といった積石塚が築造される。平野の西部では，中間・西井坪遺跡で前期古墳の周濠が３基確認されている。西方の生島湾岸地域には前期の積石塚である横立山経塚古墳や原経塚古墳がある。中期では，平野西部で最大規模の前方後円墳である今岡古墳がある。前方部から陶棺が出土しており，ほぼ同時期に中間・西井坪遺跡で埴輪や陶棺が製作・焼成されていることから，その陶棺が今岡古墳に供給されたと推測されている。後期になると横穴式石室を主体部とする群集墳の築造が盛んになる。五色台山系東麓の緩傾斜面には，古宮古墳・鬼無大塚古墳・平木１号墳などの巨石墳からなる神高古墳群が形成される。また，石清尾山塊南の浄願寺山の山頂付近には50基余りの横穴式石室からなる群集墳がある。

古墳に代わり寺院の造営が盛隆になると，平野部には川原寺式が退化した瓦当文様をもつ軒瓦が出土する遺跡として，白鳳期(飛鳥時代後期)の創建と推定される坂田廃寺と勝賀廃寺が知られている。また，坂田廃寺近くにある平安時代中期操業の片山池１号窯跡は坂田廃寺に瓦を供給していたと考えられる。

奈良～平安時代にかけては，正箱遺跡・薬王寺遺跡から総数50棟以上の掘立柱建物跡が検出されている。また，区画溝や掘立柱建物跡の中には条里地割と方向が符合するものがあり，南海道に近接する当該地区では早くから条里地割の施工が進んでいたことがわかる。香西南西打遺跡では，粘土採掘坑を多数検出しており，土器作りの可能性が指摘されている。なお，藤尾城跡の北西に位置する香西寺には重要文化財の毘沙門天立像が保存されている。像は藤原時代とされ当該地区が古い歴史をもっていたことを証明している

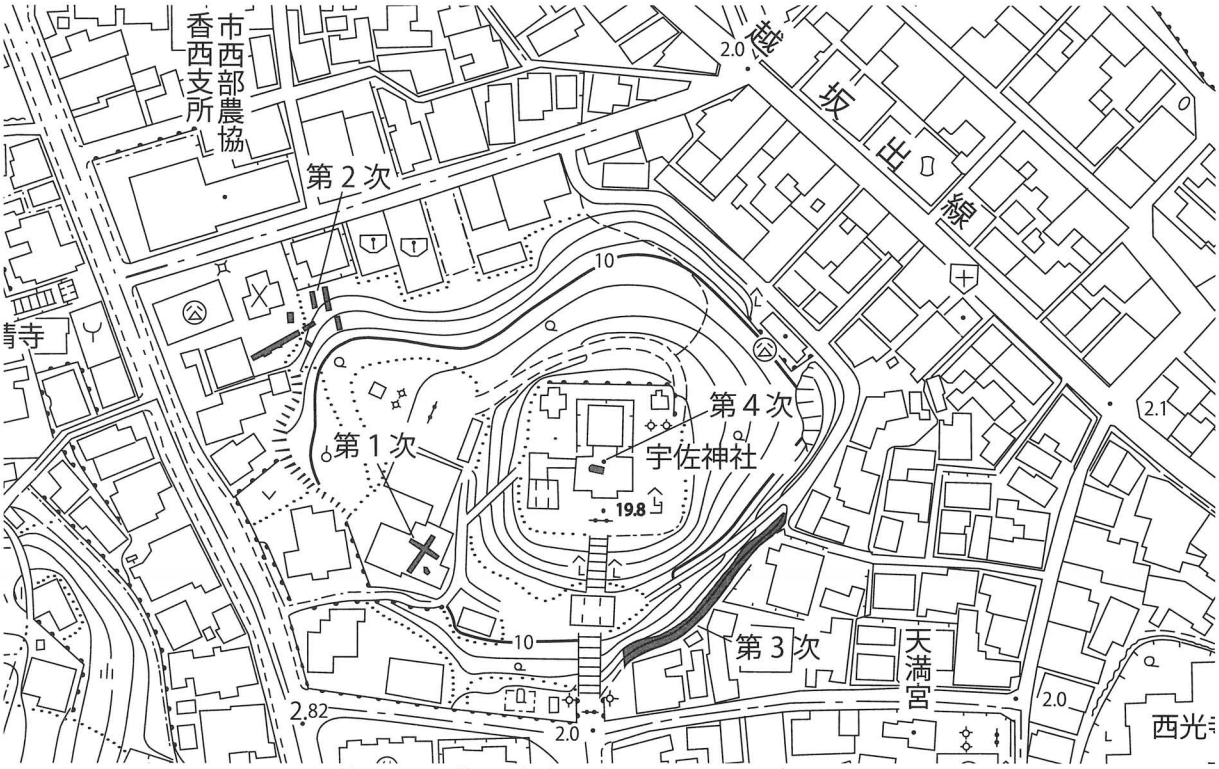
鎌倉～室町時代でも条里地割に符合する溝跡が，鬼無藤井遺跡や香西南西打遺跡，西打遺跡で広範囲に検出されている。さらに，西打遺跡では区画溝に囲まれた鎌倉時代の屋敷跡が，香西南西打遺跡ではコの字状の区画溝が確認されている。

当該地域は讃岐の代表的な豪族である香西氏の本拠地であり，関連する城跡が多数存在している。『南海治乱記』に「居城ハ笠居郷佐料也，要城ハ勝賀ノ山也」と記されるように，香西氏は，勝賀山に有事の際の城として勝賀城を築き，常には佐料城を居館とした。さらに周辺には亀水城・黄峰城・芝山城・作山城・鬼無城等の支城を築いている。戦国時代末期の天正５年（1577），香西氏は本拠地をそれまでの佐料城から香西浦に移している。これが本報告書の藤尾城である。さらに，筑城城・飯田城・檀紙城などの香西氏に従った地元の領主たちの居城が，香川郡や阿野郡を中心に点在しており，その数は一説には40余にのぼったという。飯田町や檀紙町にある多数の塚の中には，中世の「武将の墓」という言い伝えが残るものもある。

豊臣秀吉による四国征討以後，家臣である生駒親正が讃岐を支配し，天正16年に高松城を築き，江戸時代に至る。やがて藩主は生駒家から松平家に替わり，明治維新を迎えるのである。なお，明治維新の時，宇佐神社は大きく姿を変えている。同社の別当寺であった神宮寺が拝辞となっている。讃岐名勝図によれば，神宮寺は宇佐神社の南西に位置していたらしい。

第３章　調査の成果

第１節　藤尾城跡



第３図　藤尾城跡調査位置図（S=1/2,000）

１　第１次：宇佐神社社務所建設に伴う試掘調査（第４～７図参照）

平成５年12月９日から17日にかけて，宇佐神社社務所建設に伴い，埋蔵文化財の試掘調査を実施した。社務所建設予定地は本殿から南西方向に位置し，藤尾城跡の縄張り内にあるため，当城跡に関係する遺構・遺物が存在している可能性を想定できた。そのため，調査はトレンチを２ヶ所設定し，遺構・遺物の有無を確認した。

(1) 基本層序（第５図）

盛土と整地層の下に土器片を包含する褐灰色粘性シルト，にぶい褐色土，橙色粘性土，灰褐色粘性土，浅黄橙色土褐色土混じり（遺構面），青灰色シルト，オリーブ灰色土の順に確認した。

(2) 遺構

１－１トレンチ（第４図）

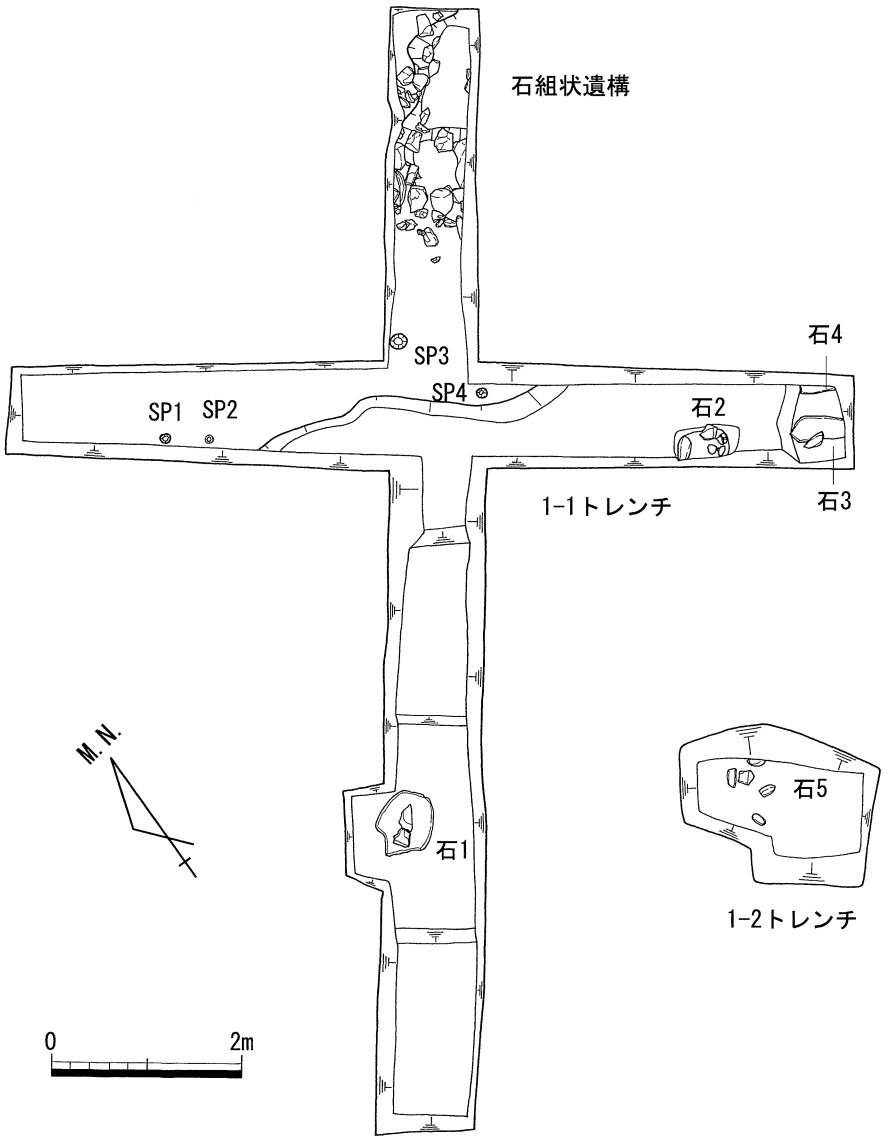
北東・南西方向に長さ約12m，幅１mのトレンチと，南東・北西方向に長さ約９m，幅１mのトレンチを，十字型になるように設定した。トレンチ内からは柱穴，石組状遺構，不整形の落ち込み，礎石と考えられる石を検出している。

ＳＰ（第４図）

４基の柱穴を検出した。ＳＰ1はトレンチ北西側で検出，ＳＰ2はＳＰ1の東隣で検出している。ＳＰ3は北東・南西トレンチの交差地点から北東側で検出，ＳＰ4は同じく交差地点から南東側で検出した。直径はそれぞれ10cm，５cm，20cm，10cmを測る。遺物は出土していないため時期は不明である。

石組状遺構（第６図）

トレンチ北東端で拳大から人頭大程度の石が高さ30cm～40cmほど積まれた石組を検出した。石



第４図　第１次調査区平面図（S=1/80）

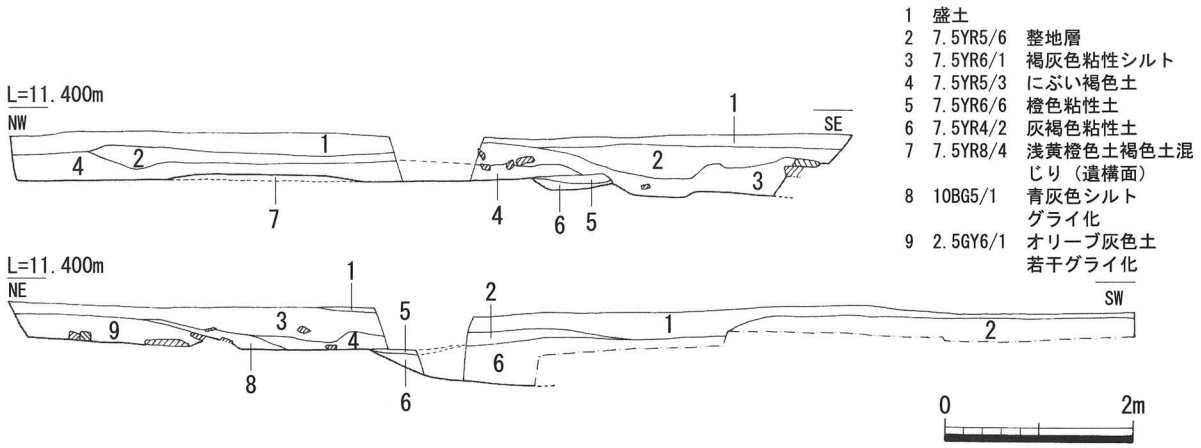
組の壁面として南東面の一部と南西・北西面が確認できる。また，北東壁面の下端をトレンチ端にて確認したことから，縦２m，横１mほどの規模と考えられる。内部から水が染み出しており，石で囲んでいる様子から，本来は水を溜める機能をもったものであると推測できる。時期は青磁染付碗が出土しており，18世紀後半以降のものと考えられる。

その他（第４図）

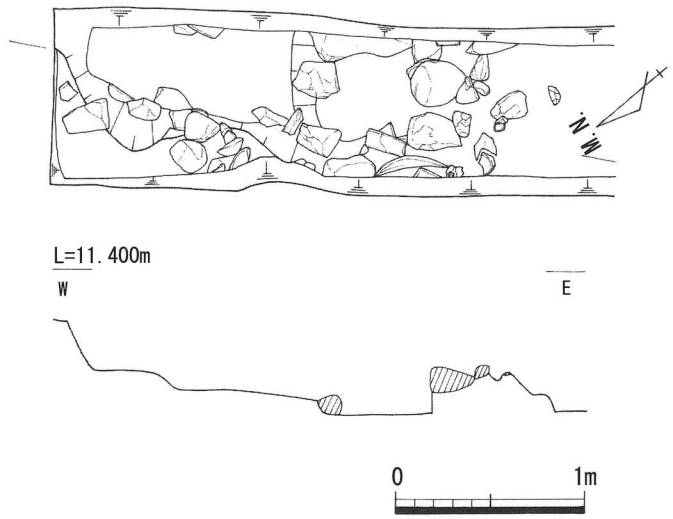
石組状遺構の他にいくつか石を検出した。石１は南西端から北東へ３m地点にある大きさ60cmほどの石である。石の表面には「石工」の刻印が見られ，礎石に使用されたものと考えられる。石２はトレンチ南東端から北西へ１mの地点で拳大の石が数個まとめられていた。石３はトレンチ南東端にあった長さ50cmほどの細長い石である。石４は石３の北東隣で確認した。以上の検出した石は礎石に使用された可能性が考えられる。時期については，遺構に伴う遺物が確認できなかったが，石２・３・４付近から19世紀代の磁器碗等が出土しており，この時期に近いものと考えられる。その他，トレンチの交差地点に北東から南西へ，不整形の落ち込み状遺構を検出したが，遺物は確認できず，時期も不明である。

１－２トレンチ（第４図）

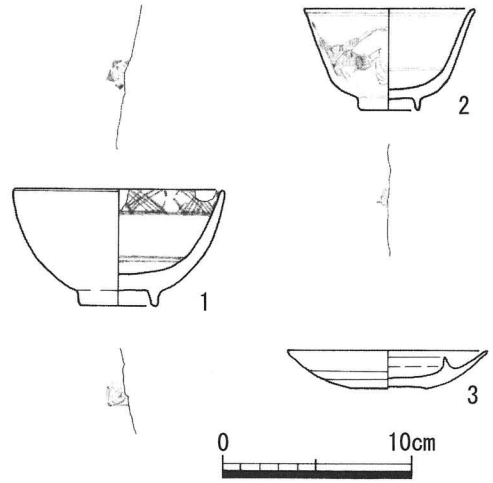
１－１トレンチの南東端と南西端から礎石と考えられる遺構を確認した後，同トレンチ内に連続する礎石が確認できないことから，礎石の有無を確認するために新たに１－１トレンチの南側に北東・南西0.50m，南東・北西１mほどのトレンチを設定した。トレンチ内からは石２と同様に拳大の石が数個まとまった石５を検出した。遺物は確認しておらず，石の用途については礎石の基底部の可能性があるが断定できない。



第５図　１－１トレンチ土層図（S=1/80）



第６図　石組状遺構平・断面図（S=1/40）



第７図　１－１トレンチ出土遺物実測図（S=1/4）

(3) 出土遺物（第７図）

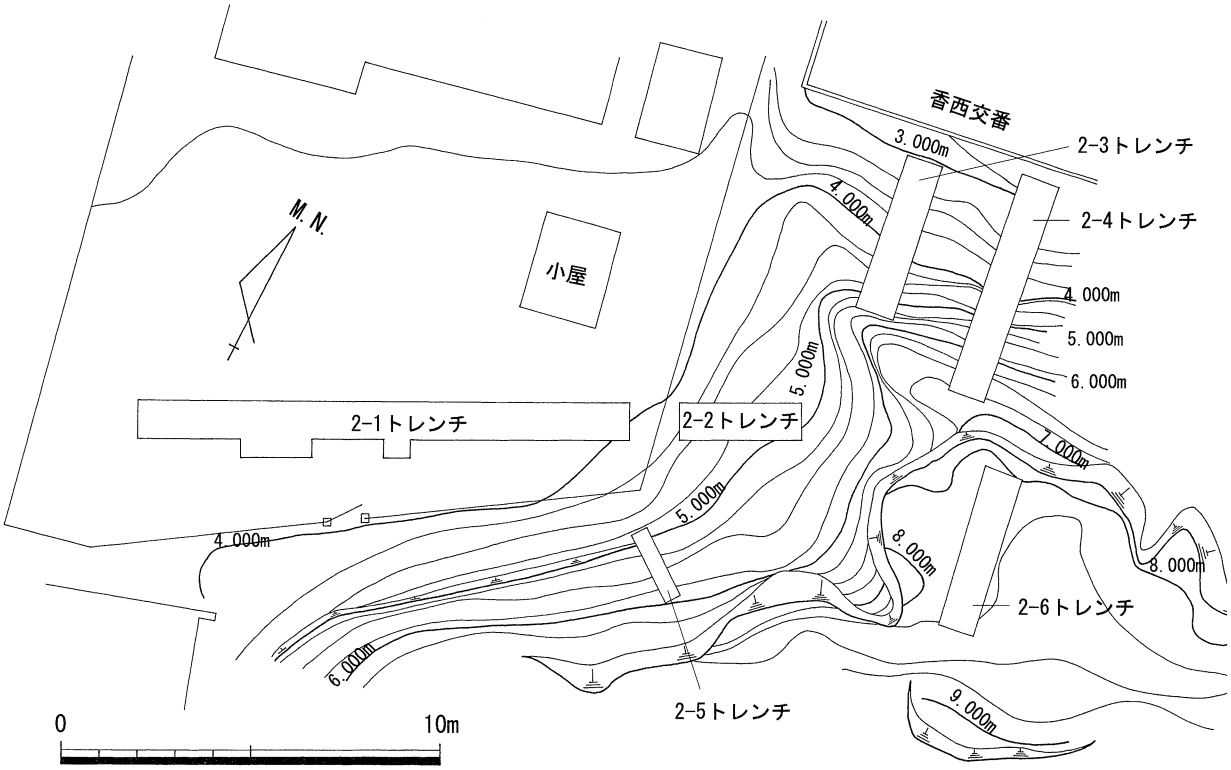
１は石組状遺構から出土したもので，肥前系磁器の青磁染付碗である。内外面に文様が認められる。２・３はトレンチ南東側から出土した。２は瀬戸・美濃系磁器の染付碗で，内外面に文様が認められる。３は京・信楽系陶器の灯明皿で内面には釉がかかる。両者とも19世紀代のものである。

(4) まとめ

確認した遺構は，遺物から近世もしくは近代に位置づけられるもので，藤尾城跡に直接関係する遺構・遺物は確認できなかった。そのため，中世の遺構面は後世に削平されてしまった可能性が考えられる。

２　第２次：香西公民館拡張工事に伴う試掘調査（第８～15図参照）

第２次調査は，香西公民館の拡張工事に伴う試掘調査である。本調査地は宇佐神社境内から北西方向にあり，藤尾城の縄張り内に位置する。調査は高松北警察署香西駐在所構内とその隣接地を範囲に，比較的平地である部分と急傾斜面，標高の高い平地に計６箇所のトレンチを設定し，風化花崗岩（地山）層が確認できるまで掘削した。



第８図　第２次調査区平面図（S=1/200）

(1) 基本層序（第９～14図）

２－１トレンチは単層で耕作土が20cmほど堆積しており，その下に風化花崗岩の地山が確認できた。２－２トレンチは腐葉土と真砂土流土の下に，本来地山であったと考えられる真砂土が見られる。東側には攪乱である廃棄物焼却灰土が地山の上に見られた。２－３・２－４トレンチは，腐葉土と灰褐色腐蝕土の下に風化花崗岩細片およびシルトと真砂土の混和層が繰り返し見られる。この層からは土師質土器片が出土している。２－５は腐葉土と真砂土流土の下に風化花崗岩の地山を確認した。また北側に向かって２－２と同じく地山の上に廃棄物焼却灰土の攪乱層が見られた。２－６トレンチは上から腐葉土，真砂土ブロック混じり黄灰色砂質土，淡黄灰色細砂礫，暗灰褐色腐蝕土混じり真砂土，黄灰色シルト質真砂土の順に南から北へなだらかに堆積している。

(2) 遺構

２－１トレンチ（第９図）

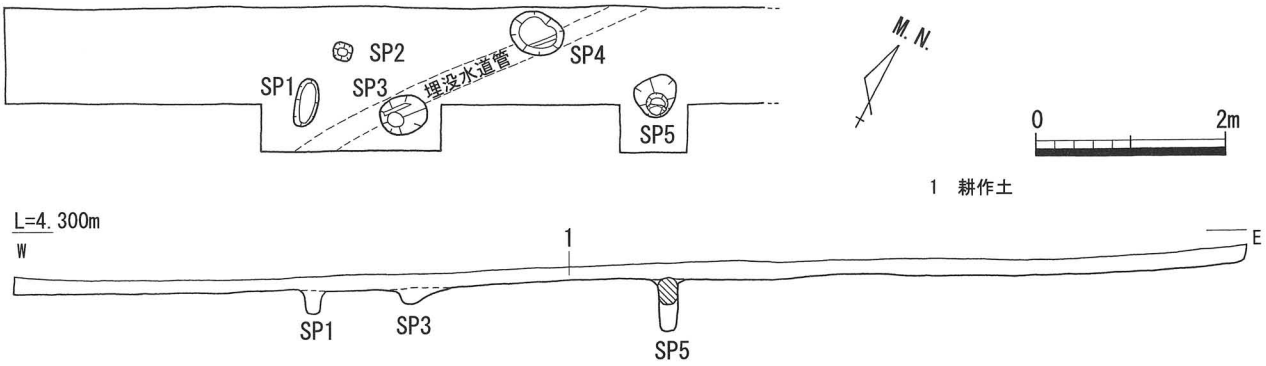
平地に長さ13m，幅１mのトレンチを設定した。柱穴を５基確認したが，その内ＳＰ3・4は，下に埋没水道管が南北に走っており，切り合い関係から近現代のものと考えられる。その他の柱穴については，遺物は出土しておらず時期は不明である。また，柱穴はいずれも地山である風化花崗岩を掘削している。

２－３トレンチ（第11図）

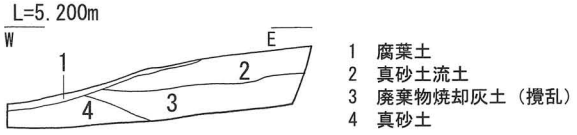
南から北へ，急斜面からなだらかな傾斜へ変わる地点に南北方向のトレンチを設定した。遺構は確認できなかったが，土層から一部叩きつけたと見えるシルト質混じりの真砂土と風化花崗岩の層が７層から14層にかけて見られ，南側では垂直に立ち上がる地山を確認した。

２－４トレンチ（第12図）

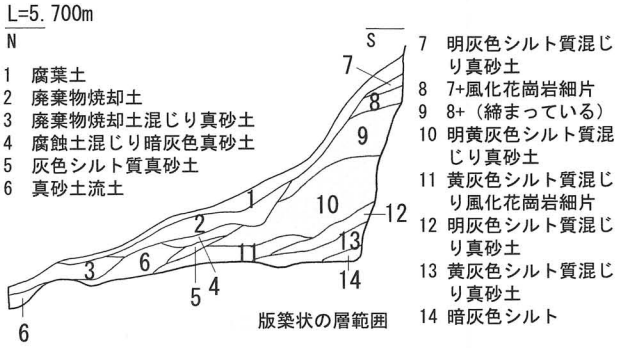
２－３トレンチの東側に並行して設定した。遺構は確認できなかったが，２－３トレンチと同様，土層に一部叩きつけたと見えるシルト質混じりの真砂土と風化花崗岩の互層を確認した。地山まで掘り切れなかったが，２－３トレンチと同じく垂直に立ち上がる地山が存在すると考えられる。



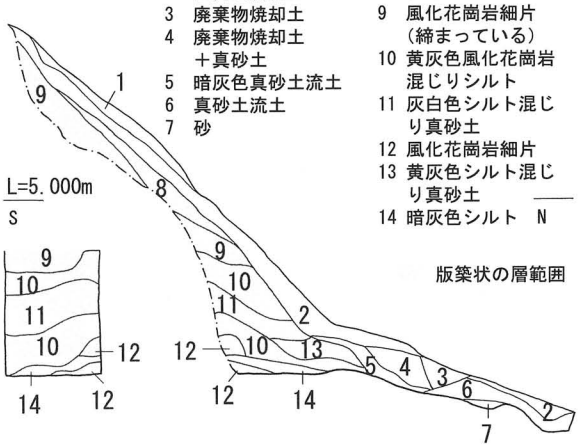
第９図　２－１トレンチ平面図・南壁面土層図（S=1/80）



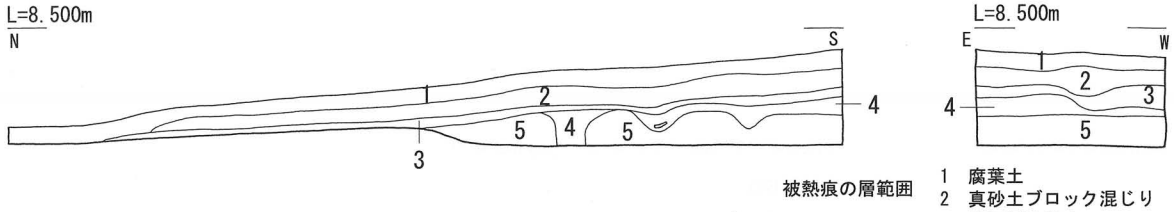
第10図　２－２トレンチ南壁面土層図（S=1/80）



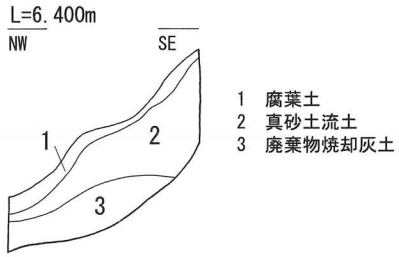
第11図　２－３トレンチ東壁面土層図（S=1/80）



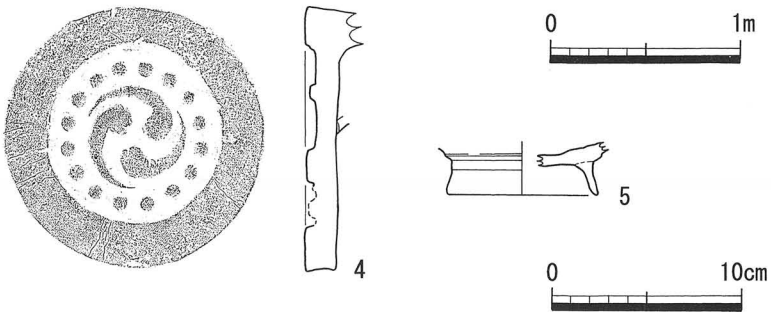
第12図　２－４トレンチ南壁面・西壁面土層図（S=1/80）



第13図　２－６トレンチ東壁面・南壁面土層図（S=1/40）



第14図　２－５トレンチ東壁面土層図（S=1/80）



第15図　２－３トレンチ出土・表採遺物実測図（S=1/4）

２－６トレンチ（第13図）

標高８ｍほどの小高い平地に長さ4.5m，幅１ｍのトレンチを設定した。遺構は確認できなかったが，土師器片を多く含む５層の下に，第13図および図版２－１に示す被熱したと見られる風化花崗岩の地山を確認した。

２－２・２－５トレンチ（第10・14図）

攪乱（廃棄物焼却土）により，遺構は確認できなかった。

(3) 遺物（第15図）

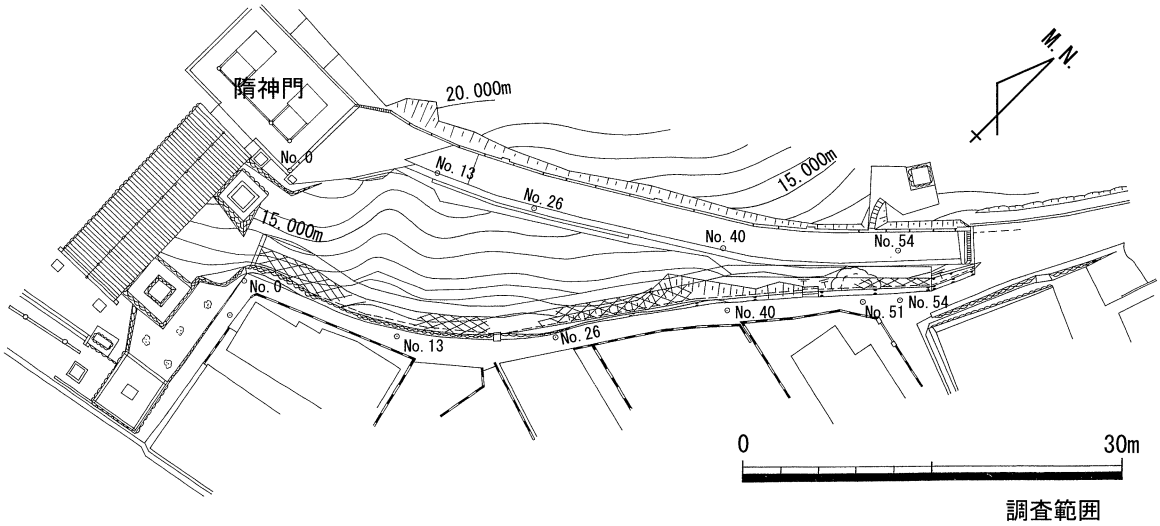
４は２－３トレンチから出土した三巴文軒丸瓦で，瓦当のみ残存する。時期は18世紀末から19世紀初め頃のものと考えられる。５は調査地周辺で表採した土師質土器の高台付皿もしくは椀で13世紀前半代のものと考えられる。

(4) まとめ

第２次調査では，調査区東側の２－３・２－４トレンチで風化花崗岩細片および真砂土とシルト混和層の互層，２－６トレンチの被熱痕と考えられるものを確認したほかは確実な遺構は検出できなかった。この２－３・２－４トレンチについては版築状に土を叩きつけていると考えられることや，地山が垂直に伸びることが認められたことから，地山をＬ字状に切り出し，その前面に互層を構築しているものと考えられる。これは中世城郭の「切岸・切崖」にあたる可能性があるが，遺物がないため時期は不明である。以上，第２次調査では藤尾城跡に関係する確実な遺構の検出には至らなかった。本調査区では，西側を中心に平坦面から急傾斜面に続く地点まで近現代に地山面まで削平を受けており，遺構面は失われているものと考えられる。

３　第３次：急傾斜地崩壊防止工事に伴う立会調査（第16～21図参照）

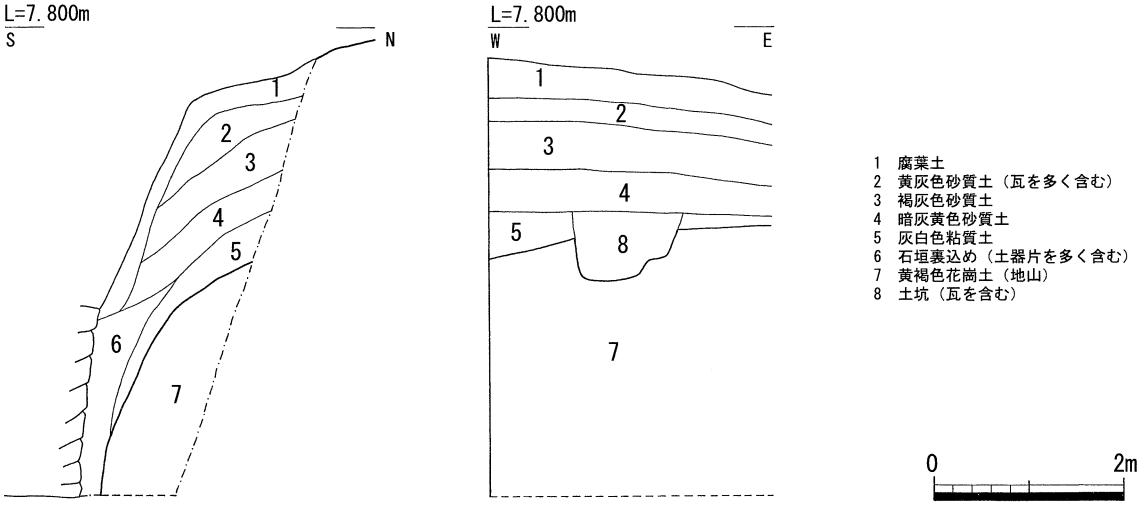
第３次は平成９年１月８日から10日にかけて急傾斜地崩壊防止の工事に伴い立会調査を行なった。調査地は宇佐神社から南東部分にある急傾斜面である。現状は山林であり，石垣で補強されていた。調査は工事と並行して行なわれ，重機により地山まで掘削した。４ヶ所において土層断面の実測図化と，遺物の有無の確認を行なった。



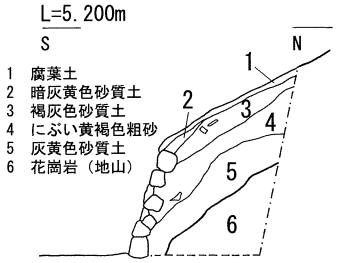
第16図　第３次調査区平面図（S=1/600）

(1) 基本層序（第17～20図）

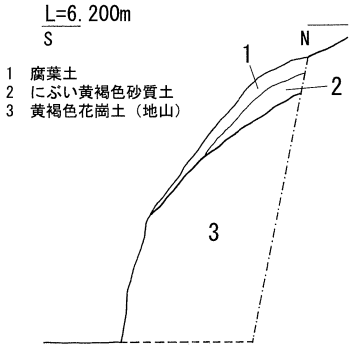
３－１トレンチは工事用Ｎｏ.0杭付近に設定した。層序は上方より腐葉土，黄灰色砂質土（瓦を多く含む），褐灰色砂質土，暗灰黄色砂質土，灰白色粘質土，石垣裏込め（土器を含む），黄褐色花崗土（地山）の順である。北壁面では土坑を確認している。３－２トレンチはＮｏ.13杭付近に設定した。層序は上方より腐葉土，暗灰黄色砂質土，褐灰色砂質土，にぶい黄褐色粗砂，灰黄色砂質土，花崗土（地山）の順である。３－３トレンチはＮｏ.26付近に設定した。層序は上方から腐葉土，にぶい黄褐色砂質土，黄褐色花崗土（地山）の順である。３－４トレンチは調査区東端から10m付近に設定した。層序は腐葉土，にぶい黄褐色砂質土，明黄褐色粘質土，褐灰色砂質土，黄褐色花崗土（地山）の順である。



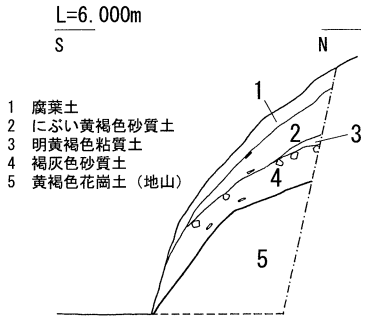
第17図　３－１トレンチ土層図（S=1/80）



第18図　３－２トレンチ土層図（S=1/80）



第19図　３－３トレンチ土層図（S=1/80）



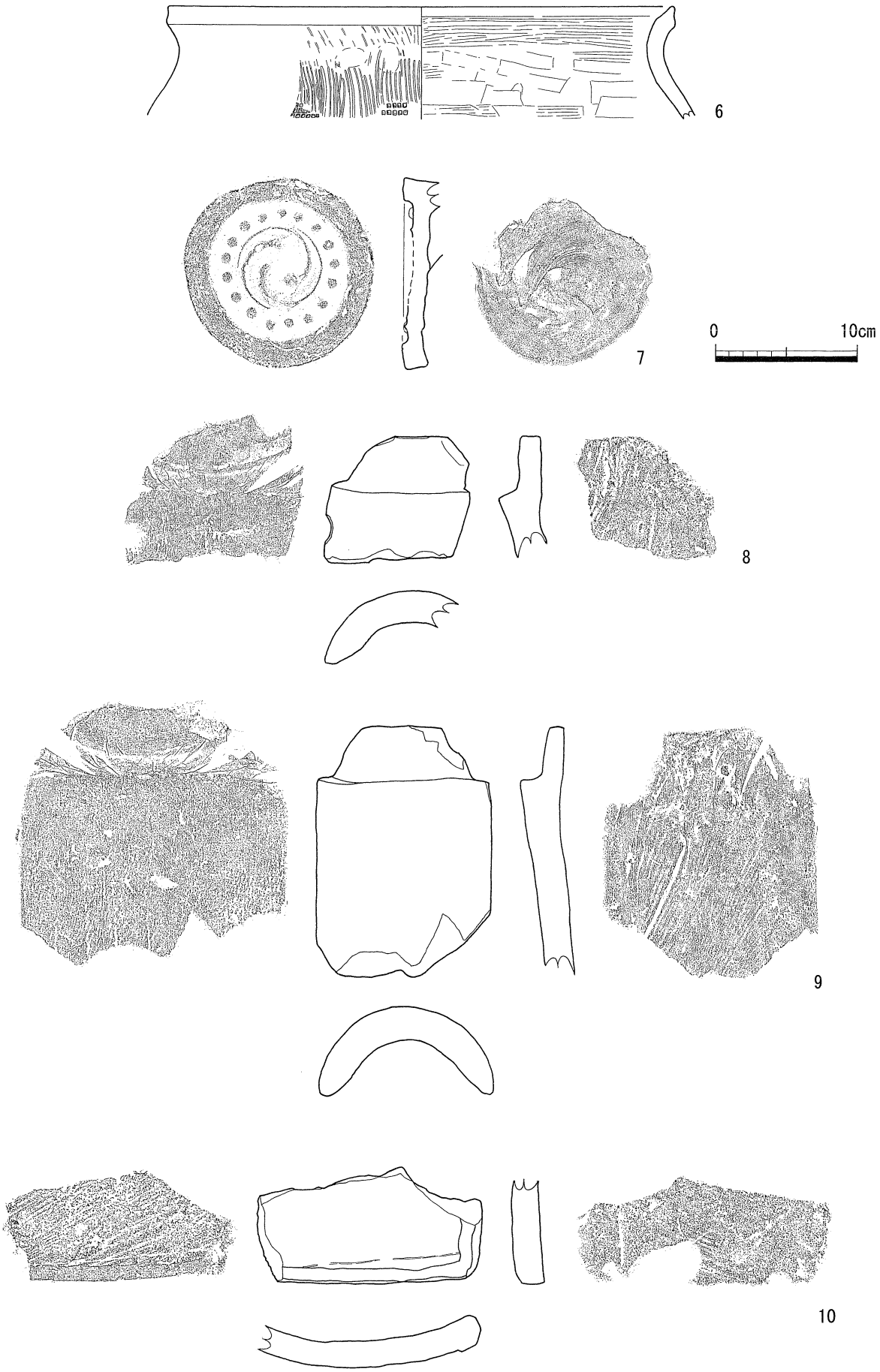
第20図　３－４トレンチ土層図（S=1/80）

(2) 遺構（第17図）

３－１トレンチ土層から土坑を検出したのみで，その他のトレンチでは遺構は確認できなかった。検出した土坑からは瓦が出土しており，19世紀代のものと考えられる。いずれのトレンチも土層断面から，地山の上に流土が自然堆積していると考えられる。

(3) 遺物（第21図）

多量の遺物が出土した。その内，藤尾城の時期に該当すると考えられる遺物を第21図に掲載した。６は調査区の東端から西へ５～10m付近で出土した土師質土器甕である。外面に格子状の叩き痕が見られる。７は調査地の西端～５ｍ付近で出土した三巴文軒丸瓦である。中心は欠けているが，巴の尾は細く長く伸び，外区に珠文を17個めぐらしている。時期は16世紀末から17世紀にかかるものと考えられる。８は調査区の東端から西へ20～30m付近で出土した丸瓦である。外面



第21図　第３次調査出土遺物実測図（S=1/4）

は叩き，内面は布目が確認できる。９は調査区の東端から西へ５～10m付近で出土した丸瓦である。外面は叩き後ナデ調整，内面は布目とコビキＡが観察できる。10は平瓦である。調査区の東端～５m付近で出土したもので，内外面にコビキＡが顕著に認められる。出土した江戸時代以降の瓦の中には「香川郡」，「多田傳右衛門満」等の線刻されたものもある。

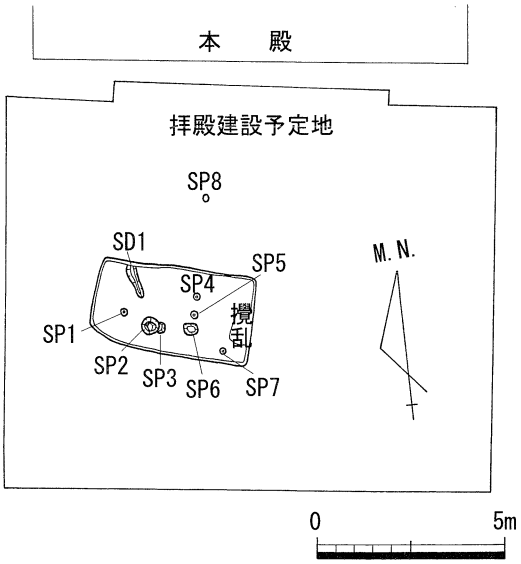
(4) まとめ

本確認調査では藤尾城に関係する遺構は検出されなかった。また，第２次調査で見られた山の裾部をＬ字状に掘削した痕跡や互層等の人工的な改変は認められなかった。遺物については，瓦の製作技法の一つであるコビキＡの痕跡をもつ丸瓦・平瓦が出土しており，16世紀後半代の年代があてられる。その他は18世紀から19世紀のものを中心としており，宇佐神社に関係するものと考えられる。

以上，第３次確認調査では藤尾城の時期に該当する遺物を確認できた。この遺物により，織豊期以前に瓦を用いた建物が存在していた可能性を指摘できる。

４　第４次：宇佐神社拝殿建替工事に伴う立会調査（第22～25図参照）

宇佐神社拝殿の建替に伴い，立会調査を行なった。当初は旧拝殿建設時に削平を受け，遺構が残っていないと想定したが，トレンチ内にて柱穴と溝を確認した。また，境内には多量の土器片が散布しており，弥生時代後期末から近世に至る遺物を表採した。



第22図　第４次調査区平面図（S=1/100）

(1) 基本層序（第23図）

単層である。花崗土が６cmほど堆積しており，その下に風化花崗岩（地山）層を確認した。

(2) 遺構

ＳＰ１（第23・24図）

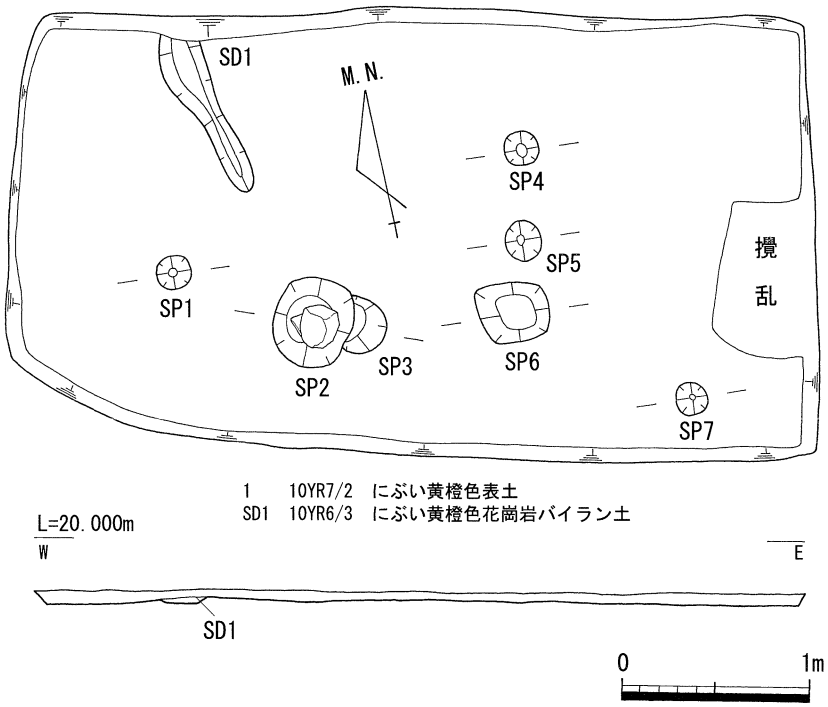
トレンチ西側で検出した柱穴である。平面形は円形で，直径18cm，深さ35.5cmを測る。埋土はにぶい黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ＳＰ２（第23・24図）

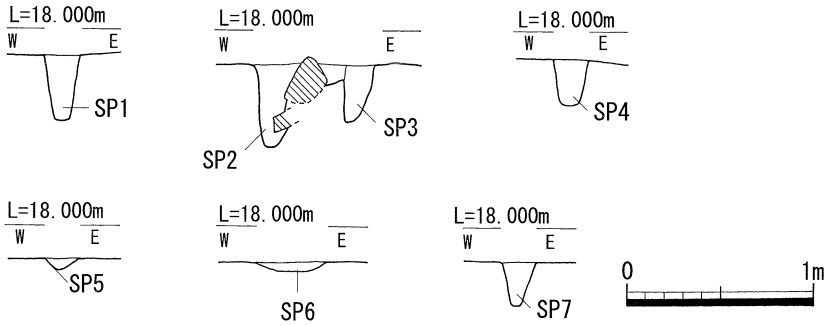
ＳＰ1から東へ0.50m地点で検出した柱穴である。平面形は円形で，直径40.5cm，深さ45cmを測り，柱穴内部で石を２石確認した。いずれの石も安定しておらず用途は不明である。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。柱穴内からは土師質土器の小皿が出土しており，時期は13世紀末から14世紀初頭のものと考えられる。

ＳＰ３（第23・24図）

トレンチの中央，ＳＰ２の東隣にて検出した柱穴である。ＳＰ２と切り合い関係にあり，ＳＰ２より古いものである。平面形は円形を呈し，直径30cm，深さ29cmを測る。埋土はにぶい黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。土師質土器片が数個出土しているが，小片のため図化できなかった。



第23図　第４次調査遺構平面図・北壁面土層図（S=1/40）



第24図　第４次調査柱穴土層図（S=1/40）

ＳＰ４（第23・24図）

トレンチ中央，北側にて検出した柱穴である。平面形は円形で直径18.5cm，深さ21cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は認められず時期は不明である。

ＳＰ５（第23・24図）

トレンチ中央，ＳＰ4とＳＰ6の間に位置する。平面形は円形で，直径19cm，深さ５cmを測る浅い柱穴である。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

ＳＰ６（第23・24図）

トレンチ中央，ＳＰ5の南側にて検出した柱穴である。平面形は方形を呈し，他の柱穴と平面形を異にする。南北31cm，南西37cm，深さ５cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。時期については，平瓦が出土しており比較的新しい時期のものと考えられる。

ＳＰ７（第23・24図）

トレンチ南東側にて検出した柱穴である。平面形は円形で，直径17cm，深さ23.3cmを測る。埋土は灰黄褐色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ＳＰ８（第22図）

トレンチ外の北側にて検出した柱穴である。平面形は円形を呈し，直径18.5cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土である。

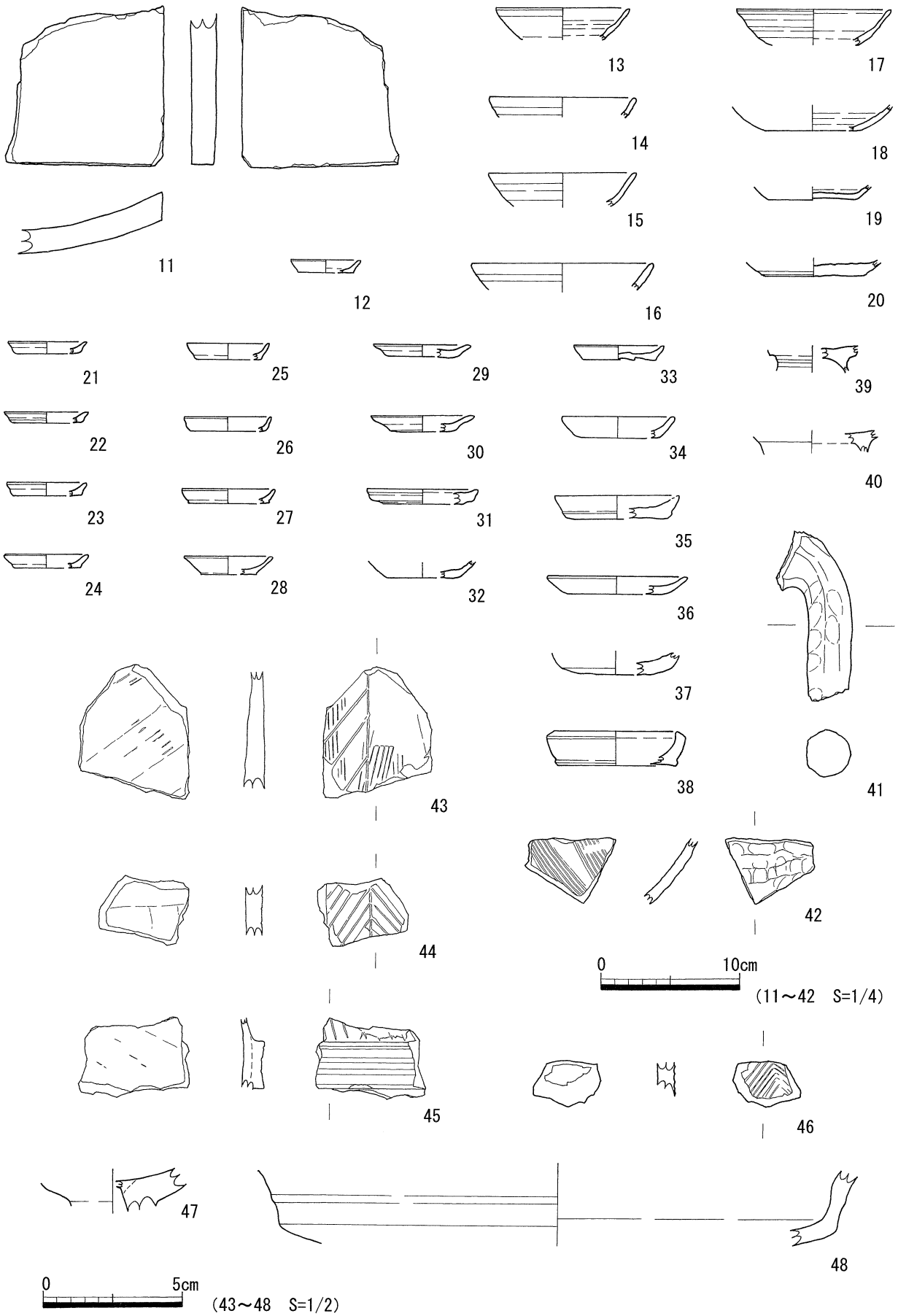
ＳＤ１（第23図）

トレンチ北側にて検出した南北に伸びる溝で，トレンチ外へ伸びる。確認長90cm，幅23cm，深さ４cmを測る。埋土はにぶい黄橙色花崗岩バイラン土の単層である。遺物は出土しておらず，時期は不明である。

(3) 遺物（第25図）

調査区内から出土した遺物に加え，境内にて多量の土師質土器片を表採した。ここでは図化可能なものを報告する。11はＳＰ６から出土した平瓦で近世から近代のものと考えられる。12はＳＰ２から出土した土師質土器小皿である。底部は篦削りが施されており，底部端は角張る。13から42は宇佐神社境内で表採した土師質土器である。この内13から20は杯，21から38は小皿である。杯は口縁部の直径が10cmから13cm前後を測る。19・20は杯底部で回転篦削りの後ナデが施されている。小皿については21から24は断面が厚く，口縁部は短く外に開く。25から27は断面がやや薄く，口縁部は上方に伸びる。28は薄い断面に口縁部が外に広がる。底部は篦削りが施され，底部の端には明確な角が見られる。29・30は高さ１cm前後で口縁部が横に開く。31は底部が厚く，口縁部は極端に短い。32は底部片で，内部には漆が塗布されている。33は底部に回転篦削りが顕著に残る。34は口縁部に厚さが見られる。35は底部片で断面は厚く，外面には整形時に伸ばした粘土が段として残っている。36は口縁部，底部ともに広さをもつものである。37は底部が厚く，31のように短い口縁になると考えられる。38は小皿としているが，高台部分の可能性もある。39・40は高台付椀もしくは皿である。41は足釜の脚部である。外面には指頭圧痕とナデが確認できる。内面には横刷毛と指頭圧痕が施されている。42は擂鉢である。外面には指頭圧痕の後にナデが施され，内面には７条一束の擂り目が見られる。以上，表採した遺物については杯，小皿とも底部の調整は回転篦削りのみで，糸切り調整は確認できなかった。時期は古いもので13世紀前半を示し，新しいもので14世紀前半代のものと考えられている。

表採遺物に弥生土器が６点ある。43・44は特殊器台形土器（以下特殊器台）の破片である。43の外面には縦刷毛目の後に綾杉文（もしくは斜線文）が施され，内面は篦削りが認められる。土器の厚さは0.4cmから0.8cm程度で薄いつくりである。また，外面には赤色顔料の塗布が認められる。胎土はにぶい橙色を示し，石英・長石に細かな雲母と１mm以下の角閃石が観察できる。44は磨耗が激しいが外面に綾杉文（もしくは斜線文）が確認できる。内面は磨耗して調整は不明である。土器の厚さは0.6cm程度で，胎土はにぶい橙色を示し細かな石英・長石・雲母・角閃石が観察できる。また，43と同様に外面に赤色顔料が塗布されていたものと考えられる。この43・44については綾杉文（もしくは斜線文）の幅や間隔に違いが見られるが，特殊器台は段によって文様が異なることから，両土器片は同一個体の可能性がある。45は特殊壺形土器（以下特殊壺）の突帯部分である。突帯には１～２mm幅の凹線が３条入り，その上部には鋸歯文を構成する沈線が認められる。内部には篦削りが施され，断面からは突帯の接合痕が確認できる。土器の厚さは薄い部分で0.2cm，突帯部で0.8cmを測り，非常に薄いつくりである。胎土はにぶい褐色を示し，細かな石英・長石・雲母・角閃石が観察できる。また，部位については突帯部の上部に鋸歯文が確認できることから，壺の最大径部付近のものと推測することができる。これら43・44・45については，土器の調整・形状・胎土から吉備からの搬入品であることが判明した[1)]。46は甕もしくは壺の体部片と推測される。外面には櫛歯状工具による波状文が確認できる。内面は磨耗して調整は不明である。47は高杯の受け部である。外面にはナデ調整，内面には篦磨きが施されている。また，受け部中央には接合痕が見られる。48は高杯の受け部である。外面にはナデが観察できる。内面の口縁部付近はナデ，受け部には篦磨きが施されている。以上の46・47・48は在地産の土器である。



第25図　第４次調査出土・表採遺物実測図（S=1/4・1/2）

(4) まとめ

本調査区では柱穴８基と溝１条を検出した。各柱穴の対応関係は不明であるが，調査区外に対応する柱穴が存在するものと考えられる。検出した遺構はいずれも地山面を掘削していた。遺物が確認できたものはＳＰ2・3・6で，時期は13世紀末から14世紀初頭頃である。また，境内で表採した土師質土器については，ＳＰ２出土のものと近い時期に位置づけられる。

以上，第４次調査では藤尾城跡の時期に伴う明確な遺構・遺物は確認できなかったが，それに先行する遺構を確認したことは重要である。また，今回表採した遺物の中に弥生土器を数点確認しており，中世以前の藤尾山には弥生時代の遺構が存在していた可能性が考えられる。ただし，遺構面まで極めて表土が薄いため後世の削平が及んでいる状態であり，弥生時代の遺構は消滅している可能性が高い。現在は中世の遺構面がわずかに残存しているものと考えられる。

５　藤尾城跡における調査全般にわたるまとめ

第１次から第３次調査までは近世および近代の遺構が主に検出された。第２・３次調査では中世の遺物を確認したが，藤尾城跡に関係する遺構は認められなかった。一方，第４次調査では，中世の遺構と遺物を検出した。この検出した遺構・遺物については藤尾城の存続時期よりも古いことが確認できた。これらの調査から，現在，藤尾山周辺の遺構面は近現代の削平を受けており，山頂部に僅かに遺構面が残っているものと考えられる。

第４次によって検出した藤尾城よりも先行する中世の遺構・遺物については，藤尾八幡宮（宇佐神社）のものと考えられる。藤尾山には藤尾城築城以前に藤尾八幡宮が存在していたとの記述が『香西記』の「讃陽香西藤尾八幡由来記」にあり，さらに同宮は嘉禄年中（1225～1227年）に阿野・香川郡の領主であった讃岐藤原氏香西左近将監資村が豊前国宇佐八幡宮から藤尾山に勧請したものとする。しかし，天正３年（1575年）に入ると藤尾城築城のため，神社は他地へ移された。この時築かれた藤尾城は香西氏の本城となるが，天正13年（1585年）に秀吉の四国平定によって香西氏は滅び廃城となる。その後，慶長年間（1596～1615年）に八幡宮が藤尾山に戻されたことが記されている。以上，藤尾山の記録として，藤尾八幡宮創建（1225～1227年），藤尾城（1575～1585年），八幡宮再興（1596～1615年）と続く。その後は，明治16年（1883年）の焼失と同32年（1899年）の再建，昭和3年（1928年）社務所の修繕新築が記録に見られる。今回検出したＳＰ2は，出土遺物から13世紀末から14世紀初頭のものと考えられ，藤尾八幡宮創建時の年代より降ることから以降に建てられた建物に伴うもので，香西記の記述を裏付ける資料と言えよう。ＳＰ6は出土した瓦片から近世・近代のものと考えられる。その他の遺構については遺物が伴わないため時期は不明であるが，藤尾八幡宮または藤尾城跡の遺構が含まれているものと推測できる。

表採した弥生土器の中から特殊器台・特殊壺を確認した。香川県下では，高松市松縄町の天満・宮西遺跡に次いで２例目である[2)]。藤尾山は今でこそ北に陸地が続くが，かつてはすぐ北に瀬戸内海が広がり，岡山県と対峙し，海に面した小高い山であったと考えられている。遺物は藤尾山の中で最も高い場所に位置する本殿付近において表採したものである。造成の際に他地から土を山頂に運んだという記録は確認できず，あえて山頂に土を運ぶとは考えにくいことから，遺物は藤尾山に属するものと考えられる。これらの遺物は吉備からの搬入品であり，特殊器台と特殊壺がセットで搬入されている事実が明らかとなった。このことや当時の立地環境を考慮すれば，藤尾八幡宮や藤尾城が築城される以前の藤尾山には，弥生墳丘墓もしくは弥生時代の遺跡があったと推測できる。また，特殊器台・特殊壺の分布については，近年の事例増加により吉備内で成立した後，ある時期に吉備外へ広がりを見せると推測されている。藤尾城跡で表採したものは立

坂型のものより下ると考えられ，この拡散する時期に搬入されたものと捉えることが可能である[3)]。

いずれにせよ，今回表採した遺物は弥生時代の讃岐と吉備との関係を探る上で貴重な資料である。以上，当報告書では資料報告と若干の推測に止め，詳細な土器の型式や時期，搬入等の問題については今後の事例の増加を待つものとしたい。

引用・参考文献

香西町公民館1965「宇佐神社」『新香西史』

香西記を読む会1990『高松市の文化財第13編　ふるさと覚書「香西記」読み下し』

片桐孝治1992「考察－古代から中世にかけての土器様相－」『中小河川大束川改修工事(津ノ郷橋～弘光橋間)に伴う埋蔵文化財調査報告　川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

香川県教育委員会1994・1996・1997『香川県埋蔵文化財調査年報』平成５・７・８年度

池田　誠1988・1989「瀬戸内の港津都市と中世城郭(その一) －讃岐香西浦と塩飽笠島浦－」「瀬戸内の港津都市と中世城郭(その二) －讃岐塩飽島－」『中世城郭研究』第２号・第３号　中世城郭研究会

野中寛文2003「藤尾城跡」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会

佐藤竜馬2003「瓦」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告第４冊　高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

阿河鋭二2006第11回中国・四国地区城館調査検討会資料『城郭瓦の変遷－織豊期から近世へ－』

宇垣匡雅1992「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社

岡山県教育委員会ほか1994「５.甫崎天神山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査８』

旧岡山大学考古学研究部1997「岡山市甫崎・黒住丘陵の遺跡分布調査－雲山鳥打遺跡・49基の古墳群などの踏査－」『古代吉備』第19集　古代吉備研究会

川畑　聰2004「特殊器台について」「弥生時代後期～古墳時代前期初頭における搬入土器について」『天満・宮西遺跡～旧河道編～』高松市教育委員会

註

1) 特殊器台・特殊壺については，岡山県古代吉備文化財センター宇垣匡雅・大橋雅也両氏の御教示を得た。

2) 高松市内では天満・宮西遺跡，藤尾城跡の２例のほか，前方後円墳と円墳，もしくは双方中円墳と考えられる船岡山古墳から特殊器台が出土しているとされていた。2008年に当市より船岡山古墳の測量調査が行なわれ，墳丘から特殊器台形埴輪と考えられる土器片を確認した。よって，現段階では船岡山古墳出土の土器は特殊器台である可能性は低い。
また，墳丘については一部墳裾を確認したことから双方中円墳ではないことが確認されたが，依然墳丘形は確定していない。

3) 註１）に同じ。

第２節　作山城跡

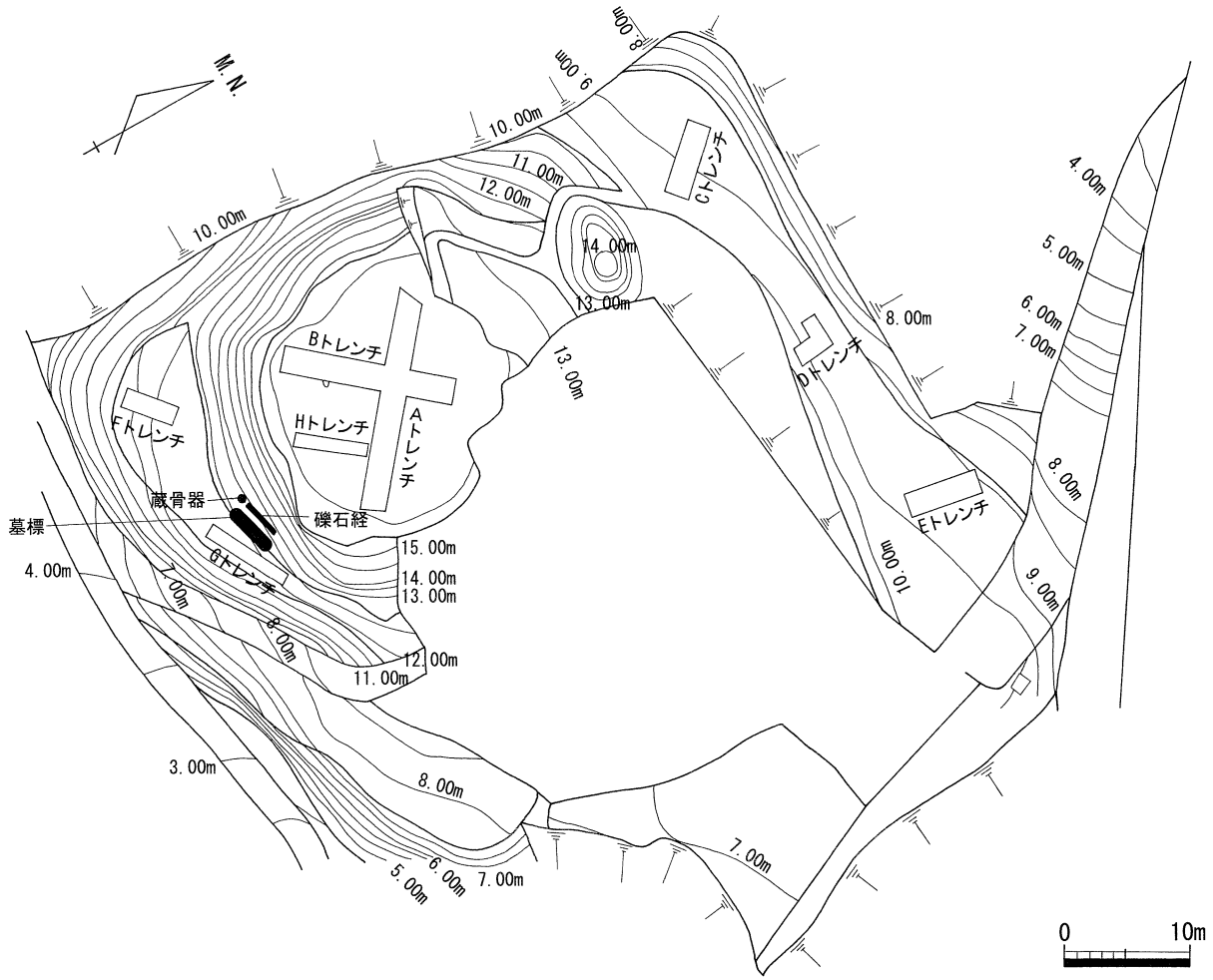
（１）　調査の概要（第26図）

作山城跡は香西南町にあった標高約16mの小丘陵に所在した。調査当時では作山城跡の裾部まで宅地開発が及んでいた。頂上付近は南北方向約60m，東西方向約66mを測る方形の範囲で原況を保っていた。しかし，東側の一段下がったかなり広い削平地は宅地であったため，試掘調査は頂上部と北側と南側にある細長い削平地を対象とした。

試掘調査は，城内の遺構の有無と城跡の年代的な位置づけに直接関わる遺物を検出することにより，城跡の性格をさらに解明する目的で実施した。トレンチの設定は畑地の作物等の関係で任意に９本のトレンチを設定し，Ａ～Ｈトレンチと呼称した。

Ａ・Ｂ・Ｈトレンチは標高約16mを測る頂上部の平坦地に設定した。平坦地は北から南に向かって緩やかな傾斜で下がっている。Ａトレンチは平坦地の長軸に沿うように南東―北西方向に設定し，トレンチの全長は17.0m，幅は2.0mである。ＢトレンチはＡトレンチに直行する北東―南西方向に設定し，全長は13.5m，幅は2.0mである。ＨトレンチはＡトレンチの西側に位置し，Ｂトレンチと平行する方向に設定し，全長は5.5m，幅は1.0mである。

Ｃ・Ｄ・Ｅトレンチは北側の細長い削平地に設定した。削平地は南から北に向かって緩やかに下がる。Ｃトレンチは削平地の西側に位置し，南東－北西方向に設定し，全長は5.5m，幅は2.0mである。Ｄトレンチは中央に位置し，Ｌ字形を呈する。南北長は3.0m，東西長は2.5mである。



第26図　作山城跡地形測量図およびトレンチ設定図（S=1/600）

Ｅトレンチは東側に位置し，南北方向に設定し，全長は5.7m，幅は2.0mである。

Ｆ・Ｇトレンチは南側の細長い削平地に設定した。削平地は北から南に緩やかな傾斜で下がる。Ｆトレンチは平坦地の西側に位置し，南西－北東方向に設定し，全長は4.0m，幅は1.5m，Ｇトレンチは東側に位置し，東西方向に設定し，全長は7.0m，幅は1.0mである。

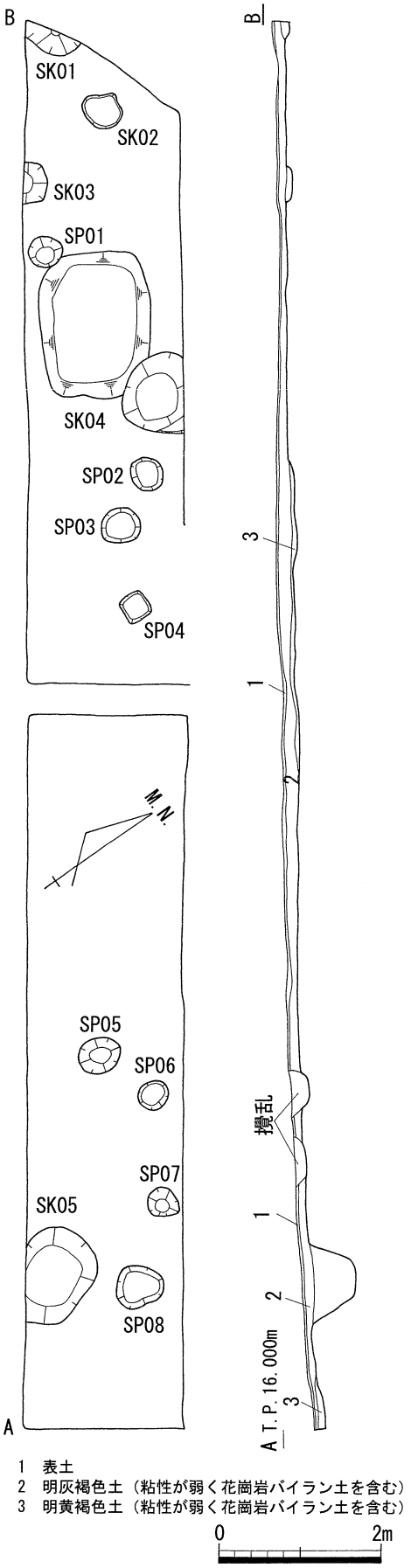
（２） 遺構と遺物

Ａトレンチ（第27～29図）

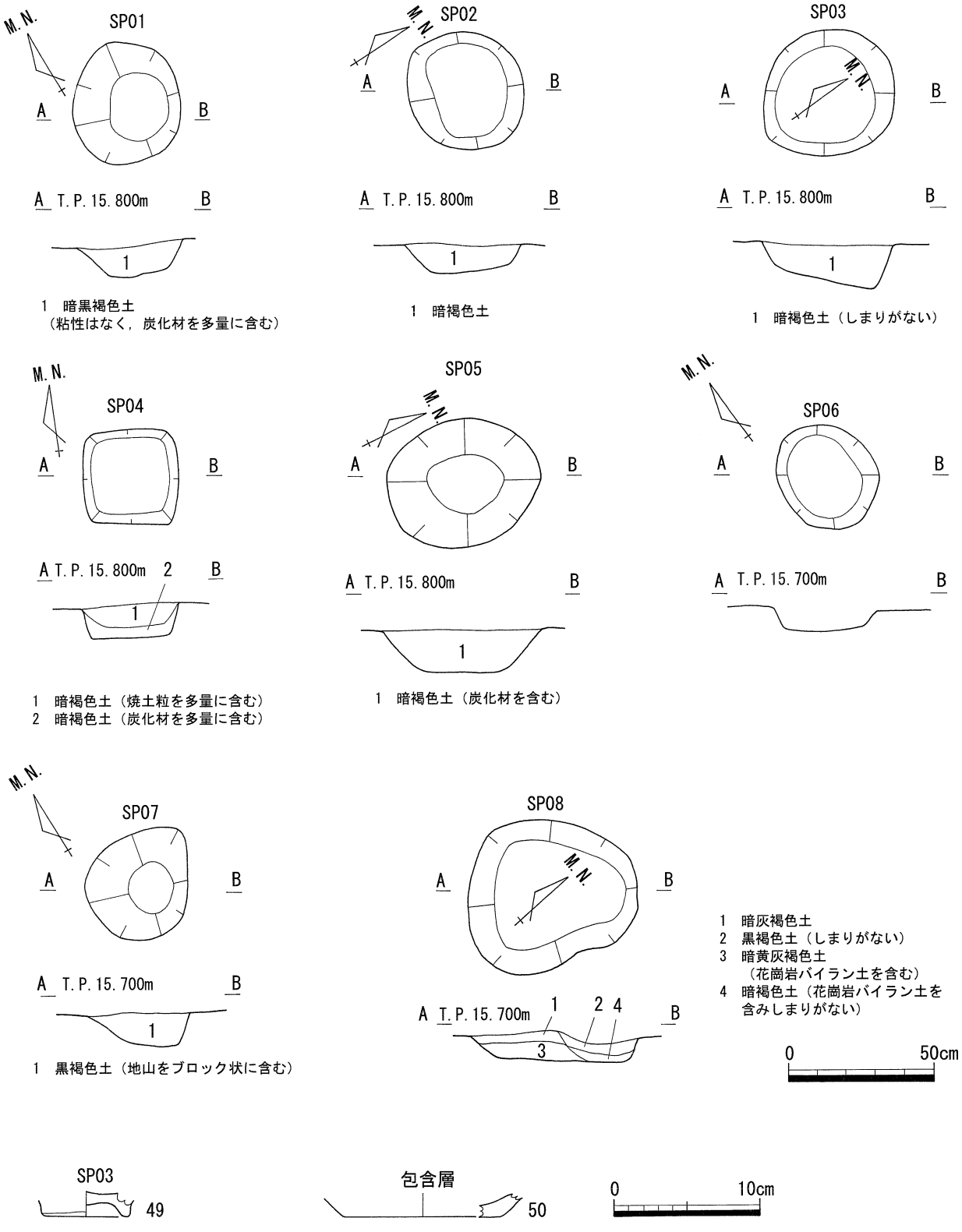
トレンチは地形の傾斜に沿うように北から南に緩やかに下がる。土層は３層であるが，大部分を占めるのは第１層の表土層と第２層の明灰褐色土・花崗岩バイラン土である。トレンチ中央部に第３層の明黄褐色土が薄く堆積する。検出した遺構は土坑５基・柱穴８基である。ＳＫ０４・０５は近代の陶磁器，土師質土器植木鉢，コンクリート，ビン，ＳＰ０４は土管のみが出土し，近代の遺構である。ＳＫ０１～０３とＳＰ０１～０３・０５～０８は出土遺物や検出状況および埋土から判断して近世のものと考えられる。ＳＰ０３は陶器碗（第28図49），ＳＰ０６は鉄片が出土した。49は内面と畳付が無釉である。包含層からの出土遺物としては，土師質土器甕（第28図50），磁器碗，土師質土器杯，同植木鉢，瓦，鉄片がある。50は平底であり，内外面とも摩滅する。

Ｂトレンチ（第30・31図）

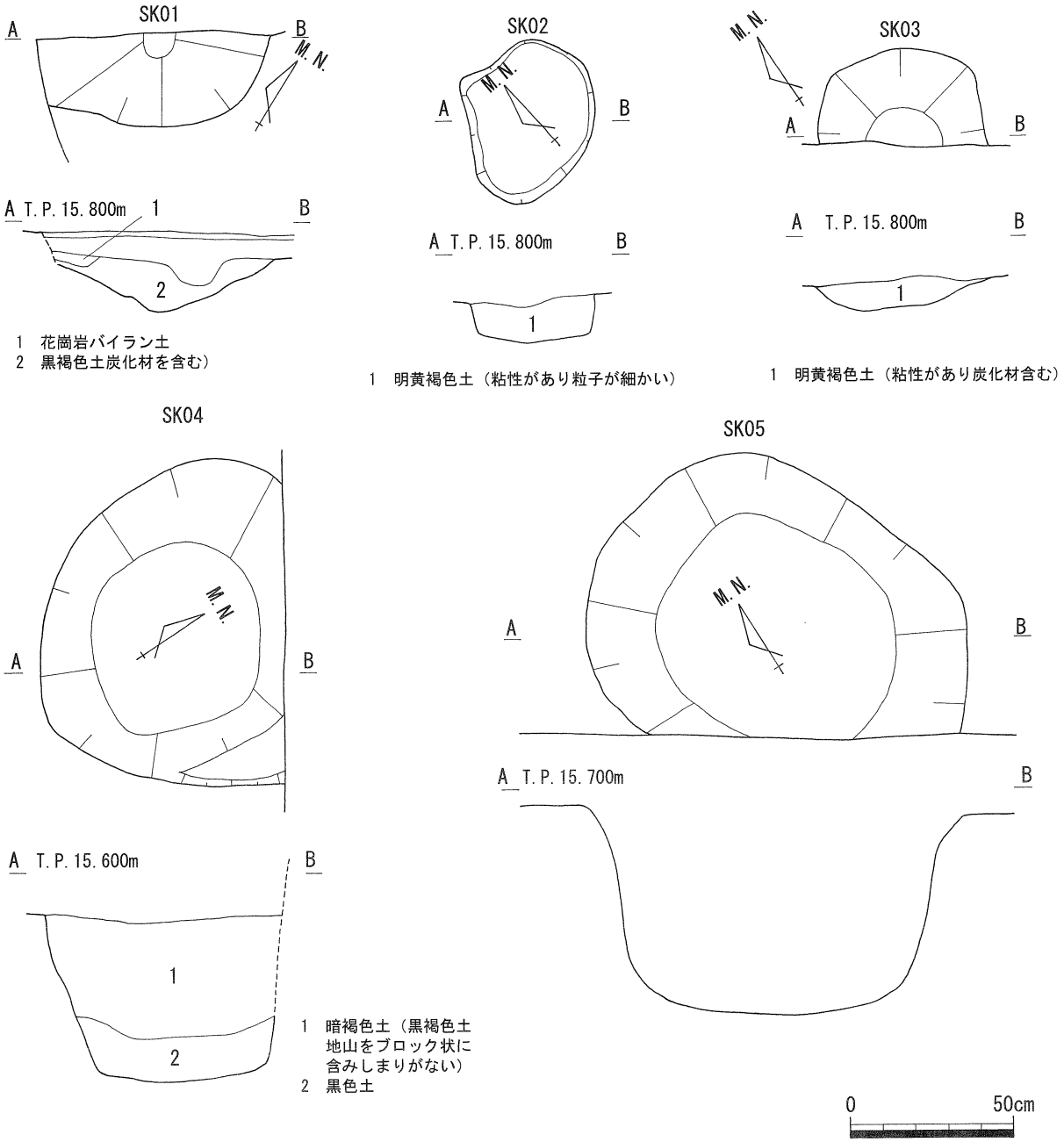
トレンチは両端が緩やかに下がる。土層の堆積状況はＡトレンチと同様であり，第１層の表土層と第２層の明灰褐色土・花崗岩バイラン土が大半である。西端では第３層の明黄褐色土が厚く堆積し，中央部と東端付近には第３層が薄く堆積する。東端付近では第２層の中に第３層がブロック状に混入した第４層がある。検出した遺構は土坑４基であり，ＳＫ０８は近代の陶磁器とコンクリート，ビン，タイルが出土し，他の土坑は出土遺物がないが，埋土がＳＫ０８と同一である。このことから，ＳＫ０６～０９は近代のものであると考えられる。包含層からの出土遺物は，磁器碗，陶器甕，土師質土器甕，同土管，瓦，鉄片があるが，図化できる遺物はなかった。



第27図　Ａトレンチ平・断面図（S=1/80）



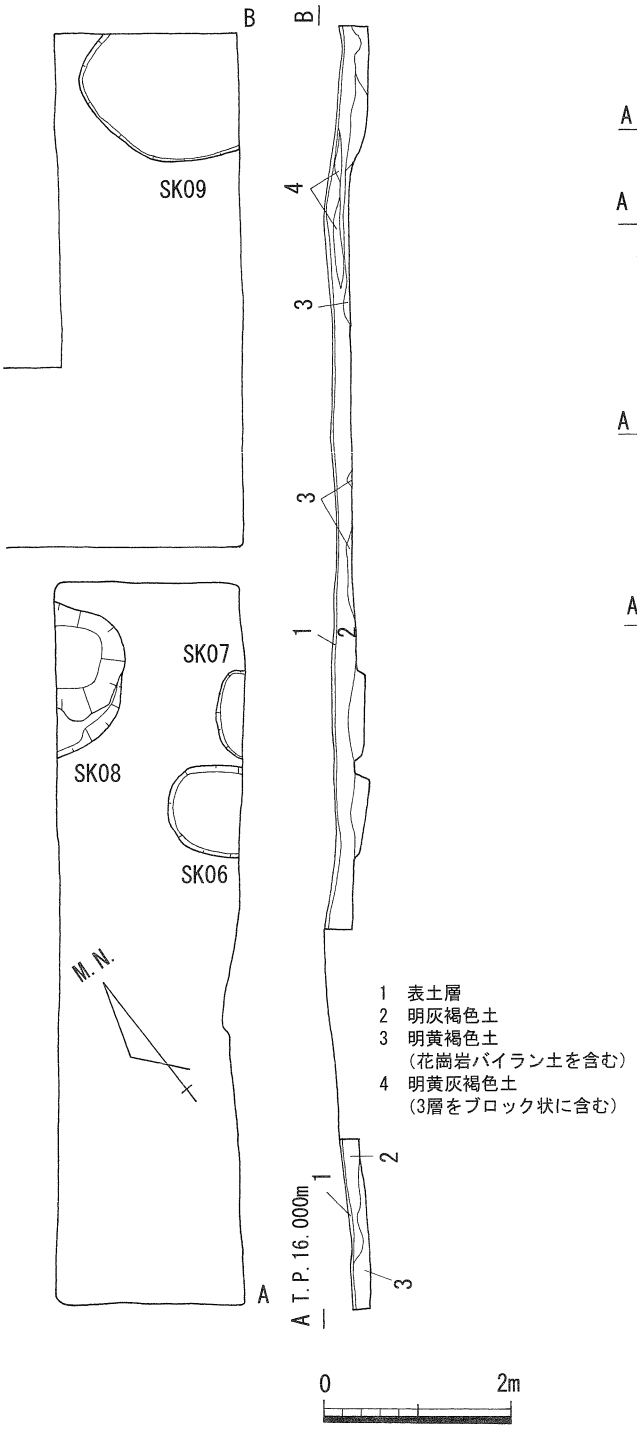
第28図　SP01～08平・断面図および出土遺物実測図（S=1/20・1/4）



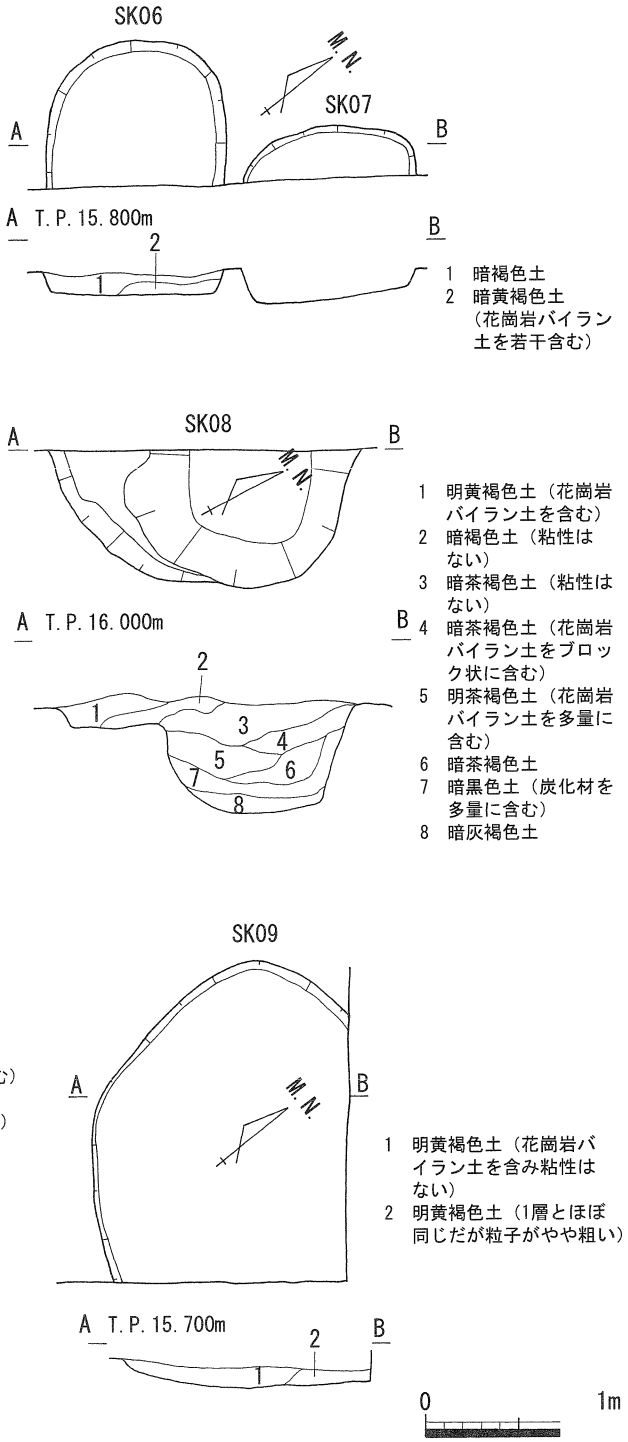
第29図　SK01～05平・断面図（S=1/20）

Cトレンチ（第32図）

トレンチは50cmの比高差をもって南から北に向かって緩やかに低くなっている。土層の堆積は10層に細分できるが，第１層～第６層と第７層～第10層に大別される。第１層～第６層は堆積状態が非常に乱れており，人為的であると考えられる。第７～10層は地山であり，グライ化や植物の根による影響などで細分できた。検出した遺構は土坑２基のみであり，近代の磁器碗，陶器火鉢，土師質土器甕，同焜炉（第32図52），ガラス瓶，ビニール線，瓦，釘が出土することから近代の遺構である。包含層から出土した遺物は磁器小鉢（第32図51）と数点の軟質陶器土瓶，土師質土器甕がある。



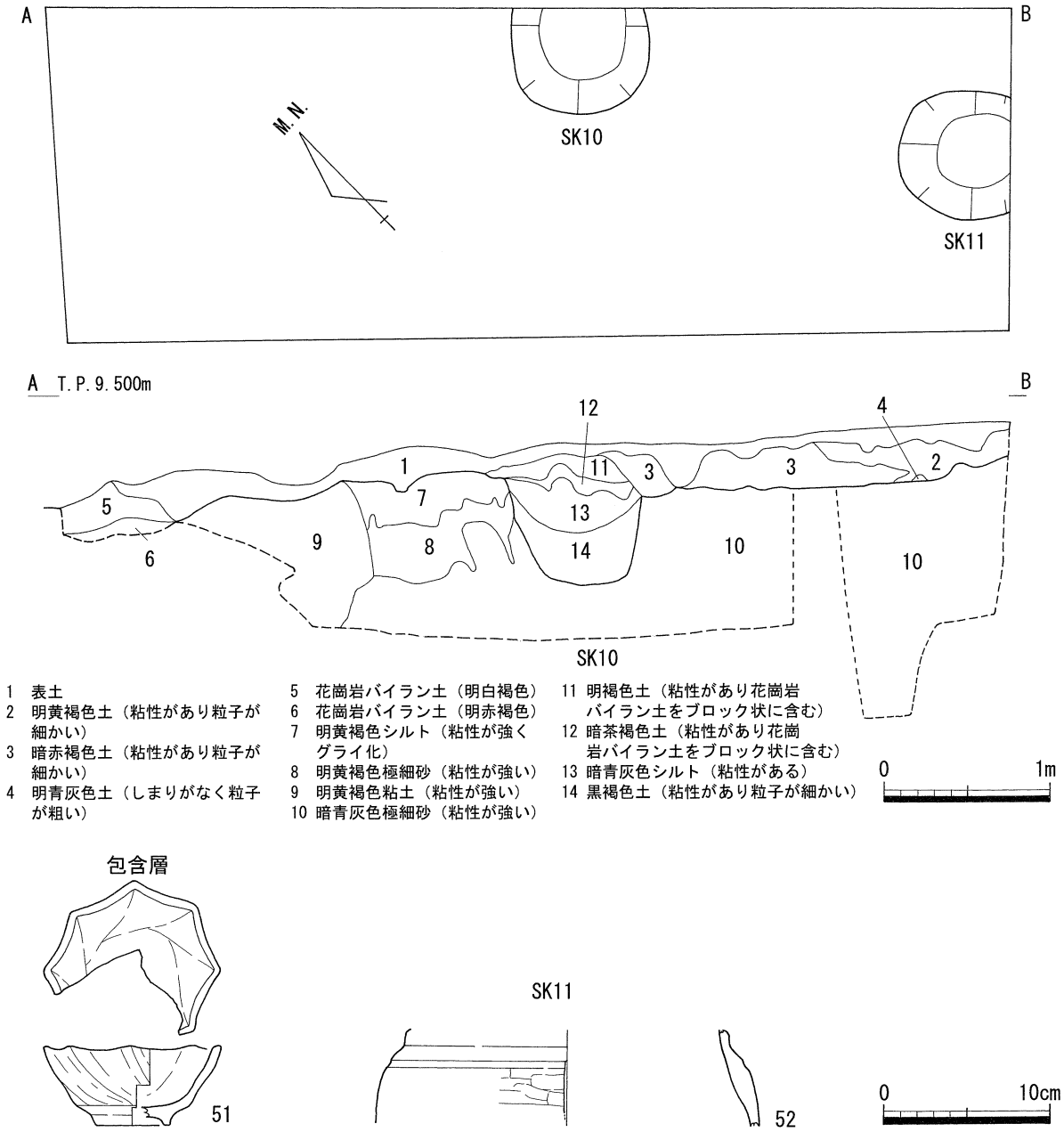
第30図　Ｂトレンチ平・断面図(S=1/80)



第31図　SK06～09平・断面図(S=1/40)

Ｄトレンチ（第33図）

トレンチは南端から北へ１ｍまで30cmの比高差で低くなり，北側は平坦である。土層の堆積は４層に細分できるが，耕作土の第１層と暗褐色土の第２層が大半である。検出した遺構は土坑２基と柱穴３基である。ＳＫ１２とＳＫ１３はほぼ同一の埋土であり，軟質陶器土瓶（第33図53），染付碗（第33図54），陶器擂鉢（第33図55），土師質土器甕，鉄片，コンクリート，タイル，スレートが出土し，近代の遺構である。54は外面と見込みに染付がある。55は内面全面に卸目があり，外面には灰褐色の釉がかかる。ＳＰ０９～１１は黒褐色土の埋土であり，ＳＰ０９は肥前系磁器皿（第33図56）が出土しており，柱穴は近世のものと考えられる。

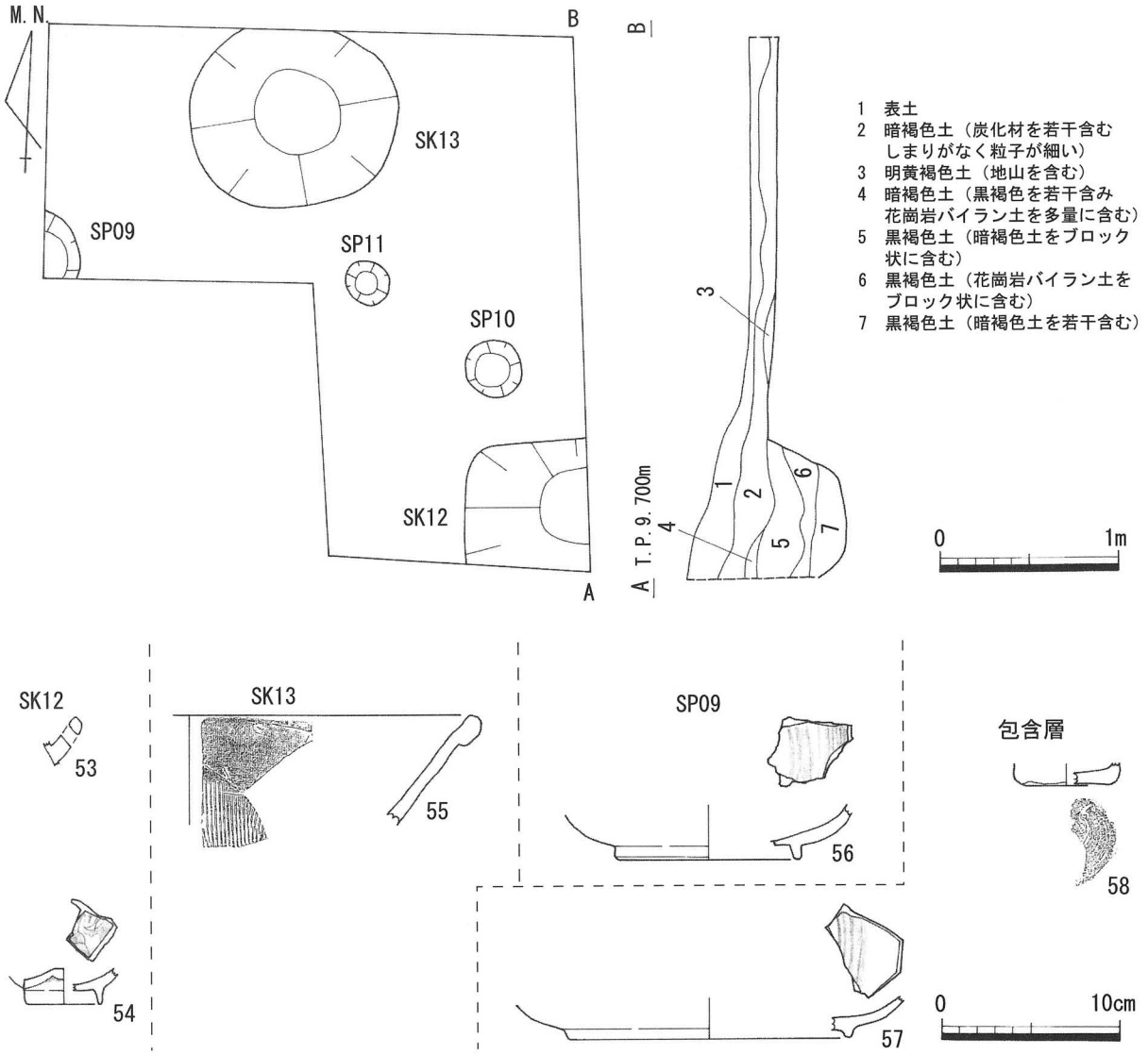


第32図　Ｃトレンチ平・断面図および出土遺物実測図（S=1/40・1/4）

56は内面に白色刷毛目が見られる。包含層から出土した遺物は肥前系磁器皿(第33図57)，土師質土器杯（第33図58），数点の陶磁器片，土師質土器甕，鉄片である。57は肥前系磁器で見込みに淡青色の染付がある。58は底部に回転糸切りが残る。

Ｅトレンチ（第34図）

トレンチは40cmの比高差で南から北に向かって緩やかに下がっている。基本的な土層は表土，炭化材を含む暗黒褐色土，炭化材を多量に含む暗黒褐色土の３層である。検出した遺構は溝２条と柱穴２基である。遺構から遺物は出土していないが，埋土から判断して近世のものと考えられる。包含層からの出土遺物は軟質陶器土瓶（第34図59）のみである。



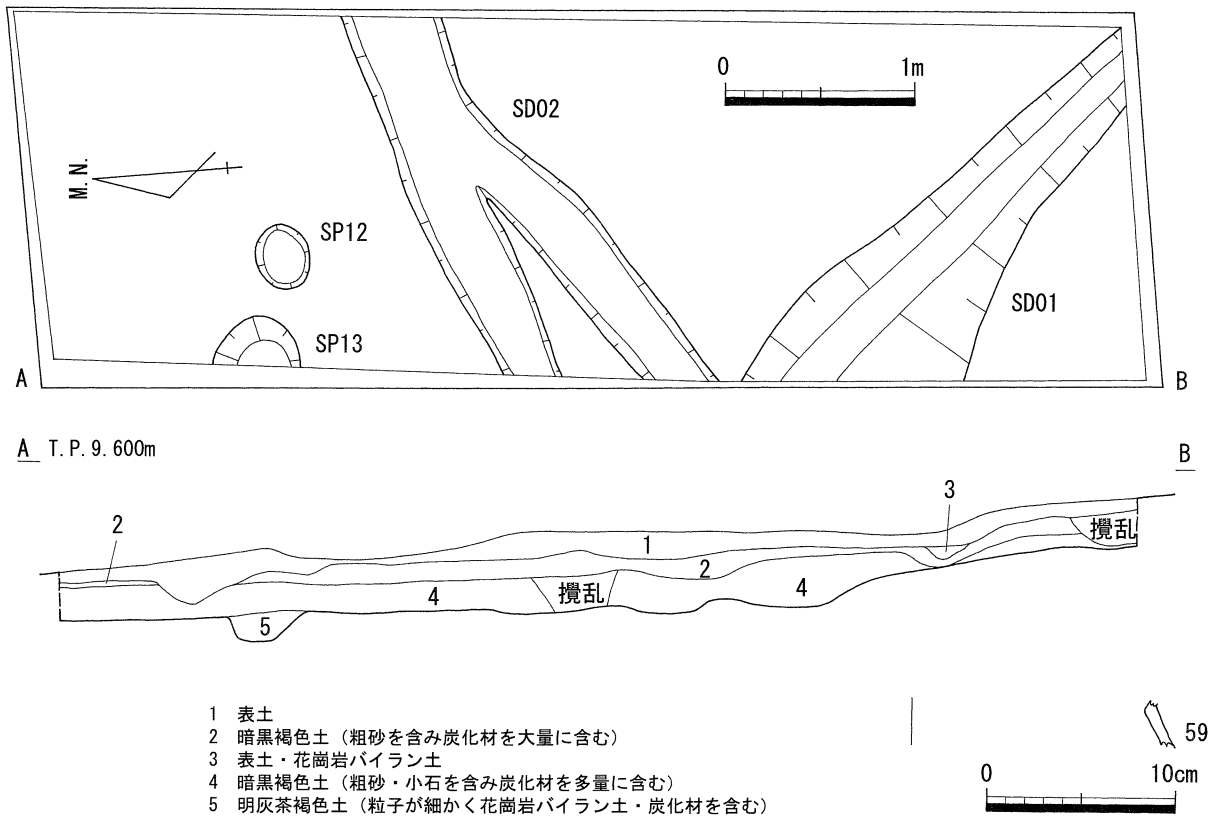
第33図　Ｄトレンチ平・断面図および出土遺物実測（S=1/40・1/4）

Ｆトレンチ（第35図）

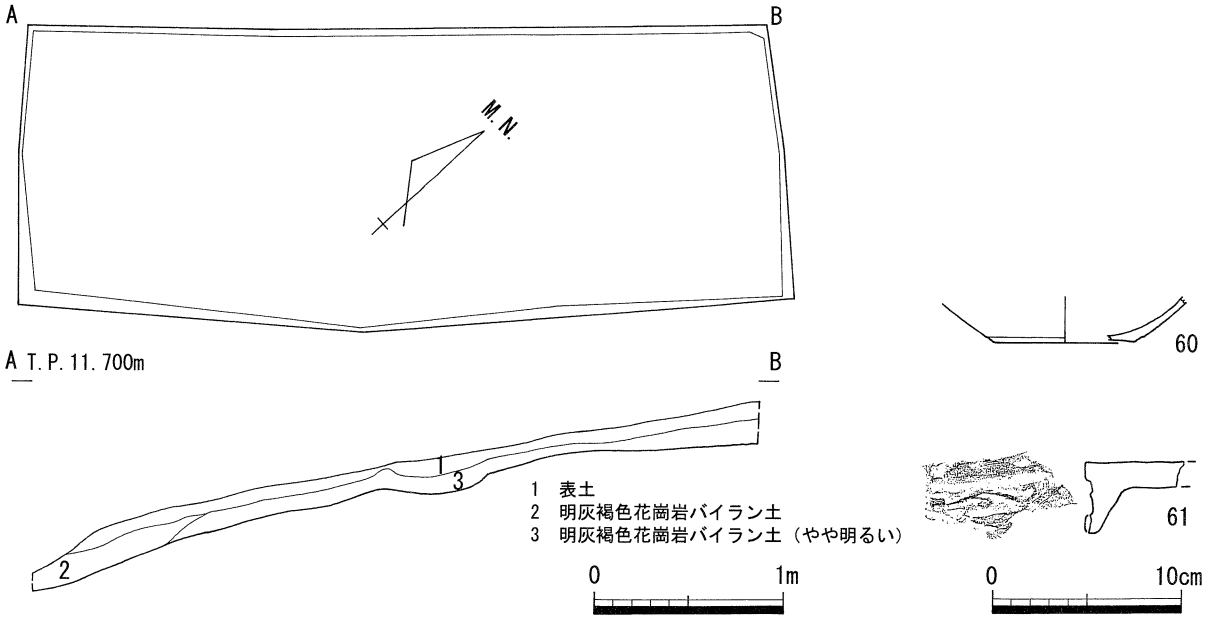
トレンチは90cmの比高差で北から南に向かって下がっている。土層は表土，花崗岩バイラン土，明灰褐色土を含む花崗岩バイラン土の３層であり，地山の傾斜に沿うように堆積する。遺構の検出はなく，包含層からの出土遺物は軟質陶器土瓶（第35図60），軒平瓦（第35図61）のみである。60は底径7.4cmの土瓶であり，内外面にナデが施される。61は内区に一重の唐草文を有する。

Ｇトレンチ（第36図）

トレンチは20cmの比高差で東から西に向かって緩やかに下がっている。土層は表土，花崗岩バイラン土を含む暗黄褐色土，締りがなく粒子の粗い暗褐色土，地山を多量に含む暗黄褐色土，暗黄褐色土の５層である。検出した遺構は土坑１基である。出土遺物はないため時期特定は難しいが，埋土や検出状況から近世のものと考えられる。包含層からの遺物の出土もない。



第34図　Ｅトレンチ平・断面図および出土遺物実測図（S=1/40・1/4）



第35図　Ｆトレンチ平・断面図および出土遺物実測図（S=1/40・1/4）

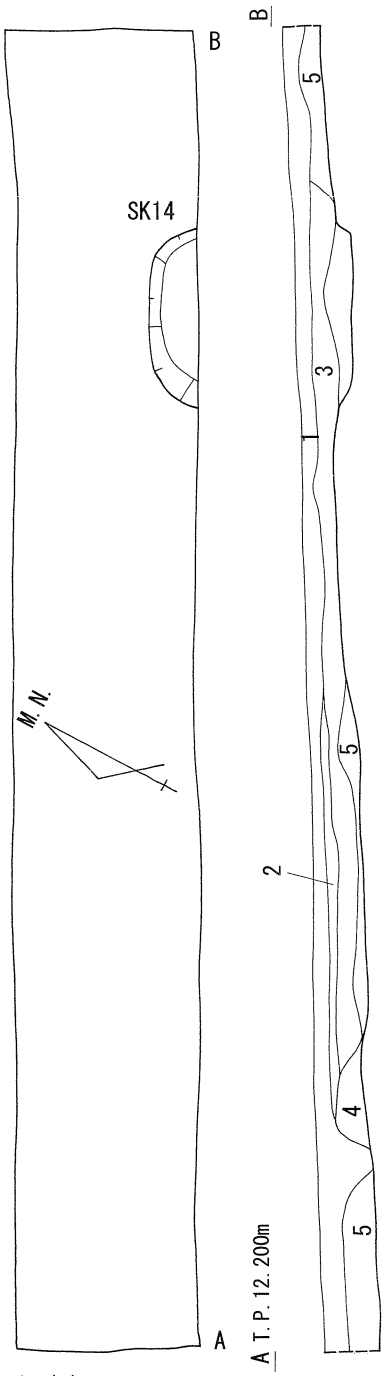
Ｈトレンチ

トレンチはほとんど水平であり，土層はＡ・Ｂトレンチと同様に表土層と花崗岩バイラン土を含み粘性の弱い明灰褐色土の２層である。遺構は全く検出できず，包含層からも遺物は出土しなかった。

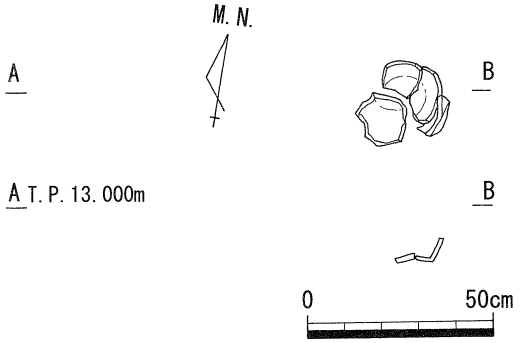
蔵骨器（第37・38図，第３表）

蔵骨器は土師質土器製であり，礫石経の約１ｍ西側の斜面が削平地に移行する変換点において検出した。検出面の標高は12.95ｍである。地上に標識としての墓塔や墓碑は見られず，蔵骨器を埋納するための土壙も検出できなかった。蔵骨器の内部には人骨の一部が残存していた。蔵骨器は礫石経と隣接する位置にあり，両者には密接な関連が存在すると考えられる。

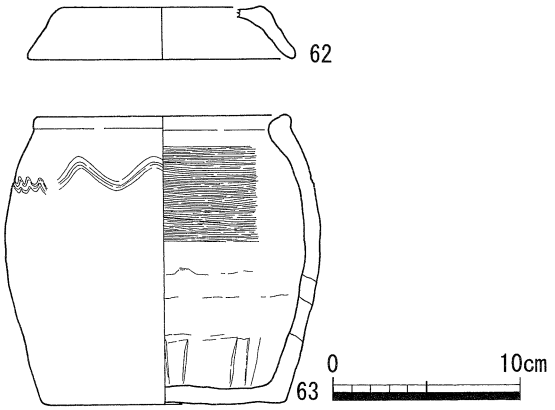
第38図62は蔵骨器の蓋であり，色調・胎土ともに63と同一である。口径は14.0cm，底径10.8cm，器高2.8cmを測る。口縁部外面はヨコナデ，体部外面と内面はナデが施される。63は土師質土器の蔵骨器であり，口径13.8cm，底径13.0cm，器高15.0cmを測る。口縁部が僅かに外反する。口径と底径がほぼ同じである。口縁部はヨコナデ，体部外面と底部外面はナデが施され，体部外面上半に２種類の波状文が施される。体部内面上半は横方向の刷毛，下半はヘラナデが施されている。



第36図　Ｇトレンチ平・断面図（S=1/40）



第37図　蔵骨器出土状況実測図（S=1/20）



第38図　蔵骨器実測図（S=1/4）

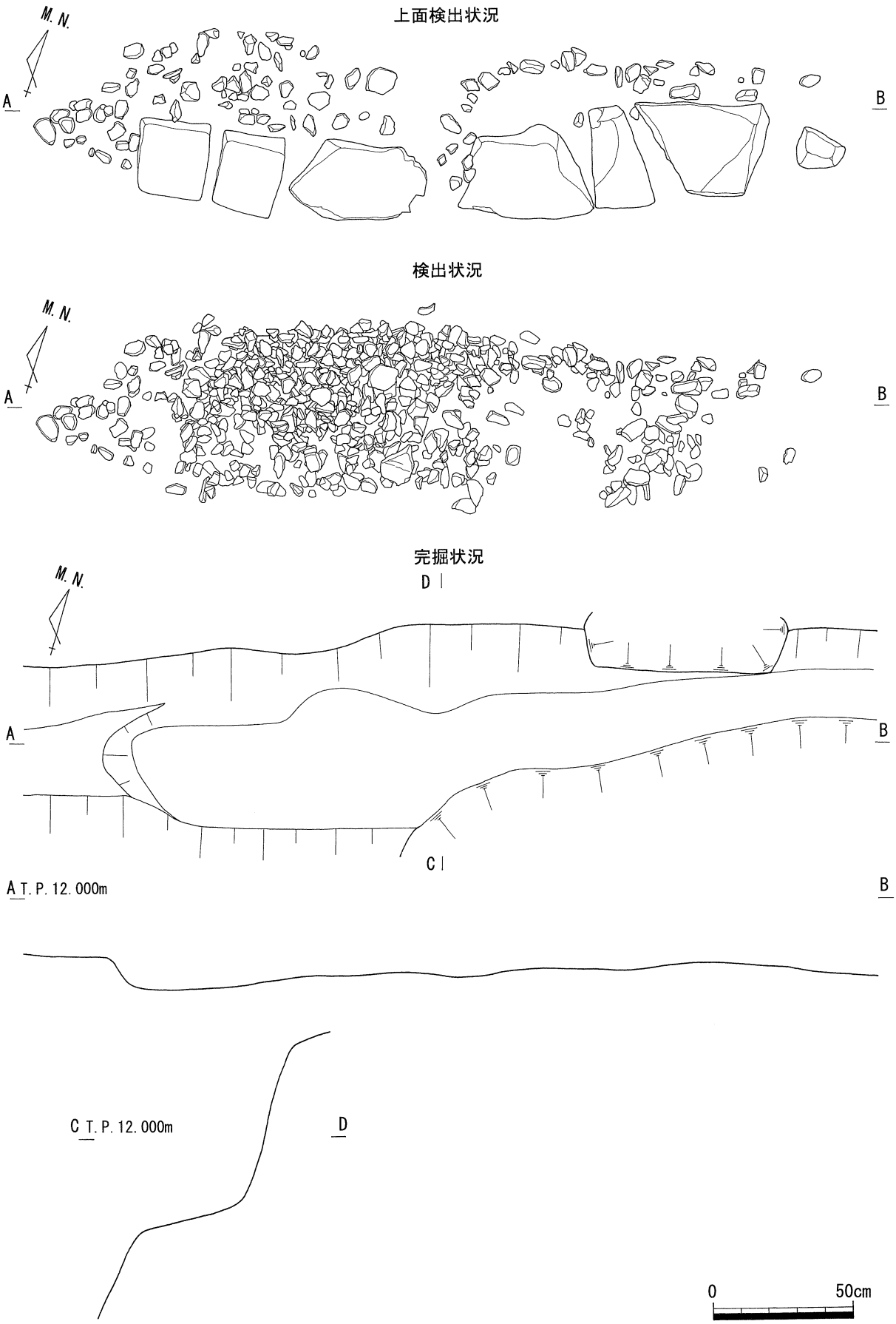
礫石経（第39図，第３表，図版８～20）

礫石経は，南側削平地の中央部に存在する18基の墓標の背側において礫石経の一部が露出した状態で検出した。検出地点は斜面が削平地に移行する変換点にあたり，斜面を大きく削平したテラス状の平坦部に礫石経が埋納されていた。地上には経塚としての墳丘はなく，標識である経碑も見られず，文字の書かれた石が集積するのみであった。検出上面には墓標の基礎である正方形の集塊岩２石と板状の安山岩５石がほぼ直線的に並べられていた。この７石のレベルは約20cmの比高差で西側から東側に低くなる。礫石経は全長2.90m，幅70cm，厚さ40cmを測る規模の帯状を呈するが，中央から西側１mまでの範囲に礫石が集中している。礫石は大部分が川原石であるが，非常に僅かであるが花崗岩の割石も使用されている。礫石の大きさは長径２～15.5cmを測り不定である。礫石を取り除いた状態の掘り方は，斜面を２段に大きく削平して細長いテラス状の平坦部を作り，さらに平坦部を10cm掘り下げている。底面は非常に緩やかな傾斜で東側に向かって上がり，東側の掘り込みは不明瞭である。

出土した礫石経の総数は814個であり，その内訳は文字が判読できるものは534個，文字はあるが判読できないもの134個，文字のないもの146個である。礫石経の大部分が１石に１字ずつ墨書した一字一石経であるが，１石に多数の文字を墨書した多字一石経も数例ある。一字一石経の文字の種数は31であり，その中で最も多く見られるのは「摩」「羅」である。多字一石経として，図版８－49は表面に「南無阿弥陀佛」，裏面には「妙林」「妙雲」，図版11－220は石の３面に「南無阿弥陀佛」「南無阿弥陀佛」「南無阿陀」と書いている。「南無阿弥陀佛」と書かれた他の礫石の裏にも「妙法」「真心」などの供養者の名が見られる。書写された経典はあきらかではないが，一般的には法華経を書写した礫石経が多い。ただ，前述したように「南無阿弥陀佛」と墨書した礫石が17個あり，法華経以外の経典も書写されている。経碑や年号のある礫石や共伴遺物がないため築造年代は不明である。

第２表　作山城跡礫石経文字別個数表

文字	数	文字	数	文字	数
摩	６２	謨	２０	韈	8
羅	５１	尼	１９	韈	4
鉢	３８	野	１８	佛	3
尾	２８	南無阿弥陀佛	１７	南	1
阿	２６	縛	１６	南無	1
入	２４	廬	１６	陀	1
捺	２３	曩	１６	弥	1
納	２２	左	１６	蔵	1
犀	２２	伽	１４	唵	1
母	２１	多	１３		
吽	２０	訶	１１		



第39図　礫石経平・断面図（S=1/20）

第３表　作山城跡出土礫石経一覧表

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
1	9.0	6.5	3.0	安山岩	野
2	6.5	4.3	2.2	安山岩	韆
3	7.0	4.6	2.5	安山岩	羅
4	4.0	3.5	2.0	安山岩	納
5	4.0	3.2	2.0	安山岩	摩
6	7.0	4.5	2.0	安山岩	羅
7	3.6	3.5	1.2	石英斑岩	墨書なし
8	7.0	4.0	3.0	安山岩	多
9	7.5	6.5	2.0	安山岩	摩
10	4.0	3.0	2.5	安山岩	墨書なし
11	3.0	3.5	1.5	石英片岩	判読不可
12	8.0	3.5	2.5	安山岩	唵
13	8.0	6.0	3.0	安山岩	墨書なし
14	4.0	3.0	3.0	砂岩	羅
15	9.0	4.8	2.3	安山岩	野
16	6.0	6.0	2.5	砂岩	摩
17	9.0	6.3	1.2	砂岩	謨
18	9.0	5.0	3.5	砂岩	摩
19	6.0	3.5	2.5	砂岩	墨書なし
20	7.0	4.0	3.0	砂岩	判読不可
21	8.3	5.0	2.3	安山岩	野
22	4.2	3.4	0.8	砂岩	鉢
23	4.2	4.0	1.1	安山岩	捺
24	7.0	4.0	2.0	安山岩	縛
25	7.7	2.0	1.5	安山岩	多
26	4.2	3.0	2.0	砂岩	墨書なし
27	8.0	6.0	2.8	安山岩	鉢
28	4.5	3.0	3.0	安山岩	墨書なし
29	8.5	4.2	3.5	安山岩	墨書なし
30	5.5	3.5	2.5	安山岩	墨書なし
31	8.6	4.5	2.2	安山岩	廛
32	7.1	4.0	2.0	安山岩	尾
33	6.5	5.6	2.5	安山岩	羅
34	4.7	4.0	2.0	安山岩	判読不可
35	6.3	3.5	2.5	安山岩	判読不可
36	6.0	3.8	1.5	砂岩	判読不可
37	4.8	5.0	3.5	砂岩	判読不可
38	5.0	3.2	1.2	安山岩	鉢
39	4.2	3.0	2.0	砂岩	墨書なし
40	3.5	3.0	2.1	砂岩	摩
41	8.0	6.0	4.5	安山岩	判読不可
42	5.0	4.5	2.3	安山岩	墨書なし
43	9.0	4.8	3.2	砂岩	廛
44	7.6	3.5	2.0	安山岩	羅
45	5.5	3.0	1.8	安山岩	墨書なし
46	6.0	3.8	3.6	安山岩	入
47	7.5	5.0	1.5	安山岩	判読不可
48	3.8	4.2	2.0	砂岩	摩
49	6.5	3.0	3.0	安山岩	羅
50	14.0	5.5	2.8	砂岩	墨書なし
51	5.4	4.5	2.2	安山岩	墨書なし
52	6.0	6.0	2.3	安山岩	納
53	7.8	5.7	2.3	安山岩	墨書なし
54	8.0	7.0	3.5	安山岩	判読不可
55	3.0	1.6	1.3	安山岩	墨書なし
56	6.5	4.0	3.0	安山岩	納
57	5.0	4.2	2.0	安山岩	羅
58	7.0	4.0	4.0	安山岩	韆
59	7.3	7.0	2.0	砂岩	曩
60	7.0	3.7	2.1	安山岩	判読不可
61	7.0	6.0	5.0	砂岩	墨書なし
62	2.5	5.0	2.0	砂岩	伽
63	4.0	3.5	2.0	安山岩	墨書なし
64	8.0	7.5	3.0	安山岩	判読不可
65	6.8	4.3	1.5	安山岩	判読不可
66	6.0	4.6	1.5	砂岩	判読不可
67	8.2	7.3	2.0	砂岩	判読不可
68	7.0	4.5	1.8	砂岩	判読不可
69	6.0	4.2	2.5	安山岩	判読不可
70	3.6	3.0	1.2	泥灰岩	摩
71	5.0	2.0	3.0	安山岩	墨書なし
72	5.6	4.5	3.5	安山岩	墨書なし
73	5.5	5.0	2.3	安山岩	入
74	4.6	3.0	1.3	安山岩	納
75	9.5	5.5	3.2	石英斑岩	縛
76	4.0	4.0	1.7	安山岩	伽
77	3.2	4.2	2.0	安山岩	羅
78	8.6	5.7	2.0	安山岩	判読不可
79	7.0	6.0	3.0	安山岩	墨書なし
80	7.0	5.3	4.3	砂岩	韆
81	6.0	5.0	2.6	堆積岩	墨書なし
82	10.0	6.8	4.0	安山岩	羅
83	4.1	3.0	3.1	安山岩	尾
84	6.5	5.0	4.0	安山岩	羅
85	6.0	5.5	3.0	安山岩	母
86	7.2	4.0	1.3	安山岩	(表)南無阿弥陀佛　(裏)妙□妙□
87	5.0	3.0	2.5	安山岩	墨書なし
88	8.0	3.5	2.8	安山岩	墨書なし
89	6.5	4.4	2.0	砂岩	判読不可
90	7.0	6.0	3.0	砂岩	判読不可
91	5.4	3.5	2.5	砂岩	鉢
92	4.2	3.0	3.0	砂岩	墨書なし
93	4.0	3.1	1.2	砂岩	摩
94	3.6	3.0	2.0	安山岩	墨書なし
95	9.0	4.2	2.2	安山岩	(表)南無阿弥陀佛　(裏)□□
96	3.0	3.3	3.0	安山岩	摩
97	6.0	3.2	2.0	砂岩	羅
98	6.0	3.5	2.5	安山岩	阿
99	8.0	4.5	3.5	砂岩	墨書なし
100	6.0	5.0	2.5	砂岩	廛
101	2.5	2.5	2.0	安山岩	墨書なし
102	3.0	2.5	1.2	砂岩	墨書なし
103	9.0	5.0	6.0	砂岩	墨書なし
104	6.9	4.8	3.0	砂岩	縛
105	7.0	3.3	2.0	安山岩	尼
106	4.0	3.0	2.5	砂岩	判読不可
107	3.5	3.5	2.0	安山岩	判読不可
108	9.0	4.0	3.0	玄武岩	墨書なし
109	5.5	3.6	3.0	砂岩	墨書なし
110	9.0	7.3	3.0	砂岩	墨書なし
111	7.0	4.0	2.0	砂岩	謨
112	5.3	5.0	3.5	安山岩	阿
113	10.0	6.5	1.5	安山岩	捺
114	5.6	4.3	3.3	安山岩	羅
115	5.6	4.6	2.5	安山岩	墨書なし
116	6.0	6.0	2.5	安山岩	判読不可
117	3.0	1.5	2.2	安山岩	判読不可
118	6.3	3.5	3.5	安山岩	羅
119	2.1	2.0	1.3	安山岩	墨書なし
120	5.0	2.3	1.2	砂岩	墨書なし
121	7.6	5.0	2.6	砂岩	弥
122	5.0	5.0	5.0	安山岩	摩
123	7.0	3.6	3.6	安山岩	墨書なし
124	6.0	4.3	3.1	安山岩	判読不可
125	5.1	3.0	1.5	安山岩	入
126	7.0	3.5	2.0	砂岩	納
127	3.5	3.0	1.1	砂岩	墨書なし
128	4.0	2.3	1.8	砂岩	羅
129	6.0	4.5	1.7	安山岩	鉢
130	6.2	3.2	2.2	安山岩	判読不可
131	8.0	5.0	4.0	安山岩	摩
132	4.0	2.8	2.3	安山岩	母
133	10.5	6.0	2.3	安山岩	判読不可
134	7.1	3.3	1.5	安山岩	尾
135	3.3	3.0	0.4	砂岩	尾
136	6.5	4.0	3.0	砂岩	謨

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
137	4.0	3.0	2.0	砂岩	墨書なし
138	3.5	3.0	2.5	安山岩	判読不可
139	6.0	4.0	2.0	安山岩	阿
140	7.0	5.5	3.5	安山岩	謨
141	4.5	3.0	3.0	安山岩	捺
142	7.0	6.5	3.0	砂岩	唵
143	4.1	5.2	2.5	安山岩	判読不可
144	5.0	3.2	2.6	安山岩	吽
145	8.0	3.6	2.0	砂岩	判読不可
146	8.6	6.5	2.5	安山岩	佛
147	5.7	4.0	2.8	安山岩	阿
148	5.5	3.5	2.0	安山岩	墨書なし
149	4.0	4.0	3.0	安山岩	墨書なし
150	4.3	2.6	1.2	砂岩	吽
151	7.0	3.6	2.3	安山岩	判読不可
152	2.9	1.8	1.3	砂岩	羅
153	3.0	4.5	1.3	安山岩	尼
154	4.6	2.5	2.0	安山岩	墨書なし
155	4.5	3.0	3.0	砂岩	野
156	4.5	2.1	2.0	安山岩	尼
157	3.5	2.0	1.8	砂岩	判読不可
158	3.1	3.0	1.5	砂岩	吽
159	4.0	5.1	2.0	安山岩	羅
160	7.0	3.0	2.0	安山岩	野
161	4.1	4.0	2.0	砂岩	鉢
162	7.2	7.0	2.5	砂岩	摩
163	5.0	4.0	2.3	安山岩	尼
164	6.0	5.0	2.5	砂岩	墨書なし
165	3.7	3.0	2.0	砂岩	墨書なし
166	4.5	3.6	3.0	安山岩	入
167	5.3	3.1	2.8	安山岩	尾
168	6.0	6.0	2.3	砂岩	判読不可
169	6.5	4.6	4.0	安山岩	吽
170	4.5	6.2	3.0	安山岩	野
171	8.0	3.5	2.0	安山岩	摩
172	5.0	4.5	3.1	安山岩	墨書なし
173	5.0	2.0	2.0	砂岩	入
174	3.0	3.5	2.0	砂岩	墨書なし
175	3.2	2.5	2.0	砂岩	母
176	7.0	3.6	1.0	砂岩	謨
177	5.6	3.5	2.5	砂岩	廬
178	8.0	4.5	3.0	安山岩	訶
179	6.5	3.5	2.5	安山岩	伽
180	8.1	6.7	2.0	砂岩	吽
181	3.2	2.0	1.2	安山岩	判読不可
182	8.3	5.5	2.3	砂岩	謨
183	6.5	4.5	2.0	安山岩	摩
184	5.0	3.2	2.0	安山岩	廬
185	6.5	3.0	2.3	安山岩	墨書なし
186	6.0	4.5	1.8	安山岩	羅
187	5.5	4.0	2.8	安山岩	判読不可
188	7.3	4.0	2.0	安山岩	吽
189	8.7	4.9	1.8	砂岩	判読不可
190					191と接合
191	6.8	2.5	1.6	安山岩	母
192	10.5	7.0	3.0	安山岩	(表)南無阿弥陀佛　妙法　真心
193	3.7	2.6	1.5	安山岩	入
194	4.8	2.5	2.3	砂岩	墨書なし
195	6.0	5.5	2.0	安山岩	判読不可
196	5.3	4.3	2.3	安山岩	尼
197	3.5	3.5	2.0	安山岩	納
198	4.5	3.0	2.3	安山岩	摩
199	5.3	3.0	1.5	安山岩	捺
200	6.5	3.8	2.3	安山岩	鉢
201	6.5	4.0	3.0	砂岩	墨書なし
202	7.0	4.0	5.0	安山岩	廬
204	6.0	4.0	1.3	安山岩	墨書なし

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
205	6.0	3.2	1.0	安山岩	捺
206	7.0	3.0	2.5	安山岩	摩
207	5.6	5.1	1.8	安山岩	尾
208	4.0	3.1	2.0	安山岩	摩
209	3.3	3.0	2.1	安山岩	判読不可
210	4.3	3.0	1.5	安山岩	多
211	8.0	6.0	3.0	安山岩	尼
212	6.0	5.0	3.0	花崗岩	納
213	7.0	5.5	3.0	安山岩	阿
214	7.0	6.0	4.0	安山岩	阿
215	5.0	3.0	2.6	砂岩	多
216	7.5	5.0	5.5	安山岩	判読不可
217	9.3	4.5	2.0	安山岩	南無□□□□
218	7.0	4.0	2.0	安山岩	尾
219	4.5	3.5	1.7	安山岩	吽
220	10.5	3.0	2.5	安山岩	南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛　南無阿陀
221	5.0	3.5	1.0	安山岩	尼
222	7.6	4.0	2.0	安山岩	廬
223	5.0	2.5	1.6	安山岩	尾
224	3.0	2.5	2.0	安山岩	墨書なし
225	15.5	5.0	4.0	砂岩	(表)南無阿弥陀仏　妙智　(裏)蔵
226	6.5	4.6	5.0	安山岩	伽
227	4.0	4.0	2.5	安山岩	尼
228	4.4	2.6	1.5	安山岩	摩
229	10.0	7.0	1.8	安山岩	判読不可
230	3.5	3.5	2.5	安山岩	摩
231	5.4	4.3	1.7	安山岩	羅
232	3.0	1.5	1.0	砂岩	判読不可
233	7.0	6.0	2.8	安山岩	縛
234	5.0	4.0	2.0	安山岩	訶
235	8.5	4.5	3.0	安山岩	判読不可
236	10.3	6.3	2.0	安山岩	南無□□□　妙□　□□
237	3.7	3.3	1.3	安山岩	納
239	5.7	3.0	2.5	安山岩	謨
240	5.8	3.5	2.2	安山岩	伽
241	3.5	2.5	1.5	安山岩	尼
242	4.5	2.0	1.0	安山岩	墨書なし
243	8.5	6.5	4.0	砂岩	判読不可
244	7.0	4.5	2.5	花崗岩	唵
245	7.0	5.0	3.0	安山岩	判読不可
246	6.1	2.7	1.5	砂岩	阿
247	6.8	2.7	2.0	砂岩	尼
248	6.5	5.0	1.0	安山岩	判読不可
249	7.3	4.5	2.0	花崗岩	鉢
250	6.5	3.0	2.2	安山岩	鉢
251	7.5	5.2	3.1	砂岩	曩
252	3.5	2.5	2.5	安山岩	納
253	5.0	2.5	2.5	安山岩	墨書なし
254	6.5	3.7	1.5	砂岩	羅
255	4.5	3.0	2.0	安山岩	墨書なし
256	8.0	5.0	3.5	安山岩	墨書なし
257	7.3	2.8	1.5	砂岩	阿
258	7.0	4.0	2.5	安山岩	摩
259	4.5	2.5	1.5	安山岩	判読不可
260	3.5	3.0	1.0	安山岩	墨書なし
261	6.5	3.5	2.2	安山岩	判読不可
262					261と接合
263	3.8	2.6	1.7	安山岩	判読不可
264	5.0	3.0	2.0	砂岩	摩
265	8.0	6.4	2.4	砂岩	鉢
266	4.1	3.5	1.8	安山岩	阿
267	6.0	3.5	3.0	安山岩	墨書なし
268	8.4	2.6	3.0	安山岩	入
269	4.6	2.1	1.5	安山岩	判読不可
270	5.0	5.0	2.0	花崗岩	阿
271	8.5	4.5	2.8	安山岩	野
272	3.6	3.6	3.0	安山岩	摩

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
273	7.0	5.0	2.0	砂岩	唵
274	5.7	3.4	1.3	砂岩	摩
275	2.5	3.5	2.0	安山岩	墨書なし
276	4.1	3.1	1.5	砂岩	判読不可
277	3.0	2.5	1.2	安山岩	入
278	4.5	3.0	2.0	砂岩	訶
279	5.5	4.5	1.5	砂岩	尨
280	5.3	4.2	2.0	安山岩	摩
281	3.5	2.3	0.9	安山岩	曩
282	4.3	4.5	2.4	安山岩	吽
283	6.5	5.0	3.0	砂岩	尼
284	6.8	3.2	3.0	砂岩	縛
285	6.5	4.5	3.0	安山岩	判読不可
286	10.0	5.5	3.2	安山岩	訶
287	8.5	6.1	3.5	安山岩	謨
288	6.0	3.5	2.0	安山岩	訶
289	4.3	2.6	1.5	安山岩	尾
290	4.0	3.0	1.5	砂岩	墨書なし
291	4.0	3.6	2.0	安山岩	判読不可
292	8.0	3.5	2.0	安山岩	摩
293	12.0	8.0	2.5	安山岩	(表)南無阿弥陀佛 (裏)□□□
294	3.5	3.5	1.8	砂岩	墨書なし
295	8.3	6.0	3.3	安山岩	判読不可
296	4.0	5.5	1.0	砂岩	羅
297	7.5	5.0	3.0	安山岩	南無阿弥陀佛
298	3.0	3.0	1.1	砂岩	墨書なし
299	6.5	3.5	1.7	安山岩	判読不可
300	4.2	3.0	1.2	砂岩	摩
301	7.0	5.0	3.0	砂岩	羅
302	6.0	3.0	3.0	安山岩	墨書なし
303	10.5	5.5	3.5	安山岩	墨書なし
304	4.5	2.0	1.8	安山岩	納
305	4.6	3.5	2.0	砂岩	捺
306	3.7	3.1	1.0	安山岩	判読不可
307	6.0	3.1	4.0	安山岩	納
308	7.0	4.5	3.0	安山岩	尾
309	4.0	3.0	1.8	安山岩	母
310	4.5	4.2	3.0	安山岩	伽
311	8.0	6.0	2.5	安山岩	墨書なし
312	9.0	5.2	3.0	砂岩	墨書なし
313	4.0	3.0	3.0	花崗岩	墨書なし
314	9.0	5.0	3.0	安山岩	判読不可
315	7.3	3.7	2.0	花崗岩	墨書なし
316	10.5	6.0	4.5	安山岩	羅
317	5.3	2.6	2.3	安山岩	墨書なし
318	3.5	2.0	2.0	花崗岩	墨書なし
319	3.0	3.0	3.0	安山岩	尼
320	3.5	3.0	1.8	安山岩	鉢
321	3.5	2.3	1.3	安山岩	入
322	6.2	5.0	2.0	砂岩	吽
323	8.0	4.8	2.0	安山岩	陀
324	3.7	2.5	3.0	安山岩	唵
325	7.5	5.5	2.0	砂岩	判読不可
326	4.5	3.0	2.0	安山岩	墨書なし
327	6.0	3.0	1.5	安山岩	判読不可
328	6.3	3.5	2.5	安山岩	韈
329	8.3	3.5	2.3	安山岩	判読不可
330	5.3	4.0	2.5	安山岩	多
331	5.5	2.5	1.0	安山岩	墨書なし
332	5.5	4.0	2.6	砂岩	尾
333	3.5	3.5	1.3	砂岩	入
334	6.0	4.5	2.5	砂岩	納
335	3.5	3.0	2.0	安山岩	摩
336	4.6	2.8	1.5	砂岩	伽
337	5.6	3.3	1.0	砂岩	尾
338	4.6	2.8	1.3	砂岩	判読不可
339	4.0	3.1	1.6	砂岩	多
340	8.0	3.0	3.5	砂岩	南無阿弥陀佛

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
341	6.5	4.0	2.0	花崗岩	摩
342	4.0	3.0	1.2	砂岩	判読不可
343	4.0	2.5	2.0	砂岩	尼
344	7.0	4.5	3.0	安山岩	判読不可
345	6.0	4.0	2.8	安山岩	摩
346	10.0	5.0	3.0	安山岩	摩
347	3.6	3.0	1.6	砂岩	母
348	4.5	2.5	2.5	砂岩	判読不可
349	5.0	4.5	3.5	砂岩	判読不可
350	4.5	4.2	2.1	砂岩	摩
351	10.0	7.0	4.5	砂岩	墨書なし
352	12.0	5.0	2.5	砂岩	(表)南無阿弥陀仏 (裏)□□□□
353	5.5	3.0	2.3	砂岩	伽
354	5.0	4.0	2.1	安山岩	墨書なし
355	8.0	4.0	3.0	安山岩	伽
356	4.8	4.0	1.5	安山岩	判読不可
357	4.5	4.5	1.5	安山岩	鉢
358	6.0	3.5	2.4	砂岩	摩
359	6.0	3.0	2.0	安山岩	曩
360	3.6	2.9	1.6	安山岩	判読不可
361	4.0	3.0	3.0	砂岩	判読不可
362	6.7	7.0	4.0	安山岩	唵
363	7.5	5.5	4.2	砂岩	判読不可
364	7.0	5.8	3.6	安山岩	判読不可
365	8.0	5.0	4.6	砂岩	韈
366	4.0	3.0	1.0	花崗岩	墨書なし
367	5.0	3.2	2.5	安山岩	墨書なし
368	5.0	5.0	2.0	砂岩	尾
369	7.5	6.0	4.0	砂岩	縛
370	7.2	5.0	2.8	砂岩	摩
371	6.0	5.5	3.0	砂岩	佛
372	7.0	5.5	2.5	花崗岩	墨書なし
373	6.0	4.5	3.1	安山岩	墨書なし
374	6.0	4.0	2.3	砂岩	入
375	4.2	3.0	1.6	砂岩	野
376	4.0	3.5	2.0	砂岩	母
377	7.8	6.0	3.0	安山岩	判読不可
378	5.5	4.0	3.0	安山岩	尾
379	5.0	4.0	2.0	安山岩	尨
380	7.0	5.5	3.0	砂岩	摩
381	6.3	5.0	2.0	砂岩	羅
382	7.5	6.2	3.0	砂岩	墨書なし
383	4.0	4.0	2.6	砂岩	唵
384	3.5	4.0	2.3	安山岩	廬
385	3.5	3.0	2.6	砂岩	墨書なし
386	3.0	3.6	3.5	砂岩	捺
387	4.6	6.3	1.1	砂岩	曩
388	3.5	2.7	2.0	砂岩	判読不可
389	4.6	2.1	1.8	砂岩	羅
390	4.8	5.3	1.0	安山岩	摩
391	6.0	3.0	2.5	安山岩	廬
392	4.8	2.0	1.5	砂岩	判読不可
393	6.5	4.0	1.5	砂岩	(表)(裏)摩
394	6.5	5.1	2.0	砂岩	阿
395	4.3	3.0	1.0	砂岩	阿
396	4.5	4.5	2.1	安山岩	唵
397	4.3	3.1	2.6	砂岩	羅
398	5.0	3.0	1.3	安山岩	墨書なし
399	8.5	4.5	2.6	安山岩	入
400	11.0	5.0	4.0	砂岩	墨書なし
401	4.5	3.0	1.8	安山岩	判読不可
402	5.8	5.0	2.5	花崗岩	野
403	7.0	5.0	1.8	安山岩	尨
404	6.3	3.7	2.7	安山岩	唵
405	3.8	3.0	1.8	砂岩	墨書なし
406	7.8	4.6	3.0	安山岩	判読不可
407	4.3	3.0	2.1	砂岩	墨書なし
408	3.0	2.5	2.8	砂岩	墨書なし

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
409	2.8	1.9	1.5	花崗岩	墨書なし
410	5.0	3.0	1.5	花崗岩	墨書なし
411	3.1	2.6	1.0	安山岩	訶
412	4.6	3.1	1.8	安山岩	納
413	4.8	4.0	1.8	砂岩	羅
414	4.0	3.0	2.0	安山岩	墨書なし
415	5.3	4.5	1.5	砂岩	羅
416	3.2	4.2	1.0	砂岩	捺
417	8.0	6.3	3.0	砂岩	判読不可
418	4.6	3.7	1.5	砂岩	(表)尾 (裏)□
419	4.0	3.0	3.0	花崗岩	判読不可
420	4.0	2.8	1.7	砂岩	判読不可
421	3.2	2.5	2.5	安山岩	判読不可
422	7.0	5.0	3.5	花崗岩	韈
423	9.0	6.5	6.0	砂岩	墨書なし
424	6.0	6.0	2.3	安山岩	判読不可
425	6.5	4.3	1.0	安山岩	墨書なし
426	7.5	3.0	3.1	砂岩	阿
427	5.5	3.5	2.0	砂岩	尾
428	3.2	2.5	1.2	砂岩	鉢
429	4.5	4.0	3.0	砂岩	乍
430	4.7	2.5	1.0	安山岩	唵
431	6.0	4.5	2.2	安山岩	羅
432	10.0	10.0	6.0	花崗岩	墨書なし
433	3.6	2.6	2.3	砂岩	尼
434	4.3	4.0	2.0	安山岩	母
435	3.3	3.0	2.0	安山岩	尾
436	6.2	4.0	2.0	安山岩	墨書なし
437	7.0	4.5	1.5	安山岩	野
438	4.5	3.4	2.0	安山岩	墨書なし
439	7.0	4.3	1.5	砂岩	野
440	6.0	2.8	2.0	花崗岩	墨書なし
441	6.0	4.0	2.5	砂岩	謨
442	6.3	3.5	1.2	安山岩	乍
443	6.5	5.0	3.6	安山岩	判読不可
444	4.0	2.2	1.0	花崗岩	判読不可
445	3.2	4.0	1.4	安山岩	摩
446	8.0	4.5	4.0	安山岩	判読不可
447	5.5	4.0	2.5	安山岩	唵
448	8.0	4.0	2.5	砂岩	韈
449	5.3	3.8	2.3	安山岩	阿
450	6.5	4.0	2.0	安山岩	野
451	7.2	6.3	3.0	安山岩	佛
452	6.0	5.0	2.8	砂岩	判読不可
453	4.5	3.5	2.5	砂岩	判読不可
454	6.0	3.2	2.0	安山岩	鉢
455	10.0	7.0	2.5	砂岩	墨書なし
456	4.5	4.0	3.5	砂岩	尼
457					447と接合
458	8.0	6.5	1.6	砂岩	(表)(裏)縛
459	6.3	3.1	2.2	砂岩	羅
460	6.5	4.5	2.0	砂岩	摩
461	5.0	4.0	3.8	砂岩	多
462	6.0	3.2	2.5	砂岩	入
463	5.0	2.0	2.0	安山岩	捺
464	4.8	3.6	1.0	安山岩	捺
465	5.0	3.0	2.2	花崗岩	捺
466	3.5	2.5	0.5	砂岩	納
467	3.5	3.0	1.0	砂岩	捺
468	5.0	5.0	3.5	安山岩	判読不可
469	9.0	4.5	3.0	砂岩	判読不可
470	4.0	2.5	2.0	花崗岩	墨書なし
471	4.0	4.0	2.5	砂岩	摩
472	6.0	3.6	1.0	砂岩	墨書なし
473	8.0	4.3	2.5	安山岩	羅
474	7.0	4.5	2.0	安山岩	乍
475	5.5	5.0	3.0	安山岩	尾
476	5.0	4.0	1.5	安山岩	墨書なし

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
477	6.0	3.0	2.0	安山岩	吽
478	5.3	4.0	1.5	砂岩	捺
479	5.0	3.0	3.0	安山岩	曩
480	5.2	3.0	1.5	砂岩	野
481	3.5	3.0	3.0	砂岩	羅
482	5.2	5.0	1.5	安山岩	羅
483	7.3	5.5	3.0	砂岩	尾
484	8.5	5.0	2.0	砂岩	墨書なし
485	8.5	4.0	2.5	安山岩	鉢
486	7.0	6.5	1.5	砂岩	唵
487	7.5	3.5	2.8	砂岩	墨書なし
488	4.0	3.5	1.8	安山岩	墨書なし
489	6.0	4.0	3.0	安山岩	摩
490	4.0	2.5	3.0	砂岩	謨
491	4.5	3.6	1.1	砂岩	摩
492	4.4	3.5	1.5	安山岩	鉢
493	10.5	6.2	4.0	砂岩	羅
494	6.0	5.0	3.0	砂岩	摩
495	7.5	4.6	2.2	砂岩	墨書なし
496	6.5	6.0	3.0	安山岩	墨書なし
497	5.5	4.6	2.0	安山岩	謨
498	5.5	4.1	3.5	花崗岩	墨書なし
499	9.0	4.0	2.0	安山岩	墨書なし
500	6.0	4.5	2.0	砂岩	尼
501	4.5	3.6	1.0	砂岩	墨書なし
502	6.0	5.0	4.0	砂岩	判読不可
503	7.0	8.0	2.5	安山岩	羅
504	6.3	5.3	2.0	安山岩	曩
505	8.0	6.5	3.0	安山岩	唵
506	5.0	5.0	3.0	砂岩	曩
507	8.0	7.5	4.5	砂岩	訶
508	4.0	3.6	2.0	安山岩	摩
509	7.2	4.0	2.0	砂岩	羅
510	6.0	6.0	3.0	砂岩	唵
511	6.0	4.5	2.0	安山岩	乍
512	8.0	4.0	2.0	砂岩	伽
513	3.0	3.5	2.0	砂岩	摩
514	6.5	4.0	4.0	安山岩	阿
515	6.0	4.3	1.6	安山岩	判読不可
516	7.0	5.5	2.5	安山岩	判読不可
517	6.0	3.5	1.2	砂岩	判読不可
518	7.3	5.0	2.0	安山岩	墨書なし
519	5.5	3.2	2.0	安山岩	野
520	6.0	3.0	2.0	安山岩	曩
521	7.5	4.0	2.3	安山岩	尼
522	4.0	3.5	2.0	安山岩	廬
523	6.3	4.6	1.5	安山岩	曩
524	5.6	3.8	2.0	安山岩	乍
525	6.6	4.3	1.3	砂岩	吽
526	7.0	4.6	2.5	安山岩	判読不可
527	6.8	5.0	2.5	安山岩	廬
528	6.0	2.1	1.3	安山岩	墨書なし
529	4.6	4.0	2.0	砂岩	犀
530	4.6	2.5	3.0	花崗岩	墨書なし
531	4.5	2.5	2.0	安山岩	墨書なし
532	8.2	3.2	2.8	安山岩	南無阿弥陀佛
533	4.2	3.0	0.6	安山岩	訶
534	5.9	3.5	1.2	砂岩	鉢
535					534と接合
536	3.0	2.0	1.5	砂岩	尼
537	3.4	4.2	1.6	砂岩	多
538	8.0	6.0	3.5	泥灰岩	墨書なし
539	7.0	4.5	4.5	泥灰岩	墨書なし
540	8.7	5.6	1.1	泥灰岩	墨書なし
541	6.0	4.0	1.0	泥灰岩	墨書なし
542	3.5	5.0	2.0	砂岩	捺
543	9.5	5.0	3.0	安山岩	韈
544	7.0	6.3	2.5	安山岩	墨書なし

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
545	5.5	3.5	3.0	花崗岩	墨書なし
546	3.3	3.7	3.3	砂岩	納
547	8.0	5.0	1.8	泥灰岩	墨書なし
548	8.5	8.0	5.0	泥灰岩	墨書なし
549	5.0	4.0	3.5	砂岩	鉢
550	5.5	3.0	1.2	泥灰岩	墨書なし
551	7.0	2.5	2.0	安山岩	母
552	5.0	4.6	2.0	安山岩	判読不可
553	4.0	2.5	2.0	花崗岩	阿
554	3.5	4.0	2.1	安山岩	羅
555	4.0	3.0	1.5	安山岩	伽
556	9.0	5.0	2.0	花崗岩	墨書なし
557	4.8	3.8	1.4	砂岩	入
558	3.5	5.8	2.0	安山岩	摩
559	4.0	4.0	1.3	安山岩	納
560	4.7	3.5	3.5	花崗岩	判読不可
561	12.0	3.0	3.0	安山岩	(表)南無阿弥陀佛　(裏)□□
562	16.0	6.0	3.0	泥灰岩	墨書なし
563	4.0	2.5	1.6	砂岩	摩
564	5.0	2.3	2.3	砂岩	野
565	4.5	2.6	1.8	砂岩	墨書なし
566	4.5	3.0	2.5	安山岩	判読不可
567	5.0	4.0	3.0	花崗岩	墨書なし
568	7.5	3.0	2.0	安山岩	羅
569	7.0	4.0	2.0	安山岩	母
570	5.0	3.5	2.0	安山岩	判読不可
571	4.5	3.4	2.1	砂岩	墨書なし
572	4.5	6.0	2.0	花崗岩	摩
573	5.5	4.5	3.0	砂岩	墨書なし
574	8.0	4.6	3.0	玄武岩	墨書なし
575	7.5	3.0	2.6	砂岩	尾
576	8.0	3.5	3.5	砂岩	摩
577	4.2	3.0	1.2	安山岩	墨書なし
578	6.0	4.0	4.0	砂岩	尢
579	6.2	5.0	2.0	砂岩	縛
580	15.0	3.5	2.0	泥灰岩	墨書なし
581	5.6	3.5	1.7	砂岩	鉢
582	4.5	3.0	0.8	砂岩	納
583	4.0	4.0	1.0	砂岩	捺
584	5.0	2.5	1.3	砂岩	墨書なし
585	4.0	3.8	2.5	砂岩	摩
586	5.7	3.6	2.8	砂岩	多
587	11.0	5.0	2.0	砂岩	(表)南無阿弥陀佛　(裏)妙□妙□
588	7.5	4.0	2.5	安山岩	謨
589	4.5	2.6	1.1	砂岩	謨
590	6.0	4.0	2.0	砂岩	墨書なし
591	5.1	2.2	1.5	砂岩	判読不可
592	4.1	2.0	1.7	砂岩	墨書なし
593	6.0	4.0	1.5	安山岩	縛
594	6.0	4.0	2.5	安山岩	摩
595	8.2	4.0	2.4	砂岩	判読不可
596	4.3	3.5	2.0	砂岩	入
597	5.5	3.6	2.0	砂岩	謨
598	9.0	6.0	3.0	砂岩	判読不可
599	6.0	4.2	2.5	安山岩	墨書なし
600	5.5	3.0	3.0	砂岩	曩
601	5.3	5.0	3.0	砂岩	母
602	7.5	8.6	2.3	砂岩	韈
603	6.5	4.0	2.5	砂岩	吽
604	4.6	2.6	1.6	砂岩	羅
605	5.0	3.0	2.0	安山岩	墨書なし
606	5.3	3.0	2.0	安山岩	尾
607	5.3	2.5	2.0	安山岩	入
608	4.0	3.5	2.0	安山岩	墨書なし
609	8.0	6.0	2.5	安山岩	判読不可
610	6.5	6.1	2.3	砂岩	阿
611	4.0	3.0	2.2	砂岩	鉢
612	9.0	5.6	2.0	安山岩	判読不可

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
613	7.8	7.0	3.0	安山岩	厲
614	6.0	3.2	2.5	安山岩	謨
615	5.0	5.0	2.5	花崗岩	判読不可
616	4.0	4.0	3.2	安山岩	尾
617	8.0	4.0	3.1	安山岩	阿
618	6.0	5.0	1.5	砂岩	厲
619	6.1	3.5	2.3	安山岩	墨書なし
620	7.0	6.0	2.0	砂岩	羅
621	5.0	4.1	1.2	安山岩	入
622	4.5	2.8	2.8	花崗岩	鉢
623	5.2	3.5	2.0	砂岩	判読不可
624	4.0	3.0	2.3	安山岩	墨書なし
625	3.5	2.8	2.5	安山岩	阿
626	7.0	3.0	2.4	安山岩	墨書なし
627	5.0	4.0	2.2	砂岩	母
628	4.1	3.1	1.0	砂岩	摩
629	8.5	4.5	2.5	砂岩	唵
630	7.0	4.5	3.5	砂岩	判読不可
631	4.0	3.5	1.4	砂岩	吽
632	3.5	3.0	2.0	砂岩	判読不可
633	4.5	3.0	2.0	砂岩	判読不可
634	8.0	3.5	2.0	砂岩	摩
635	7.0	4.3	2.3	安山岩	鉢
636	3.0	2.0	1.2	砂岩	尼
637	3.0	2.1	2.0	砂岩	訶
638	6.0	2.5	1.5	砂岩	摩
639	3.9	4.0	2.0	安山岩	尾
640	3.5	2.0	1.8	泥灰岩	墨書なし
641	3.0	2.0	1.5	砂岩	墨書なし
642	4.6	3.0	2.0	安山岩	納
643	8.0	4.5	2.3	安山岩	捺
644	6.3	4.5	1.2	安山岩	多
645	9.0	4.0	2.0	砂岩	(表)南無阿弥陀佛　(裏)□□□□
646	6.0	4.2	2.6	泥灰岩	判読不可
647	11.3	6.0	3.5	安山岩	(表)南無阿弥陀佛　(裏)□□由心
648	3.7	3.0	2.0	安山岩	判読不可
649	3.5	2.5	2.0	砂岩	尢
650	5.0	4.0	2.0	砂岩	墨書なし
651	5.5	4.0	4.0	安山岩	羅
652	7.0	7.0	3.0	安山岩	唵
653	3.3	3.0	1.4	砂岩	吽
654	5.6	3.6	2.0	安山岩	縛
655	5.6	4.7	1.8	安山岩	判読不可
656	3.0	3.0	1.5	安山岩	判読不可
657	3.5	2.0	1.6	安山岩	南
658	4.5	3.0	2.5	砂岩	鉢
659	5.7	3.1	1.8	砂岩	摩
660	4.3	4.0	1.8	砂岩	縛
661	4.6	3.0	1.3	安山岩	多
662	6.3	3.2	2.5	安山岩	伽
663	6.0	3.1	2.5	安山岩	阿
664	5.0	4.5	2.0	安山岩	墨書なし
665	5.5	4.0	3.0	砂岩	判読不可
666	7.7	5.6	2.0	安山岩	縛
667	6.0	4.0	1.5	安山岩	韈
668	9.5	5.1	2.5	安山岩	厲
669	6.0	4.2	3.2	砂岩	鉢
670	4.1	3.5	2.1	安山岩	墨書なし
671	4.3	3.1	1.0	砂岩	尾
672	6.0	3.5	2.6	安山岩	墨書なし
673	3.1	3.0	2.0	砂岩	墨書なし
674	8.0	4.0	1.8	安山岩	母　捺
675	4.0	3.5	3.5	安山岩	羅
676	5.5	3.6	1.8	安山岩	羅
677	4.0	4.0	2.5	安山岩	墨書なし
678	6.8	4.5	2.5	安山岩	納
679	8.0	7.0	2.0	安山岩	墨書なし
680	4.5	3.0	2.3	砂岩	鉢

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
681	6.5	2.3	2.5	砂岩	伽
682	6.0	3.2	2.0	安山岩	吽
683	5.6	4.2	2.0	砂岩	入
684	5.0	5.5	2.0	安山岩	入
685	4.6	3.2	1.2	安山岩	母
686	6.5	2.6	2.0	安山岩	母
687	7.0	5.5	2.0	砂岩	母
688	6.5	5.6	2.5	安山岩	鉢
689	3.5	2.5	1.6	安山岩	鉢
690	5.0	4.6	3.3	安山岩	鉢
691	5.5	3.5	3.5	安山岩	鉢
692	7.0	6.5	1.5	砂岩	鉢
693	9.6	5.0	3.0	安山岩	鉢
694	9.7	3.5	2.6	砂岩	納
695	5.4	3.8	1.5	安山岩	曩
696	4.3	3.5	2.0	砂岩	曩
697	7.0	4.3	4.0	安山岩	曩
698	6.5	4.0	2.0	砂岩	野
699	3.8	3.1	1.5	安山岩	野
700	3.0	3.7	1.5	砂岩	尼
701	4.5	2.5	2.0	砂岩	捺
702	5.0	4.0	1.5	砂岩	尾
703	4.2	3.0	3.2	砂岩	尾
704	4.5	2.5	2.4	砂岩	多
705	3.2	4.0	1.4	砂岩	訶
706	3.0	3.6	2.8	砂岩	訶
707	2.0	4.0	2.0	砂岩	伽
708	5.0	2.3	1.5	砂岩	阿
709	6.0	6.0	2.0	砂岩	阿
710	8.0	4.5	3.3	安山岩	阿
711	5.9	2.0	1.0	安山岩	吽
712	6.0	3.5	1.0	安山岩	吽
713	6.0	5.0	1.3	砂岩	摩
714	5.2	4.0	1.6	安山岩	摩
715	5.0	4.5	2.5	安山岩	冗
716	5.5	5.0	3.0	安山岩	謨
717	7.5	4.0	2.0	安山岩	謨
718	5.6	3.1	2.2	砂岩	唵
719	6.0	5.0	2.8	安山岩	唵
720	10.5	7.0	3.0	砂岩	唵
721	8.0	5.5	2.5	安山岩	縛
722	11.0	9.0	3.0	花崗岩	韈
723	4.5	5.8	2.0	安山岩	羅
724	6.2	4.0	1.3	砂岩	羅
725	6.0	4.4	2.8	安山岩	羅
726	7.2	6.5	3.0	安山岩	捺
727	8.0	7.0	2.5	安山岩	捺
728	8.6	6.0	5.0	砂岩	捺
729	7.0	8.0	3.5	安山岩	韈
730	9.0	7.0	3.0	安山岩	厭
731	9.5	8.4	1.5	砂岩	(表)南無阿弥陀佛　(裏)妙林　妙雲
732	8.0	7.0	3.0	安山岩	唵
733	4.6	4.5	1.5	砂岩	判読不可
734	5.0	3.6	4.0	泥灰岩	摩
735	5.5	3.5	2.5	安山岩	鉢
736	8.5	4.5	1.5	砂岩	入
737	7.0	8.0	3.5	安山岩	鉢
738	7.0	7.0	3.0	安山岩	羅
739	8.0	6.0	3.8	安山岩	捺
740	9.0	4.8	2.8	安山岩	判読不可
741	9.1	7.2	3.0	安山岩	南無
742	6.6	3.7	3.6	花崗岩	吽
743	4.3	3.5	2.8	安山岩	入
744	4.5	2.5	1.7	安山岩	羅
745	3.9	2.3	2.2	安山岩	判読不可
746	7.0	3.5	2.0	粘板岩	判読不可
747	7.8	7.0	5.0	砂岩	縛
748	7.0	5.5	6.5	安山岩	羅

番号	直径	短径	厚さ	石質	墨　書
749	9.0	6.0	3.0	砂岩	判読不可
750	7.0	5.5	3.0	花崗岩	尼
751	9.3	5.5	2.0	安山岩	吽
752	7.0	8.0	4.0	安山岩	鉢
753	8.0	5.0	4.5	安山岩	唵
754	7.7	7.3	2.4	安山岩	羅
755	4.6	3.3	2.8	安山岩	阿
756	2.0	3.0	1.5	砂岩	母
757	5.5	4.3	2.5	花崗岩	摩
758	5.0	3.0	1.5	花崗岩	尼
759	8.3	6.0	3.0	安山岩	曩
760	6.3	6.0	3.7	砂岩	尾
761	8.5	4.2	2.0	安山岩	判読不可
762	6.3	4.1	2.5	花崗岩	羅
763	7.0	5.2	2.7	安山岩	摩
764	8.0	5.0	2.5	安山岩	判読不可
765	7.8	4.0	1.8	安山岩	唵
766	6.5	4.5	4.7	安山岩	母
767	5.5	4.1	2.3	花崗岩	判読不可
768	6.5	4.9	2.0	安山岩	謨
769	3.5	3.0	1.0	泥灰岩	摩
770	4.5	3.5	1.8	花崗岩	判読不可
771	5.0	3.2	2.0	安山岩	吽
772	2.6	3.0	1.8	砂岩	尼
773	4.0	2.2	1.8	安山岩	尼
774	5.6	3.0	2.3	安山岩	厭
775	4.1	3.6	2.0	砂岩	母
776	5.0	3.2	4.0	安山岩	納
777	4.5	2.0	2.0	安山岩	入
778	6.6	3.8	2.2	花崗岩	阿
779	3.3	4.0	1.5	安山岩	鉢
780	5.6	3.5	0.9	砂岩	羅
781	3.0	2.5	1.0	安山岩	判読不可
782	5.0	4.0	1.4	安山岩	母
783	4.5	3.3	3.0	砂岩	捺
784	4.5	3.5	3.5	安山岩	入
785	5.0	2.3	1.5	安山岩	(表)(裏)判読不可
786	4.5	3.0	2.0	安山岩	曩
787	5.5	3.0	2.5	安山岩	鉢
788	4.4	3.6	1.2	安山岩	判読不可
789	6.0	3.0	1.8	安山岩	判読不可
790	6.7	4.5	3.5	花崗岩	判読不可
791	9.2	6.0	4.5	安山岩	判読不可
792	6.0	4.5	2.0	花崗岩	判読不可
793	4.3	3.5	2.0	砂岩	判読不可
794	4.5	3.5	1.7	安山岩	鉢
795	3.5	3.0	3.2	安山岩	判読不可
796	4.7	3.5	1.0	安山岩	判読不可
797	7.1	4.1	3.0	安山岩	判読不可
798	4.0	3.5	1.7	安山岩	判読不可
799	6.5	4.2	2.0	安山岩	判読不可
800	5.0	3.0	1.3	安山岩	尾
801	8.5	6.5	3.0	安山岩	摩
802	3.7	4.8	1.8	安山岩	謨
803	3.8	2.8	2.2	安山岩	入
804	6.8	3.0	2.5	安山岩	野
805	3.5	3.1	1.8	安山岩	謨
806	4.5	2.9	1.6	砂岩	母
807	5.7	3.2	2.0	安山岩	多
808	4.5	7.3	1.8	安山岩	阿
809	6.1	4.6	2.7	花崗岩	縛
810	4.0	4.2	1.9	安山岩	納
811	5.2	3.3	2.2	安山岩	摩
812	8.5	4.2	5.0	安山岩	縛
813	6.5	5.6	2.6	砂岩	判読不可
814	5.2	5.4	2.5	花崗岩	判読不可
815	5.5	3.0	2.5	安山岩	鉢
816	8.8	4.5	5.4	安山岩	判読不可

墓標（図版６・７）

南側削平地において18基の墓標が礫石経の前面に存在していた。東側の墓標から1号墓標・２号墓標・・・17号墓標・18号墓標とした。ただし，18号墓標はすでに崩落しており原形を保っていない。１号～９号墓標は東西方向にほぼ直線的に並んでいた。10・11号墓標は南北方向に，11・12号墓標は東西方向に並んでおり，13～15号墓標は南北方向に，16・17号墓標は東西方向に並んでいた。墓標の形態は仏像類・五輪塔類・無縫塔類・近世墓標の４種類であり，判読できる範囲の年代は享保元年（1716）～明治15年（1882）で，大部分は17世紀初頭から18世紀初頭のものである。

第４表　作山城跡墓標一覧表

番　号	形　態	年　号	墓　碑　名	
１号墓標	無縫塔類	解読不可	敬真□□□□（表）	図版６－８
２号墓標	無縫塔類	明和九□ 六月二一日（裏）	□義本空寶阿闍梨（表）	図版７－１
３号墓標	無縫塔類	享保一年丙申 十一月二九日（裏）	□本□□長阿闍梨（表）	図版７－１
４号墓標	仏像類	解読不可	解読不可	図版７－１
５号墓標	仏像類	享保□□□□ 八月□□□（表）	□登□□□（表）	図版７－２
６号墓標	仏像類	解読不可	解読不可	図版７－３
７号墓標	無縫塔類	解読不可	□法心靈覺□住 覚心真士 □□真尼（表）	図版７－３
８号墓標	五輪塔類	解読不可		図版７－３
９号墓標	五輪塔類	解読不可		図版７－４
10号墓標	近代墓標	明治十五年午旧十月□日 明治八年亥一月十二日 （右側）	山田林七墓 俗名ヌイ七十三才 享年六十三才（右側） 門人中建（左側）	図版７－５
11号墓標	五輪塔類	解読不可	解読不可	図版７－５
12号墓標	仏像類	文化十四丁丑年 四月二十二日寂（左側）	密禪恵淨阿闍梨（表）	図版７－５
13号墓標	五輪塔類	解読不可	真空大阿闍梨之塔（表）	図版７－６
14号墓標	仏像類	安永六丁酉年（右側）	法圓真淨阿闍梨（表）	図版７－６
15号墓標	仏像類	文化四年丁卯（左側） 七月九日卒（右側）	智圓淨月阿闍梨（表）	図版７－６
16号墓標	無縫塔類	解読不可	富庵□ハ止□□和吉永□□	図版７－７
17号墓標	仏像類	文政四辛巳 九月三十日	憧良栄阿闍梨（表）	図版７－８
18号墓標	五輪塔類	解読不可	解読不可	崩壊

（3） まとめ

本試掘調査では，溝２条，土坑13基，柱穴10基，蔵骨器，礫石経を検出し，墓標18基を確認した。蔵骨器と礫石経と墓標は南側削平地のほぼ同じ位置に集中しており，この場所は近世～近代には墓域であった。遺物を出土した遺構は少なく，時期特定は難しいが，近代の遺構であるＳＫ０４～１３，ＳＰ０４を除くその他の遺構は近世のものである。結論として，本試掘調査において作山城に直接関係する遺構・遺物は確認できなかった。その原因として，中世の遺構面は後世に削平されてしまったと考えられる。しかし，後世の削平を受けていないとすると，築城時には海上異変等を佐料城に伝達するための烽火場があったと伝えられる作山城には，規模の大きな建物は建てられていなかった可能性が考えられる。

第５表　作山城跡遺構一覧　（ ）は検出した法量

遺構	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物	時期
SD01	幅31～93		10		なし	近世
SD02	幅50		10		なし	近世
SK01	(70)	(28)	16	楕円形	なし	近世
SK02	48	38	13	不整楕円形	なし	近世
SK03	51	(29)	9	円形	なし	近世
SK04	98	(75)	48	円形	陶磁器，土師質土器，ビン，コンクリート	近代
SK05	121	92	60	楕円形	陶磁器，土師質土器，ビン，コンクリート	近代
SK06	95	(75)	12	楕円形	なし	近代
SK07	92	(28)	18	円形	なし	近代
SK08	157	(72)	58	不整楕円形	陶磁器，ビン，コンクリート，タイル	近代
SK09	(169)	(135)	10	不整楕円形	なし	近代
SK10	85		7	円形	陶磁器，ビン，ガラス	近代
SK11	76		6	円形	陶磁器，瓦，釘，ビニール線	近代
SK12	70		44	方形	陶磁器，土師質土器，軟質陶器，鉄，タイル，スレート	近代
SK13	117		40	円形	土師質土器，軟質陶器，瓦質土器，鉄	近代
SK14	95		8	円形	なし	近代
SP01	41	37	10	不整円形	なし	近世
SP02	39		10	円形	なし	近世
SP03	45		15	不整円形	陶磁器	近世
SP04	33		12	正方形	土管	近代
SP05	53	44	14	楕円形	なし	近世
SP06	35		8	円形	鉄片	近世
SP07	35		12	不整円形	土師質土器	近世
SP08	57	51	9	不整楕円形	なし	近世
SP09	37		5	円形	肥前系磁器	近世
SP10	32		5	円形	なし	近世
SP11	24		5	円形	なし	近世
SP12	35	27	5	楕円形	なし	近世
SP13	47		9	円形	なし	近世

第６表　作山城跡出土遺物観察表　（ ）は残存高

遺物番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	色調	胎土
49	陶器 碗		6.1	(1.7)	施釉	素地：にぶい黄橙10YR7/3 釉：透明	精選
50	土師質土器 甕		10.8	(1.6)	摩滅	内外面：にぶい黄橙10YR6/3	1～5mmの石英を含む
51	磁器 小鉢	10.6	6.6	(4.7)	施釉	素地：白 釉：明緑	精選
52	土師質土器 焜炉			(5.6)	外面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ 内面：ナデ	内外面：にぶい黄橙5YR6/4	1～3mmの石英，金雲母を含む
53	軟質陶器 土瓶				施釉	素地：橙5YR6/8 釉：暗赤褐2.5YR3/6	精選
54	染付 碗		4.0	(2.0)	施釉	素地：白 釉：透明	精選
55	陶器 擂鉢	31.6		(6.1)	施釉	素地：灰白5Y7/2 釉：灰褐7.5YR4/3	精選
56	肥前系磁器 皿		10.4	(2.1)	施釉，見込みに白色の刷毛目	素地：褐灰7.5YR6/1 釉：灰オリーブ7.5Y6/2	精選
57	肥前系磁器 皿		15.6	(2.3)	施釉，見込みに淡青色の染付け	素地：白10YR7/3 釉：透明	精選
58	土師質土器 杯		4.8	(1.2)	底部：回転糸切り	内外面：にぶい橙5YR6/4	微砂を含む
59	軟質陶器 土瓶			(2.5)	外面：ナデ，ヘラケズリ　内面：施釉	素地：橙5YR6/6 釉：明赤褐2.5YR5/8	精選
60	軟質陶器 土瓶		7.4	(2.4)	内外面：ナデ	内外面：橙7.5YR6/8	精選
61	軒平瓦				唐草文	内外面：黒	
62	土師質土器 蓋	14.0	10.6	2.8	外面：ヨコナデ，ナデ　内面：ナデ	内外面：にぶい黄橙10YR7/3	微砂，粗砂を含む
63	土師質土器 壺	13.8	13.0	15.0	外面：口縁部ヨコナデ，体部ナデ・波状文 内面：ハケ・ナデ・ヘラナデ	内外面：にぶい黄橙10YR7/3	微砂，粗砂を含む

第３節　考察

今回報告した藤尾城跡と作山城跡の発掘調査では城内の遺構と城跡の年代的な位置づけに直接関わる遺物はほとんど検出しておらず，新たな見地を示すことはできなかった。そこで，中世における旧地形を復元して，藤尾城跡と作山城跡を中心とした香西地区周辺の中世の城について若干論考する。

藤尾城は，香川・阿野２郡を治めた国人領主の香西氏が佐料城に替わる新しい本拠地として天正３～５年（1575～1577）に築造された城であり，南西から延びる丘陵の先端部を掘り切ってできた標高約20mの藤尾山に存在する。現在は築城以前にあった宇佐神社が再び祀られている。城の縄張りは，藤尾山に本丸を構え，南東側に天神郭，北東側に堀の内郭，北西側に北の丸郭，南側に五反地郭を配し，周囲に水堀を巡らしていた。城内は頂上の平坦地に本丸，斜面には数段の細長い削平地が巡り，その西側下方には二ノ丸とみなしうる広い平坦地がある。この城で特筆すべきことは藤尾山を中心とした変形五角形の総構えが見られることである。

作山城跡は藤尾城跡から南東方向へ約250m離れた位置にあり，南西から延びる丘陵の先端部を掘り切ってできた標高16mの作山に存在した。築城時には海上異変等を佐料城に伝達するための烽火場があったとも伝えられる。城の縄張りは，頂上に主郭と考えられる最高所の曲輪が残り，斜面部には２段下がりの細長い削平地が取り囲むように巡らしていた[1)]。

藤尾城跡と作山城跡の周辺には，同様に香西氏と関係する本津城跡・芝山城跡・植松城跡・中山城跡・亀水城跡・黄峰城跡・勝賀城跡・佐料城跡・佐藤城跡・筑城城跡・飯田城跡・鬼無城跡が存在する。立地を見ると四つのタイプに分けられる。タイプ１は急峻な山頂に築かれた城であり，勝賀城跡・鬼無城跡・亀水城跡・黄峰城跡である。タイプ２はやや内陸の平地部に築かれた城であり，佐料城跡・佐藤城跡・筑城城跡・飯田城跡である。タイプ３は海岸線付近の平地部に築かれた城であり，植松城跡・中山城跡・本津城跡である。そして最後のタイプ４は海岸線付近の小高い小山に築かれた城であり，藤尾城跡・作山城跡・芝山城跡である。

香西氏の本拠地である勝賀城は，標高364mを測る急峻な勝賀山の山頂に築かれた城であり，主郭は完全に土塁に囲まれ，折れ・櫓台・枡形虎口・曲輪の方形化など戦国末期の城郭の様相を色濃く残している。鬼無城は，標高262mを測る袋山の山頂に築かれた城であり，勝賀城からの展望が不十分な南西方面への物見の城[2)]と考えられている。亀水城と黄峰城は，五色台山系の紅峰と黄峰山の山頂に築かれた城であり，海上を監視する役割と勝賀城の北側を固める役割を担っていた。

佐料城跡は，平地に築かれた城であり，天正５年(1577)に十八代佳清が藤尾城を築いて移り住むまでの約360年にわたって香西氏の居館であった。周辺の地形や地名などに城の痕跡が多く見られる。植松城と中山城は，勝賀城の北側の細長い平地に築かれた城であり，方形の区画が残る。筑城城・飯田城・佐藤城は平地に築かれた城であるが，その詳細は不明である。

藤尾城について『香西記』では「前略・・佐料城北十余町有海浜景地之小山，此山也，東南及北入海，西続干是竹山謂之於礒崎山，後改号藤尾山，・・後略」と記し，『三代物語』では「前略・・瀬海・・後略」と記している。両書の記載内容は藤尾城の近くまで海が入り込んでおり，東南北側の三方は後背湿地（ラグーン）に囲まれていたことを表しており，復元した旧地形と整合する。一方，作山城は，「是竹山に続ける小き尾流なり。是を切り別けて小峰を築きたれは，作山と言う」[3)] 小山に築かれた城である。旧地形の復元図を参考にすると藤尾城と同様に後背湿地（ラグーン）に三方を囲まれていたことが推定できる。本津城は藤尾城の東側に堆積する砂帯に築かれた城であるが，現在では所在地を確認することはできない。本津川に臨み東に堀，西は海に面していたという。芝山城は藤尾城の北側にある「内海に突出せる小岳・芝山」[4)]に築かれ

た城である。標高は44mであり，城の東北西の三方は海岸であり，南端において陸地部と接する陸繋島のような地形である。

藤尾城を中心とした香西浦における城の構成は，南側には内陸部にあった旧本拠地の佐料城と香西を結ぶルート上にあたり香西の南口を固める最後の関門である作山城があり，北側には海上交通の監視ができる芝山城があり，東側には中世の港町として発展している「野原」に通じるルート上に位置する本津城がある。前述したように藤尾城は天正５年(1577)に内陸部にある佐料城から香西氏の新しい本拠地として香西浦に築かれた。その大きな要因として土佐・長宗我部氏による讃岐侵攻が挙げられる。香西氏は代々綾南条・綾北条・香東・香西の４郡を治め，浦と島については香西・屋嶋・直島・塩飽を従属させていた。その城館は『南海治乱記』に「居城ハ笠居郷佐料也，要城ハ勝賀ノ山也」と記されるように，内陸部にある佐料城と難攻不落の勝賀城の二城体制であった。しかし，長宗我部氏による讃岐侵攻の危機感から，讃岐国内のほかの国人領主や織田信長ではなく，「向地」すなわち中国地方の勢力に頼ることに決したため，海岸の近くで海上交通の便がよい藤尾城に居城を移した。そして，「香西の町は向き向き」と言われるようにすべての道は迷路であり，袋小路・鍵形に折れる道があり，要塞化された城下集落と周辺の諸城を取り込んだ防御形成の強化が考えられる[4)]。長宗我部氏の讃岐侵攻と言う緊張状態を背景に領主としての権力集中が図られ，香西浦の藤尾城下町化の動きが存在したと指摘できる[5)]。

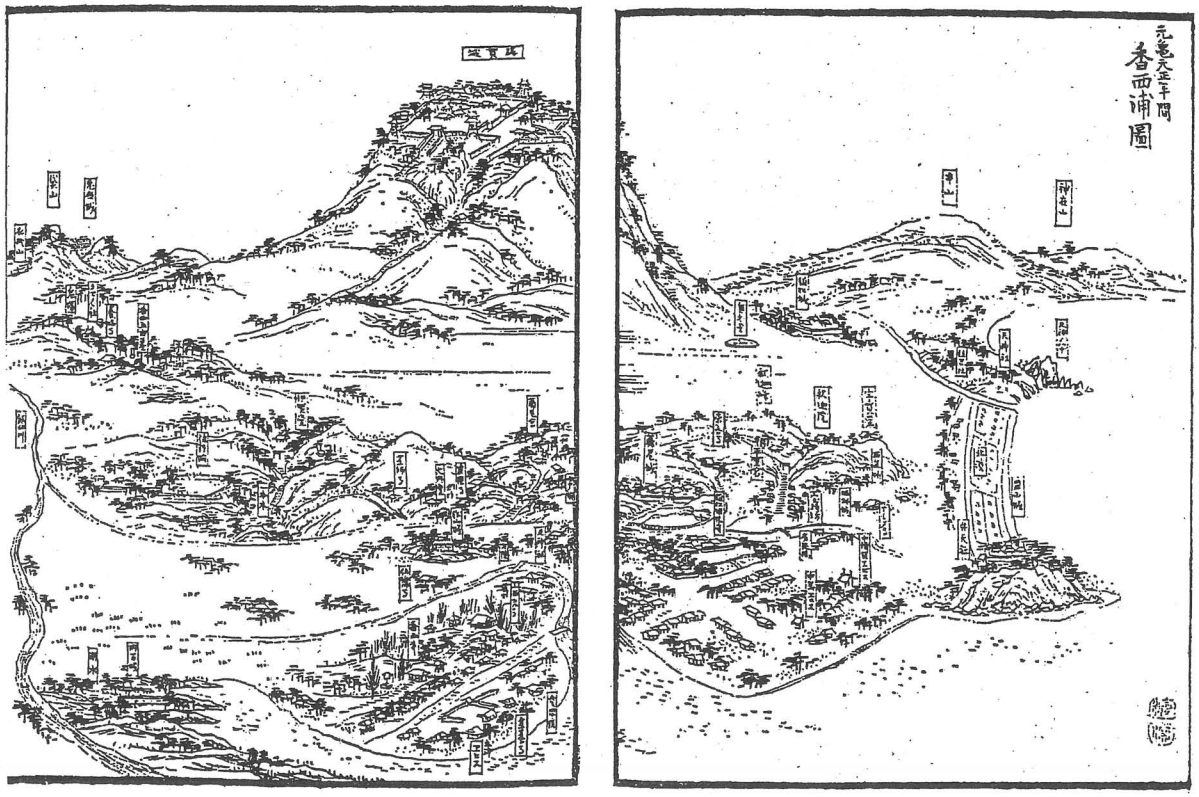
中世港町に関する北山氏の分類6)では，香西浦はⅡ－１型（小規模な河川の河口部に位置し，砂堆上に集落が展開し，内湾部に港湾機能をもつ）であり，野原はⅡ－３型（小規模な河川の河口部に位置し，大きく内湾した入江に砂堆が付随し，河口部に港湾機能をもち，砂堆の外側も船舶の停泊機能をもち，複合的な港湾施設の存在をうかがわせる）に分類できる。

『兵庫北関入船納帳』によれば，中世の讃岐の港町として17ヶ所が記されており，高松湾には東から潟元・野原・香西の３港の名前がある。最近の発掘調査の成果と地形復元を基に古代から近世にわたる３港の推移を考えてみる。中世以前は東の新川・春日川河口付近と西の旧香東川河口付近が物資輸送の拠点となっており，特に屋島の重要性は大きく，新田本村遺跡7)と小山・南谷遺跡[8)]は官衙的な性格を持ち，海岸線が内陸部まで入り込んでおり，両遺跡の近くに港湾施設があったと考えられる。しかし，古代末期からの河川の氾濫や土砂堆積に伴い海岸線は次第に後退し，港湾の機能を失っていった。中世になると，屋島の南側にある潟元（片本）港，現在の高松駅にあたる野原港，そして西側の香西港が発展する。『兵庫北関入船納帳』（文安２年　1445）に，香西の船籍船はのべ六回，船頭は七郎佐衛門以下四人，問丸は道観，野原の船籍船はのべ十三回，船頭は籐三郎以下七人，問丸は孫太郎以下二人，潟元の船籍船は十一回，船頭は兵庫以下二人，問丸は衛門九郎以下二人と記されている。この数値のみで判断できないが，香西は他の２港に比べるとやや小規模であると想定できる。一方，潟元は前代の本拠地としての機能を継承していると考えられる。野原は，『南海通記』には西側と東側に海が湾入し，その間の砂州が海に突き出し，郷内には西濱と東濱の二つの漁村があると記載され，従来はひなびた漁村としてのイメージが強かった。しかし，近年の高松城周辺の発掘調査では湊・寺院・墓地・集落と考えられる遺構群が検出されており，野原が交通・流通の拠点として大きな経済力をもった中世都市であったと考えられるようになってきた。中世から近世に時代が経るに伴って潟元・野原・香西の３港から野原への一極化が顕著に表れてくる。天正16年(1588)に生駒親正により野原に高松城が築かれ，それ以後に生駒氏４代，松平氏11代の城下町として野原は発展していく。潟元は，「古・高松湾」の埋没といった自然環境の変化と屋島の存在意義が失われたことにより，次第にその勢力は衰えていった。一方，豊臣秀吉の四国征討により天正13年(1585)に香西氏は滅亡したため，香西浦は藤尾城の城下町としての基盤を失ってしまう。

古代から現在にいたるまでの港町の推移は，次のように考えられる。古代では東の新川・春日川河口付近と西の旧香東川河口付近に物資の集積地があり，中世には潟元・野原・香西の３港となり，近世になると高松城を中心とする城下町として野原のみが発展し，明治以降は四国の玄関口となり現在に至るのである。

註

1) 香川県教育委員会2003 『香川県中世城館詳細分布調査報告』
高松市教育委員会1979 『勝賀城跡』
高松市教育委員会1980 『勝賀城跡Ⅱ』
池田誠1988「瀬戸内の港津都市と中世城郭（その一）」『中世城郭研究』第2号
2) 秋山忠1982『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会
3) 香川県香西町役場発行1930『香西史』
4) 新居直矩1792『香西記』
5) 佐藤竜馬2007「初期高松城下町の在地的要素」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』　四国村落遺跡研究会
6) 北山健一郎2007「中世港町の地形と空間構成」『港町の原像－中世港町・野原と讃岐の港町－』　四国村落遺跡研究会
7) 高松市教育委員会2006『新田本村遺跡』
8) 香川県教育委員会1997・2006『小山・南谷遺跡Ⅰ』『小山・南谷遺跡Ⅱ』

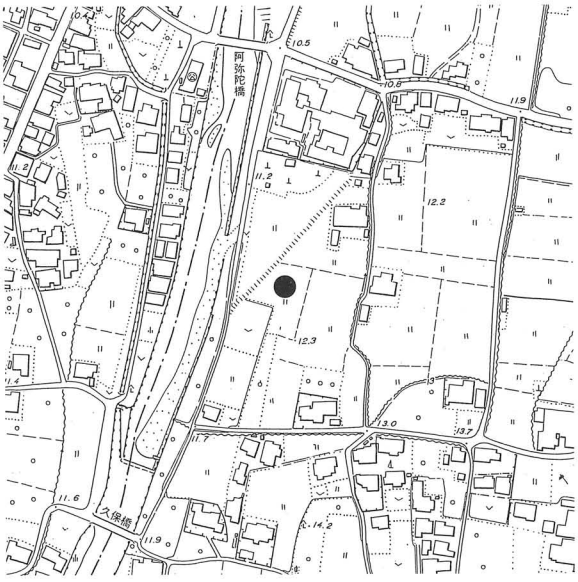


第40図　「元亀天正年間香西浦図」（『讃岐國名勝図會』）

第４節　柿木荒神

1　立地環境（第２・41図）

柿木荒神が所在する飯田町は，高松平野の北西部にあたる。東は浄願寺山，西は堂山に挟まれ，その間には本津川が北流する。当該地はこの両山に挟まれた平野の中央，本津川の東側に位置する。周辺遺跡は当該地を中心にして，北には半田・小坂塚群が近接し，さらに北には王墓古墳，相作牛塚古墳が確認されている。北東には青木塚群と中世の城である飯田城跡が所在し，南東には紙漉塚群等の塚群が確認されている。また，南西に御厩大塚古墳があり，本津川を挟んで西には鬼塚が所在する。



第41図　柿木荒神位置図（S=1/5,000）

2　出土遺物

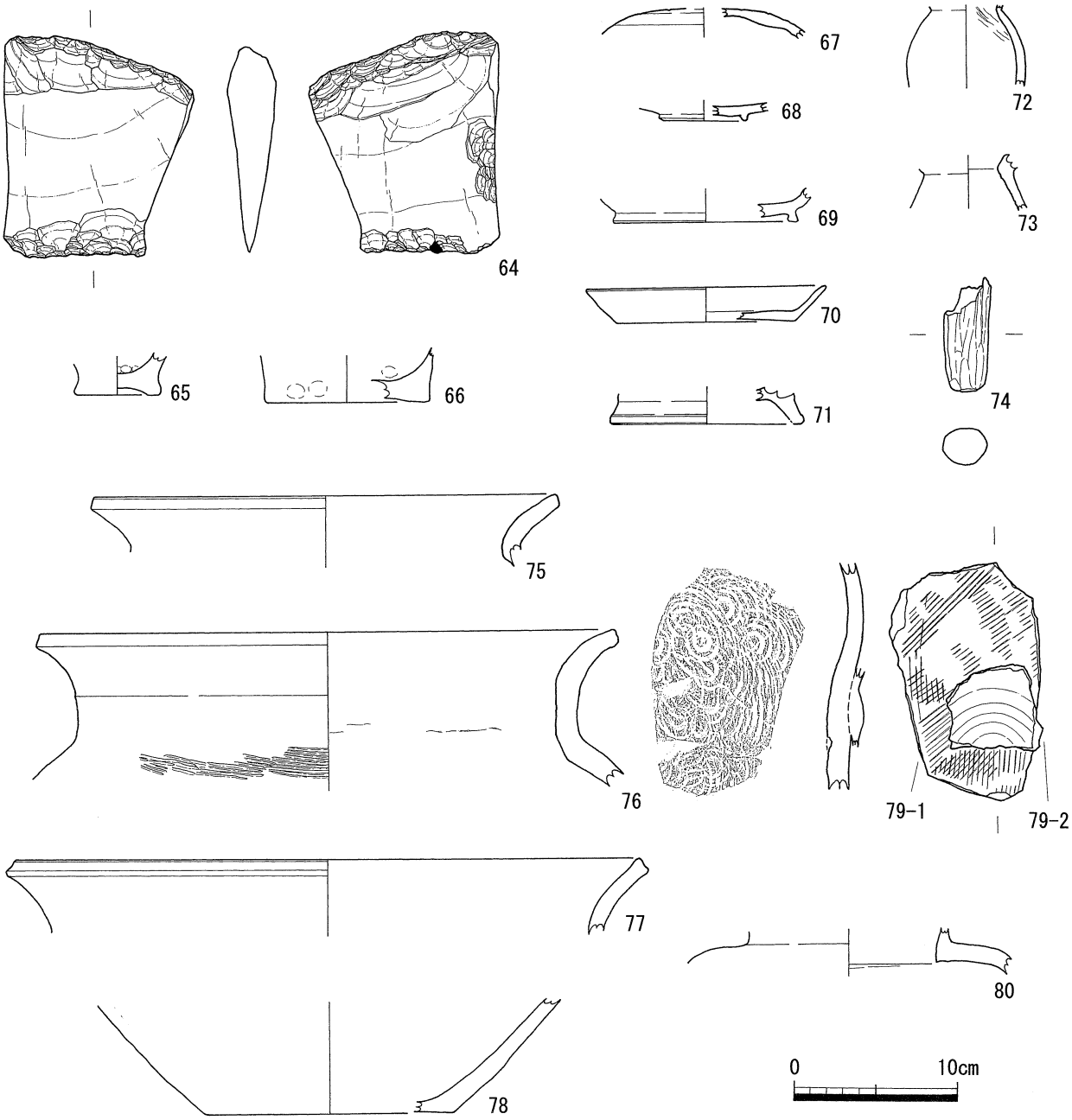
調査の経緯で記したように，出土状況等の確認はできなかった。そのため，ここでは出土した遺物を，時代と種類ごとに分けて報告する。

［弥生時代～古代］（第42図）

石器，弥生土器，須恵器が出土している。64はスクレイパーである。縁辺部には細かな調整が施され，刃部を形成している。65・66は弥生土器の甕底部と考えられる。67～80は須恵器である。67は杯蓋であり，天井部と考えられる。68・69は高台付杯の底部である。70は皿で，9世紀～10世紀のものである。71は壺の高台部分と考えられる。表面は磨耗しており，内側には僅かに内面が残っている。72は小型の壺である。73は甕の頸部と考えられる。74は鍋の脚端部もしくは把手部と考えられる。75～80は甕である。その内75・76・77は口縁部である。いずれも内外面に回転ナデがみられる。76は十瓶産と考えられる。頸部下に平行叩き痕が見られる。77は焼成がやや甘く，軟質のため表面は磨耗している。78は底部で内外面に回転ナデが施されている。79－1は甕の体部である。外面には平行叩き痕，内面には同心円文状の当て具痕が見られる。また外面には79－2の杯底部が付着している。80の頸部は約90度近い角度で折れ，肩が明確に表れる。

［中世］（第43・44図）

81～85は足釜の口縁部から鍔部である。81の鍔部は水平に突出する。82・83は水平に突出するが端部はやや上方に伸びる。また，83は口縁部に内側へ凹みが見られ，焼成までに直されずに残ったものと考えられる。84の鍔部は上方に向かい端部は丸くおさめている。85の鍔部は上方に向かうが短化し，断面も厚くなっている。比較的新しい時期のものと考えられる。86～94は土師質土器鍋である。86・87は口縁部が上方に開き，体部は垂直におりるものである。86は外面口縁部に指頭圧痕，87は外面に指頭圧痕と刷毛目，内面には横刷毛が施されている。88～90・93は口縁部が上方に大きく開き，口縁部はやや反り返り気味である。91・92・94は口縁部内面が直線もしくはやや窪み気味で，口縁端部は垂直におりる。また，口縁部から体部へ向かう括れの部分には明確な角度をもつ。95～97は足釜の脚部である。いずれもナデと指頭圧痕によって整形されてい

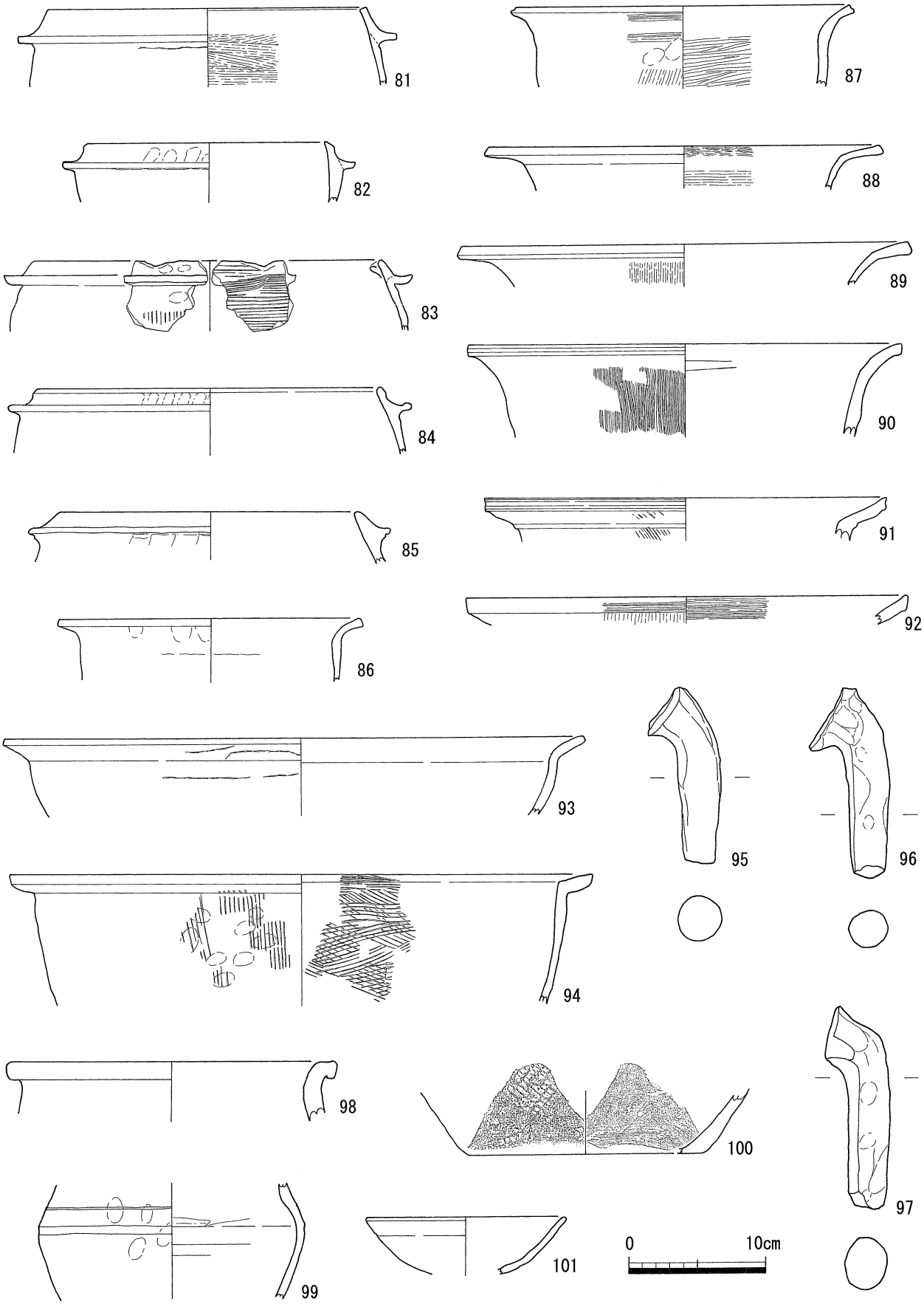


第42図　柿木荒神出土遺物実測図①（S=1/4）

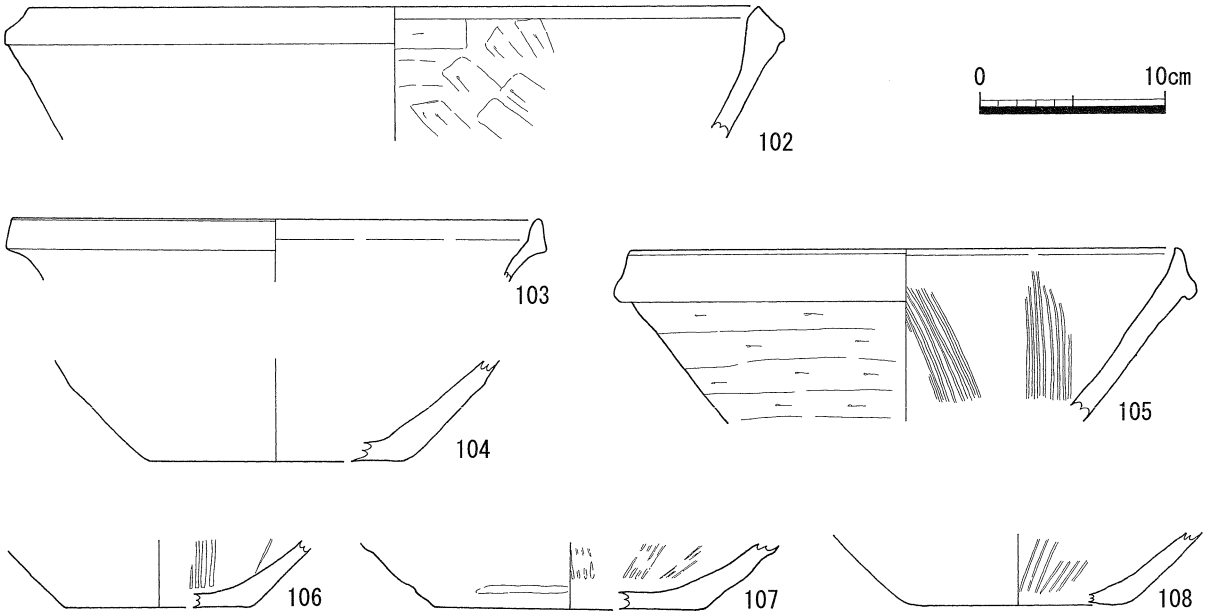
る。98は甕口縁部である。口縁部が丸く肥厚する特徴から楠井産と考えられる。99は甕体部である。100は甕底部である。外面には格子状の叩き痕，内面には底部にナデが見られる。101は土師器杯である。内面には回転ナデと板ナデ，外面には回転ナデが見られる。古代から中世にかけてのものと考えられる。102～108は擂鉢もしくは捏鉢である。102・103は捏鉢と考えられる。104は捏鉢の底部である。105は備前焼の擂鉢である。15世紀代のものと考えられる。106・107・108は擂鉢の底部で，いずれも内面に4条一束の擂目が見られる。

［近世～近代］（第45図）

109～118は陶器である。109は肥前・唐津系の皿である。内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。110は天目茶碗である。内面には黒色の釉薬が見られる。111は唐津系の皿である。内面は施釉が施され，外面においても一部施釉が見られる。112は京・信楽系の皿で内面に施釉と針支えの痕跡が残る。113は唐津系の碗で内面施釉が見られる。114は鉢もしくは甕で備前系と考えられる。



第43図　柿木荒神出土遺物実測図②（S=1/4）



第44図　柿木荒神出土遺物実測図③（S=1/4）

115は備前系の徳利である。116は備前系の甕口縁部である。117・118は擂鉢である。117は備前系の擂鉢で口縁部に櫛描きが2条入る。119・120は土師質土器である。119は甕と考えられる。120は甕もしくは焜炉の底部と考えられる。121～125は磁器である。121・122は肥前系の瓶底部である。内面は回転ナデが見られる。123は肥前系染付碗である。124は染付皿である。内外面に模様が施されている。125は肥前系の染付皿である。内面には蛇の目釉剥ぎが見られる。

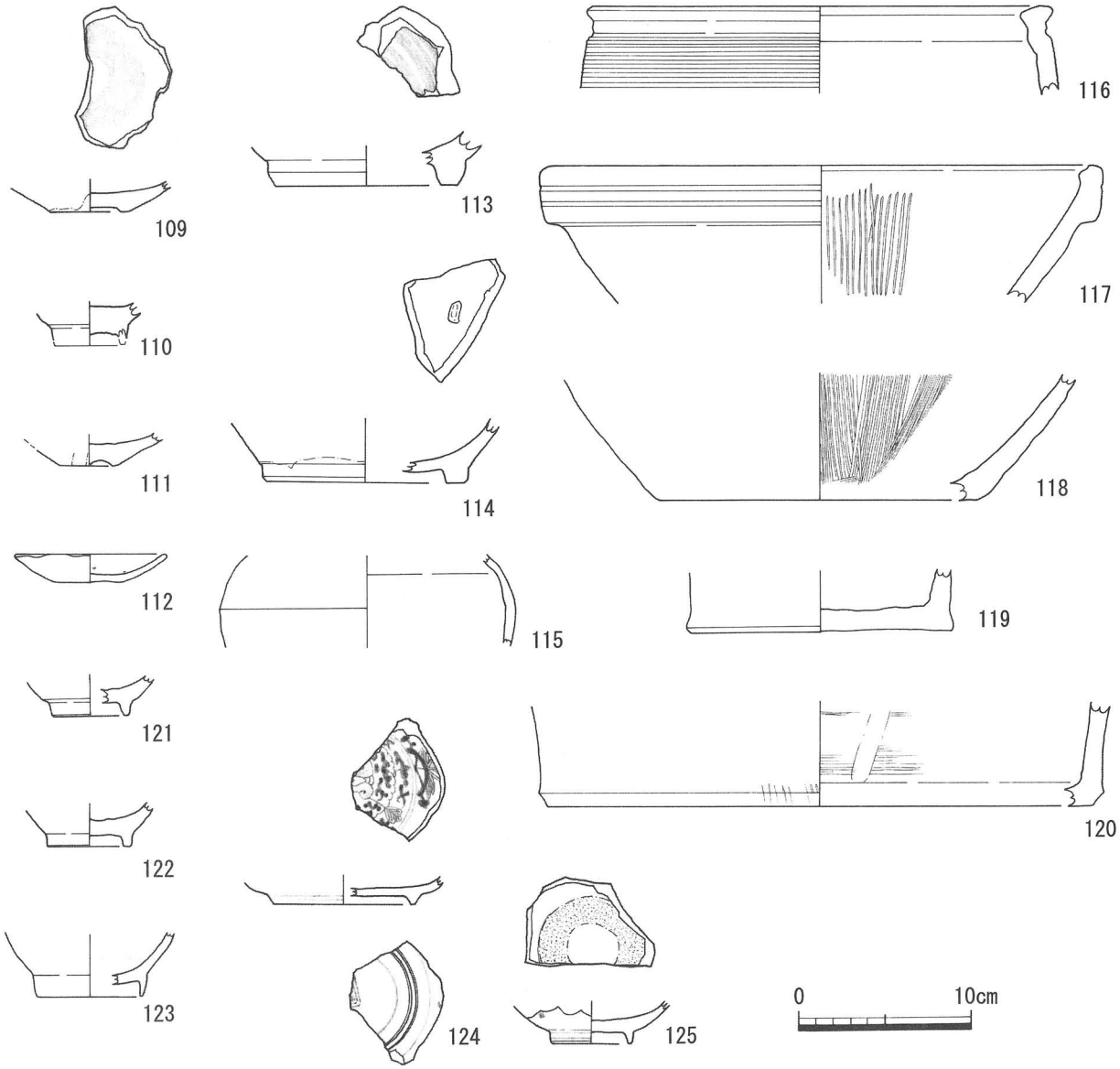
3　まとめ

以上，柿木荒神からは弥生時代から近世にかけての遺物が出土している。特に土師質土器の足釜や土鍋の類が多く出土しており，中には楠井産と考えられるものも含まれている。前述の通り現地確認時に塚は既に削平されており墳丘規模，埋葬施設の有無，遺物の出土状況等の詳細は不明である。地元の方の話では，祠の石垣補修工事とともに土台の工事を行い，その際に塚のコンクリート土台の東側約２m幅分を削り，祠の後ろ（西側）に移し足したということである。この掘削した東側２m幅内から遺物が出土した。そのため，工事の削平を免れた土台の下には遺物が含まれている可能性が高い。当該地近辺にはいくつか塚群が確認されていることから，元は小高い塚が存在していたものと考えられる。

柿木荒神の位置づけであるが，半田・小坂塚群に近接することから，同様に形成された塚群の一つであったと考えられるが，築造時期は不明である。また，周辺の塚の中には埴輪片を含むものが確認されていることから，当該地で古墳時代の須恵器が出土したことは，かつて周辺に存在した古墳の遺物が塚造成時に混入したものであるか，もしくは柿木荒神自体が元は古墳であった可能性がある。現在はコンクリート土台の上に祠が立ち，塚の場所を留めるにすぎない。また，周辺の田畑から須恵器・土師器片が確認できるのみで，元の面影は見ることができない。

引用・参考文献

（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18冊 国分寺楠井遺跡』



第45図　柿木荒神出土遺物実測図④（S=1/4）

第７表　藤尾城跡出土遺物・表採遺物観察表

No.	出土地	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
					口径	底径	器高(残存)	外面	内面	外面	内面			
1	第1次	磁器	碗	口縁~底部	12.0	4.0	6.1			7.5GY7/1（釉）明緑灰	10GY8/1（釉）明力灰	良	密	青磁染付茶碗。断面(N8/ 灰白)。
2	第1次	磁器	碗	口縁~底部	9.0	3.0	5.3			5GY 8/1 灰白	5GY 8/1 灰白	良	密	呉須　明青色。
3	第1次	陶器	灯明皿	口縁~底部	10.5	4・0	2.0			5Y8/2 灰白	5Y7/1 灰白	良	密	断面(5Y8/1 灰白)。
4	第2次	瓦	軒丸瓦	瓦当	瓦当径13.8			凸面：ナデ	凹面：ナデ	凸面10YR6/1 褐灰	凹面10YR6/1 褐灰	良	5mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。	
5	第2次表採	土師質土器	高台付皿or碗	底部		8.0	2.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐色	良	1mm以下の石英・長石・雲母を含む。	
6	第3次	土師質土器	甕	口縁部	36.0		7.9	指頭圧痕，叩き痕→ナデ	指頭圧痕，粗い刷毛，板ナデ	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/3 にぶい褐	良	2mm以下の石英・長石を含む。	
7	第3次	瓦	軒丸瓦	瓦当	瓦当径10.3			凸面：ナデ	凹面：ナデ	凸面10YR7/3 にぶい黄橙	凹面10YR7/3 にぶい黄橙	良	2mm以下の石英・長石を含む。	
8	第3次	瓦	丸瓦					凸面：縄目叩き	凹面：布目	凸面5YR6/6 橙	凸面5YR6/6 橙	良	5mm以下の石英・長石を含む。	
9	第3次	瓦	丸瓦					凸面：縄目叩き	凹面：布目	凸面10YR7/1 灰白	凹面N4/1 灰	良	5mm以下の石英・長石を含む。	凹面にコビキA。
10	第3次	瓦	平瓦						凹面：指頭圧痕	凸面7.5Y6/1 灰	凹面5Y6/1 灰	良	4mm以下の石英・長石を含む。	両面にコビキA。
11	第4次	瓦	平瓦						凹面：ナデ	凸面2.5Y7/1 灰白	凹面2.5Y7/1 灰白	良	1mm以下の石英・長石を含む。	
12	第4次	土師質土器	小皿	口縁~底部	5.0	4.0	0.9	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	5Y6/6 橙	良	1mm以下の長石を含む。	
13	第4次表採	土師質土器	杯	口縁~底部	9.6		2.2	回転ナデ	回転ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部調整不明。
14	第4次表採	土師質土器	杯	口縁部	10.6		1.4	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	密	
15	第4次表採	土師質土器	杯	口縁~底部	10.8		2.4	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	密	底部調整不明。
16	第4次表採	土師質土器	杯	口縁部	13.0		1.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	密	
17	第4次表採	土師質土器	杯	口縁~底部	11.0		2.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部調整不明。
18	第4次表採	土師質土器	杯	底部		7.0	1.8	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	密	底部回転篦削りか。
19	第4次表採	土師質土器	杯	底部		6.4	0.9	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	密	底部回転篦削り。
20	第4次表採	土師質土器	杯	底部		7.8	1.2	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	3mm以下の石英・長石を含む。	底部回転篦削り。
21	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	5.6	4.6	0.8	摩滅により不明	摩滅により不明	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	良	2mm以下の石英・長石を含む。	底部調整不明。
22	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	6.0	5.0	0.7	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	密	底部回転篦削り。
23	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	5.6	5.0	0.9	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい黄橙	良	2mm以下の石英・長石を含む。	底部調整不明。
24	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	6.0	4.8	1.0	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	1mm以下の長石を含む。	底部回転篦削り。
25	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	5.9	4.8	1.2	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	密	底部回転篦削り。
26	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	6.2	5.3	1.0	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/6 橙	良	1mm以下の石英・長石・雲母を含む。	底部回転篦削りか。
27	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	6.0	5.0	0.7	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部調整不明。
28	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	6.4	4.0	1.3	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部回転篦削り。
29	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	7.0	5.2	0.9	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部回転篦削り。
30	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	6.4	5.0	1.1	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部回転篦削り。
31	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	8.0	5.9	1.0	回転ナデ	回転ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部回転篦削り。
32	第4次表採	土師質土器	小皿	底部		5.6	1.2	摩滅により不明	摩滅により不明	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	2mm以下の石英・長石を含む。	底部調整不明。 内部10YR2/1黒の漆付着。
33	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	6.4	5.2	1.0	回転ナデ	底部回転篦削り	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	良	1mm以下の長石を含む。	底部回転篦削り。
34	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	8.0	6.0	1.5	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 浅黄橙	10YR7/4 浅黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部回転篦削り。
35	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	9.0	7.4	1.7	磨耗のため不明	回転ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/3 にぶい赤褐	良	2mm以下の長石を含む。	底部調整不明。
36	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	10.0	7.6	1.2	磨耗のため不明	磨耗のため不明	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	底部調整不明。
37	第4次表採	土師質土器	小皿	底部		4.8	1.6	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	良	密	底部回転篦削り。
38	第4次表採	土師質土器	小皿	口縁~底部	8.8	8.5	2.4	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	良	2mm以下の石英・長石を含む。	
39	第4次表採	土師質土器	高台付椀or皿	高台			1.9	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	良	密	
40	第4次表採	土師質土器	高台付椀or皿	高台			1.6	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	密	
41	第4次表採	土師質土器	足釜	脚部				ナデ，指頭圧痕		5YR6/4 にぶい橙		良	4mm以下の石英・長石を含む。	断面(2.5Y4/1 黄灰)。
42	第4次表採	土師質土器	擂鉢	底部付近			4.6	指頭圧痕		10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	1mm以下の石英・長石・雲母を含む。	擂目7条一束。
43	第4次表採	弥生土器	特殊器台	体部			4.7	縦刷毛→沈線	篦削り	2.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。	外面赤色顔料塗布。吉備産土器。
44	第4次表採	弥生土器	特殊器台	体部			2.5	沈線	篦削り	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	良	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。	外面赤色顔料塗布か。吉備産土器。
45	第4次表採	弥生土器	特殊壺	頸部			3.0	凹線，沈線	篦削り	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	良	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。	吉備産土器。
46	第4次表採	弥生土器	甕	体部			1.7	波状文	摩滅により不明	2.5YR5/6 明赤褐	2.5YR5/6 明赤褐	良	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	
47	第4次表採	弥生土器	高杯	受け部			1.5	ナデ	篦磨き	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/2 灰黄褐	良	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。	
48	第4次表採	弥生土器	高杯	受け部付近			2.7	ナデ	ナデ，篦磨き	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	良	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む。	

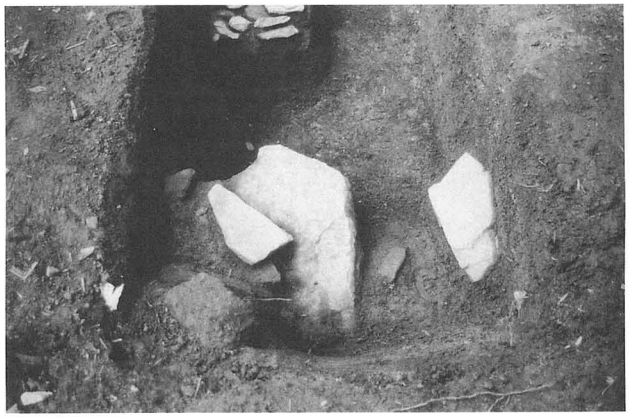
第８表　柿木荒神出土遺物観察表

No.	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		焼成	胎土	備考
				口径	底径	器高(残存)	外面	内面	外面	内面			
64	石器	スクレイパー		長さ6.2，幅5.8，厚さ1.5					5B5/1 青灰	5B5/1 青灰			サヌカイト。
65	弥生土器	甕	底部		4.9	2.5	ナデ，指頭圧痕	ナデ,指頭圧痕	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	良	1.5mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	
66	弥生土器	甕	底部		10.0	3.3	ナデ，指頭圧痕	ナデ,指頭圧痕	10YR6/3 灰黄褐	10YR7/3 にぶい黄橙	良	1.5mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	
67	須恵器	杯蓋	天井部			1.8	回転篦削り	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	良	密	
68	須恵器	高台付杯	底部		5.4	1.2	回転ナデ，指頭圧痕	ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	良	密	
69	須恵器	高台付杯	底部		11.2	2.0	回転ナデ	回転ナデ	N5/ 灰	N7/ 灰白	良	密	
70	須恵器	皿	底部	14.6	10.8	2.1	回転ナデ，底部回転篦削り	回転ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	良	2mm以下の石英・長石を含む。	外面底部に墨書か。
71	須恵器	高台付壺	底部		11.8	2.2	回転ナデ	回転ナデ	N7/ 灰白	N6/ 灰白	良	密	
72	須恵器	壺	体部	最大径7.2		5.0	回転ナデ	回転ナデ，絞り痕	N6/ 灰	N8/ 灰白	良	0.5mm以下の石英・長石を含む。	
73	須恵器	甕	括れ部	最大径7.0		3.4	ナデ	ナデ	5Y8/1 灰白	5Y4/1 灰白	良	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	
74	須恵器	鍋か	脚部or把手			6.9	篦削り，篦磨き		N6/ 灰		良	密	断面(N6/灰)。
75	須恵器	甕	口縁部	28.0		4.3	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	良	1mm以下の石英・長石を含む。	
76	須恵器	甕	口縁~括れ部	35.6		9.4	回転ナデ，叩き痕	回転ナデ，指頭圧痕，	N5/ 灰	N5/ 灰	良	密	内部の頸部に接合痕。
77	須恵質土器	甕	口縁	38.0		4.6	回転ナデ	磨滅のため不明	N7/ 灰白	N/ 灰白	良	密	
78	須恵質土器	甕	底部		14.9	6.8	回転ナデ，指頭圧痕	回転ナデ，指頭圧痕	N5/ 灰	N 5/ 灰	良	1～2mm以下の石英・長石を含む。	
79-1	須恵器	甕	体部			14.4	叩き痕	当て具痕	10R5/2 灰赤	5Y7/1 灰白	良	密	
79-2		杯	底部			5.0		回転ナデ		10YR5/1 褐色	良	密	
80	須恵質土器	甕	括れ部	最大径19.6		3.0	回転ナデ	横ナデ，回転ナデ	10Y5/1 灰	10Y5/1 灰	良	0.5mm以下の石英・長石を含む。	
81	須恵質土器	足釜	口鍔部	23.0		5.6	回転ナデ，接合痕	回転ナデ，横刷毛	2.5Y7/1 白灰	2.5Y7/1 白灰	良	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	鍔に接合痕。
82	土師質土器	足釜	口鍔部	17.0		4.3	横ナデ，指頭圧痕	横ナデ	7.5YR5/6 明褐	10YR5/4 にぶい黄褐	良	0.5～1mm以下の石英・長石を含む。	鍔に接合痕。
83	土師質土器	足釜	口鍔部	25.0		5.0	縦刷毛，指頭圧痕	横刷毛	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/6 浅黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	口縁部に凹み。
84	土師質土器	足釜	口鍔部	24.6		4.8	横ナデ，指頭圧痕	横ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	
85	土師質土器	足釜	口鍔部	21.6		3.8	ナデ，篦削り，指頭圧痕	ナデ，横刷毛	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR6/2 灰褐	良	0.5～1mm以下の石英・長石を含む。	
86	土師質土器	鍋	口縁部	21.6		4.5	横ナデ，指頭圧痕	横ナデ	2.5YR6/8 橙	2.5YR6/8 橙	良	0.5～1mm以下の石英・長石を含む。	体部に接合痕。
87	土師質土器	鍋	口縁部	24.0		5.7	縦刷毛，横刷毛，横ナデ，指頭圧痕	横ナデ，横刷毛	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい橙	良	1mm以下の石英・長石・雲母を含む。	
88	土師質土器	鍋	口縁部	28.0		3.1	横ナデ，指頭圧痕	横刷毛，横ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	
89	土師質土器	鍋	口縁部	32.0		3.0	縦刷毛	ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y8/2 灰白	良	1mm以下の石英・長石を含む。	
90	土師質土器	鍋	口縁部	31.6		6.6	ナデ，縦刷毛，指頭圧痕	板ナデ，指頭圧痕	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	良	1mm以下の石英・長石を含む。	
91	土師質土器	鍋	口縁	29.0		3.6	ナデ，縦刷毛	ナデ，刷毛	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	良	1～2mm以下の石英・長石を含む。	
92	土師質土器	鍋	口縁	31.8		2.1	縦刷毛，横刷毛	横刷毛	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	良	1～2mm以下の石英・長石を含む。	
93	土師質土器	鍋	口縁部	41.0		5.5	横ナデ，接合痕	横ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	良	0.5～1mm以下の石英・長石を含む。	体部に接合痕。
94	土師質土器	鍋	口縁部	42.0		9.2	ナデ，縦刷毛，指頭圧痕	横刷毛	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	良	1～3mm以下の石英・長石を含む。	
95	土師質土器	足釜	脚部			12.6	ナデ，指頭圧痕		10YR7/4 にぶい黄橙		良	0.5～1mm以下の石英・長石を含む。	
96	土師質土器	足釜	脚部			13.5	ナデ，指頭圧痕		10YR7/3 にぶい黄橙		良	2mm以下の石英・長石を含む。	
97	土師質土器	足釜	脚部			14.3	ナデ，指頭圧痕		10YR7/3 にぶい黄橙		良	0.5mm以下の石英を含む。	
98	土師質土器	甕	口縁部	23.8		4.2	横ナデ	横ナデ	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰	良	1mm以下の石英・長石を含む。	楠井産甕。
99	土師質土器	甕	体部	最大径19.0		8.3	ナデ，指頭圧痕	篦ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 にぶい黄橙	良	0.5mm～1mm以下の石英・長石を含む。	
100	須恵器	甕	底部		16.6	4.5	篦削り，指頭圧痕，格子目叩き	横刷毛，指頭圧痕	10YR7/ 灰白	10YR7/ 灰白	良	密	
101	土師器	杯	口縁~体部	14.4		4.0	回転ナデ	ナデ，板ナデ	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	良	密	
102	土師質土器	捏鉢	口縁~体部	39.0		6.9	板ナデ	ナデ，篦削り，指頭圧痕	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	良	1～2mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	
103	須恵質土器	捏鉢	口縁部	28.0		3.35	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	良	0.5～2mm以下の石英・長石を含む。	
104	土師質土器	捏鉢	底部		13.6	5.2	摩滅のため不明	摩滅のため不明	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	不良	1～2mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	擂り目磨耗のため不明。
105	陶器	擂鉢	口縁~底部	29.4		9.0	横ナデ	横ナデ，擂り目	N6/ 灰	7.5YR 6/1 褐灰	良	1～3mm以下の石英・長石を含む。	擂り目9条1束，備前焼。
106	土師質土器	擂鉢	底部		10.0	3.4	ナデ	ナデ，擂り目	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	良	0.5～1mmの石英を少量含む。	擂り目4条1束。
107	須恵質土器	擂鉢	底部		14.6	3.4	回転篦削り，回転ナデ	ナデ，擂り目	7.5YR6/1 灰	10YR7/1 灰白	良	1～2mm以下の石英・長石を含む。	擂り目4条1束。
108	土師質土器	擂鉢	底部		12.0	3.8	磨滅のため不明	擂り目	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 橙	良	2mm以下の石英・長石を含む。	擂り目4条1束。
109	陶器	皿	底部		4.6	1.7	回転ナデ		2.5Y7/1（釉）灰白	7.5YR8/1（釉）灰白	良好	密	内部に蛇の目釉(5YR5/4にぶい赤褐)。 断面(7.5YR6/3にぶい褐)。肥前・唐津系。
110	陶器	碗	底部	最大径6.0		2.1	ナデ		2.5Y7/1 灰白	10BG2/1（釉）青黒	良	密	天目茶碗。
111	陶器	皿	底部		3.4	1.8	回転ナデ		5YR6/4 にぶい橙	2.5Y6/4 にぶい黄橙	良	密	内面は施釉，外面は一部施釉が見られる。 唐津焼。
112	陶器	皿	口縁~底部	8.8	3.8	1.6	回転ナデ，底部回転篦削り		2.5Y8/1 灰白	5Y6/6（釉）オリーブ	良	密	断面(2.5Y8/1灰白)。内面貫入。針支え。 京都・信楽系。
113	陶器	碗	底部		10.4	3.1	回転ナデ，底部回転篦削り	回転ナデ	10YR4/1（釉）暗赤灰	2.5Y7/1（釉）灰白	良	やや密	断面(10R6/2灰赤)。唐津焼。
114	陶器	鉢or甕	底部		11.4	3.7	回転ナデ，底部回転篦削り	回転ナデ	5YR4/8（釉）赤褐	5YR4/8（釉）赤褐	良好	密	胎土目積み断面(2.5Y7/1灰白)。
115	陶器	徳利	体部	最大径17.0		5.3	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/6 明黄褐	良	密	備前系。
116	陶器	甕	口縁部	26.8		5.2	ナデ	ナデ	2.5YR4/3 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	良	0.5mm以下の石英・長石を含む。	外面櫛描き直線状。備前系。
117	陶器	擂鉢	口縁部	32.5		7.9	横ナデ，指頭圧痕	横ナデ，擂り目	7.5Y4/4 にぶい赤	7.5Y4/4 にぶい赤	良	2mm以下の石英・長石を含む。	擂り目9条1束。
118	陶器	擂鉢	底部		18.2	7.2	回転ナデ，指頭圧痕	回転ナデ，擂り目	10YR6/4 にぶい赤橙	10YR6/4 にぶい赤橙	良好	2mm以下の石英・長石を含む。	擂り目10条1束。
119	土師質土器	甕か	底部		15.4	3.5	ナデ	指頭圧痕	7.5YR7/3 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	良	1～5mm以下の石英・長石を含む。	
120	土師質土器	甕か	底部		31.4	6.0	ナデ，縦刷毛	横刷毛，横ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	良	0.5～1mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	
121	磁器	瓶	底部		4.4	2.0		回転ナデ	10GY8/1（釉）明緑灰	N8/ 灰白	良	密	内面釉剥離，断面(N8/灰白)。肥前系。
122	磁器	瓶	底部	4.8		2.5		回転ナデ	10GY8/1（釉）明緑灰	7.5Y8/2（釉）灰白	良好	密	断面(N8/灰白)。肥前系。
123	磁器	染付碗	底部		6.0	3.7			10GY8/1（釉）明緑灰	10GY8/1（釉）明緑灰	良	密	内部に圏線1条断面(N8/灰白)。肥前系。
124	磁器	染付皿	底部		8.2	1.6			7.5Y8/2（釉）灰白	7.5Y8/2（釉）灰白	良	密	断面(7.5YR8/1灰白)。 呉須(10BG6/1青灰)。
125	磁器	染付皿	底部		4.6	2.5			7.5GY8/1（釉）明緑灰	7.5GY8/1（釉）明緑灰	良好	密	外面に圏線3条(2.5GY4/1暗オリーブ灰)。 内部に蛇の目釉ハギ。肥前系。

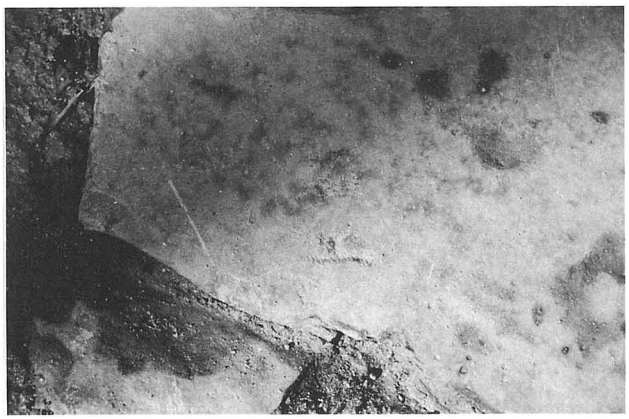
図版1　藤尾城跡

1　第1次 1−1トレンチ（西から）

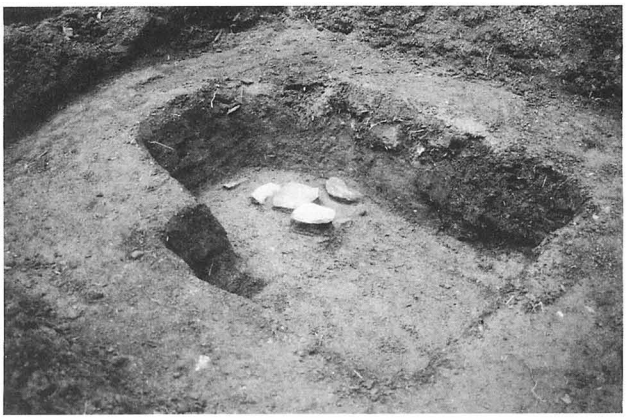
2　第1次 石組状遺構（北西から）



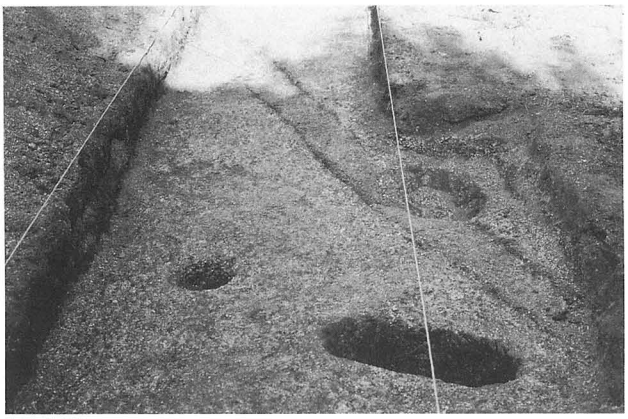
3　第1次 石3・4（南東から）



4　第1次 石1刻印「石工」

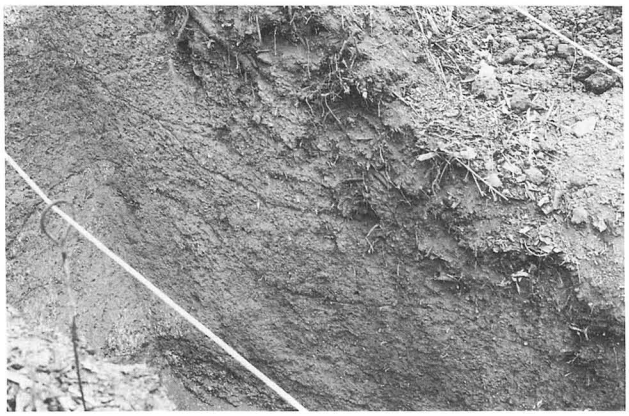


5　第1次 1−2トレンチ（南から）



6　第2次 2−1トレンチ（南から）

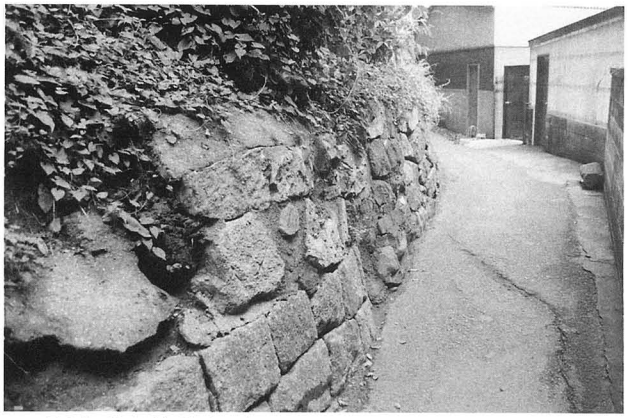
7　第2次 2−3トレンチ土層（西から）



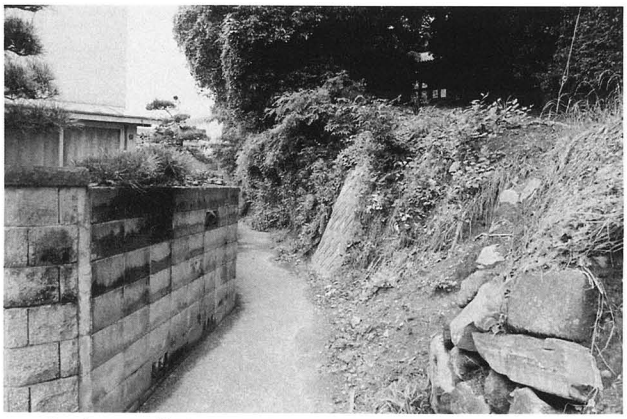
8　第2次 2−4トレンチ土層（東から）

図版2　藤尾城跡・柿木荒神

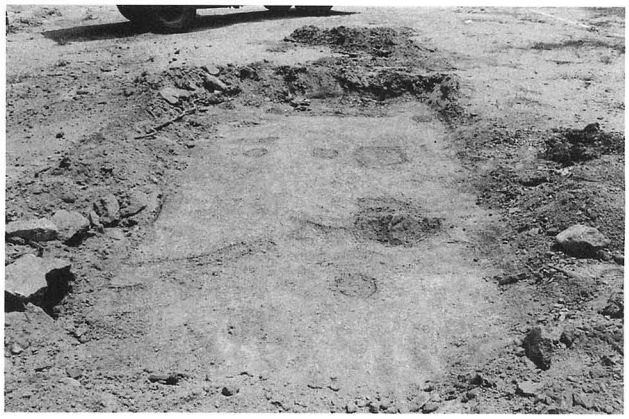
1　第2次 2−6トレンチ土層（西から）



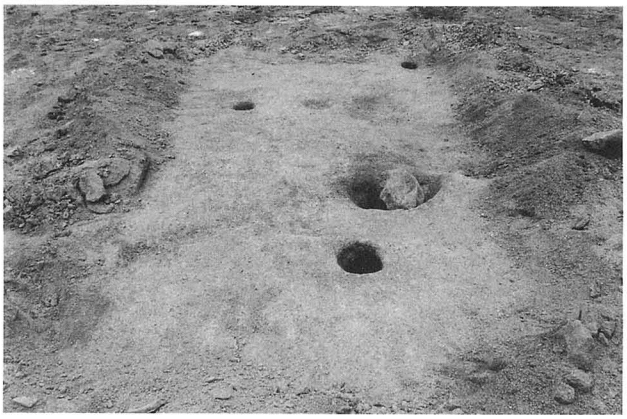
2　第3次 No13杭付近（南西から）



3　第3次 No54杭付近（北東から）



4　第4次 遺構検出状況（東から）

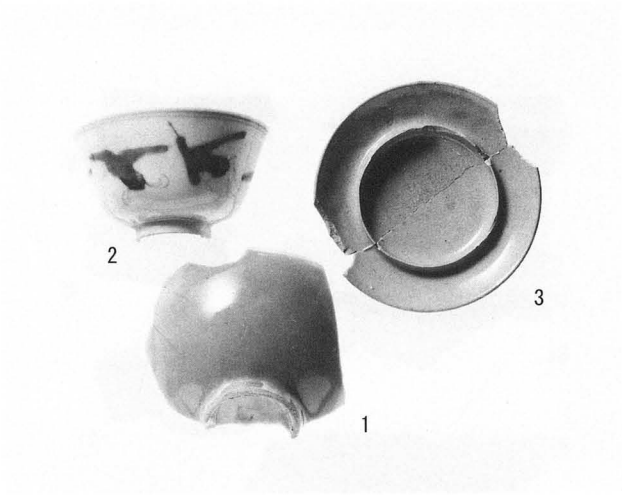


5　第4次 遺構完掘状況（東から）

6　第4次 ＳＰ2検出状況（西から）

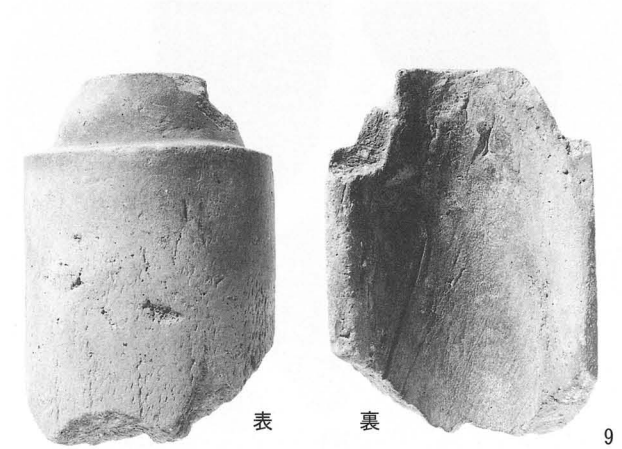
7　柿木荒神全景（東から）

8　柿木荒神近景（東から）

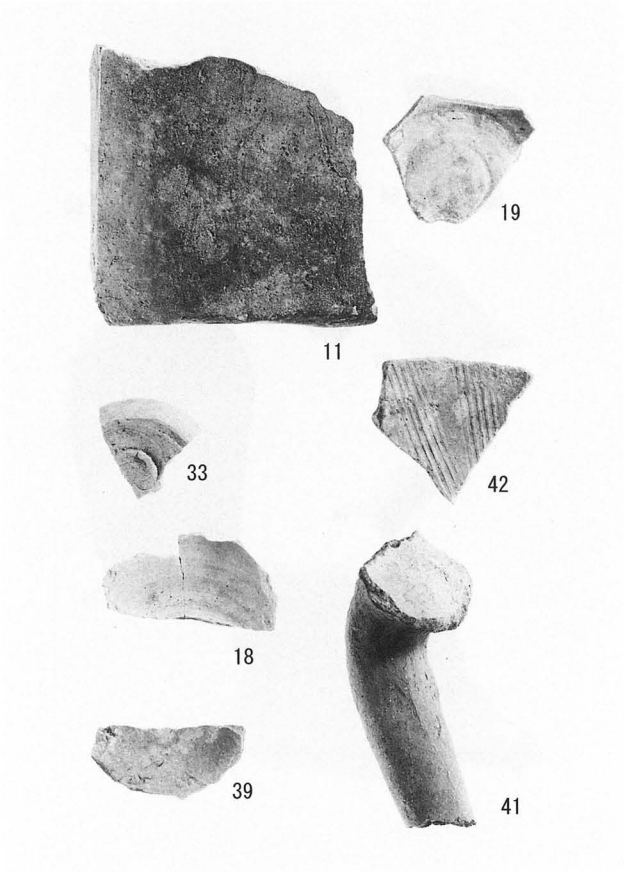


1　第1次 出土遺物

2　第3次 出土遺物（軒丸瓦）



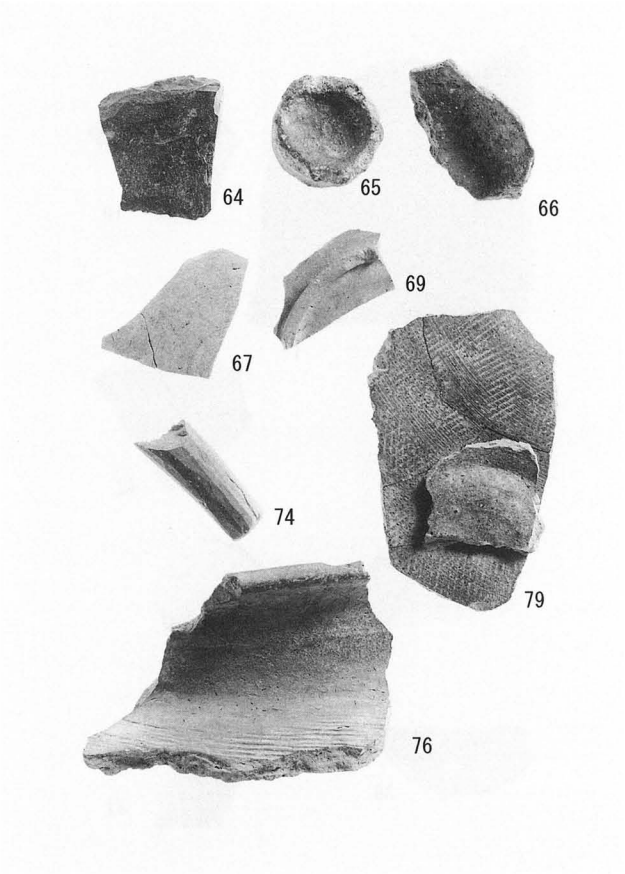
3　第3次 出土遺物（丸瓦 コビキA）



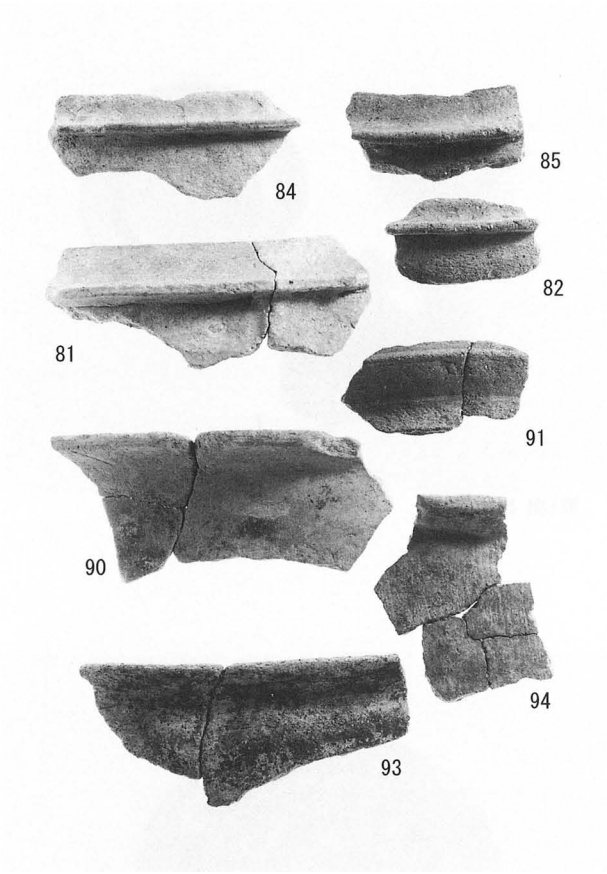
4　第4次 出土・表採遺物

5　第4次 表採遺物（特殊器台・特殊壺）

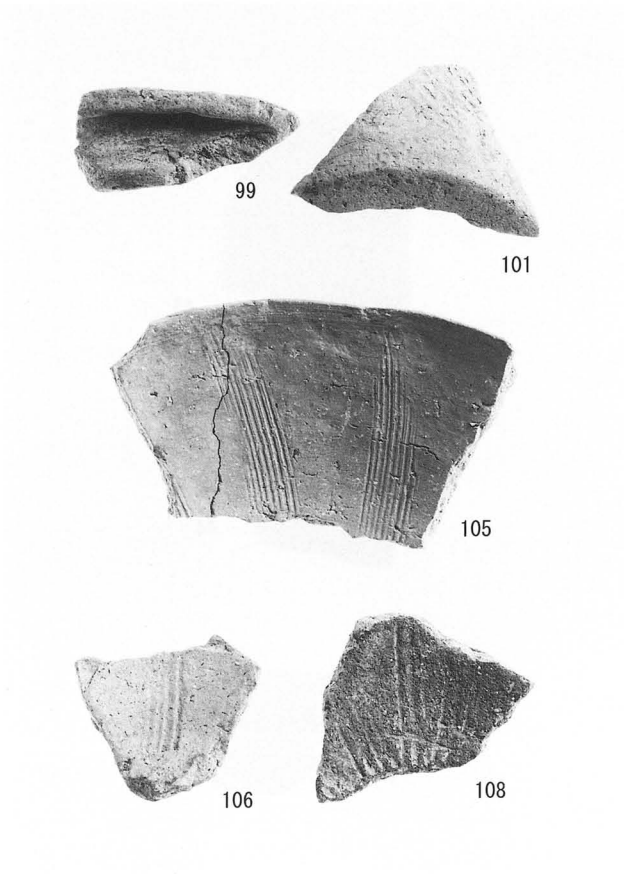
図版4　柿木荒神



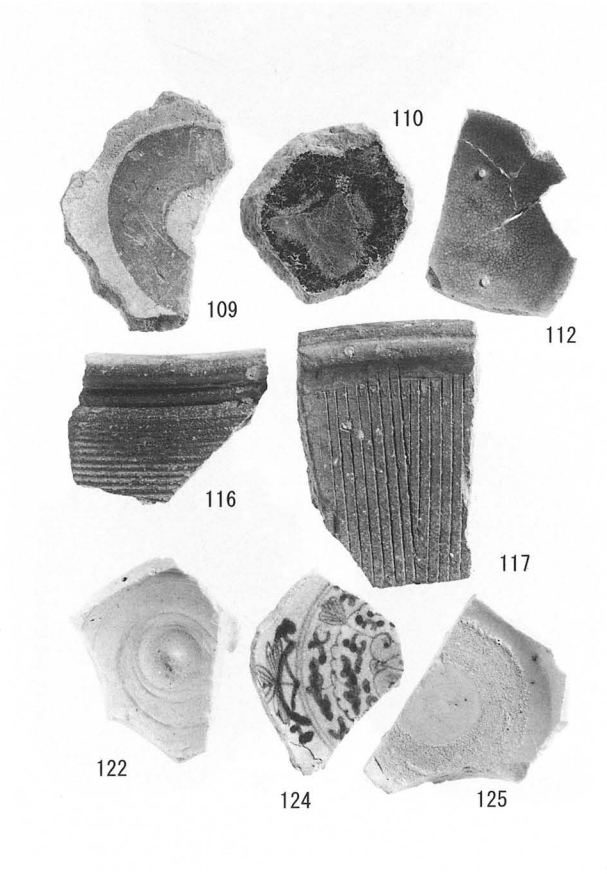
1　柿木荒神出土遺物①



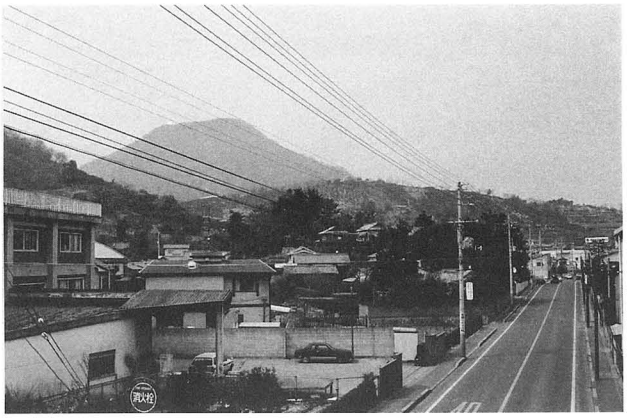
2　柿木荒神出土遺物②



3　柿木荒神出土遺物③



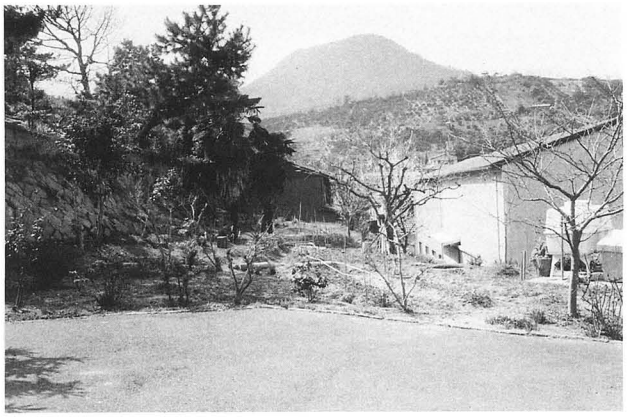
4　柿木荒神出土遺物④



1　遠景（東から）

2　遠景（西から）

3　調査以前（A・B・Hトレンチ）



4　調査以前（C・D・Eトレンチ）

5　調査以前（F・Gトレンチ）

6　Aトレンチ完掘状況

7　Bトレンチ完掘状況

8　Cトレンチ遺構検出状況

図版6　作山城跡

1　Dトレンチ遺構検出状況

2　Eトレンチ遺構検出状況

3　Fトレンチ完掘状況

4　Gトレンチ完掘状況

5　Hトレンチ完掘状況

6　蔵骨器出土状況

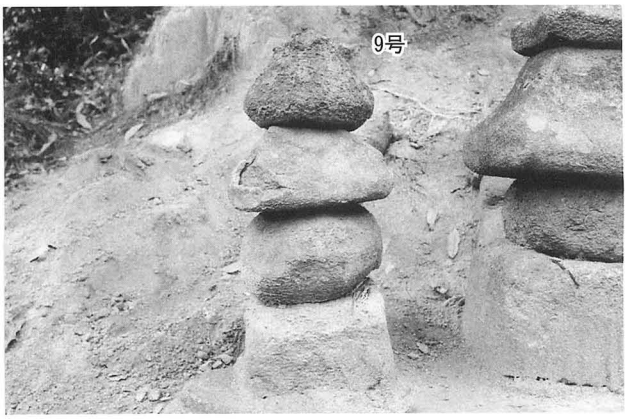
7　礫石経出土状況

8　墓標（1号）

1　墓標（2号～4号）

2　墓標（5号）

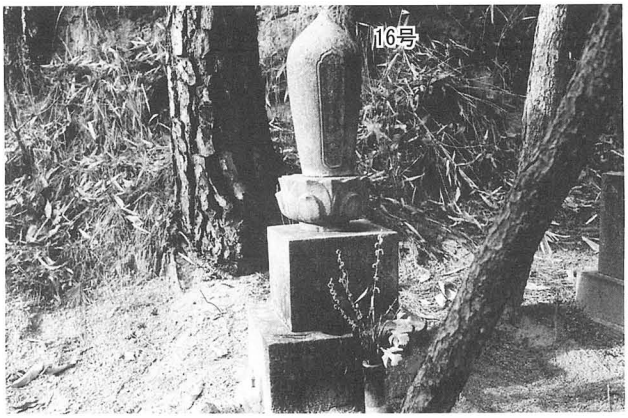
3　墓標（6号～8号）



4　墓標（9号）

5　墓標（10号～12号）

6　墓標（13号～15号）



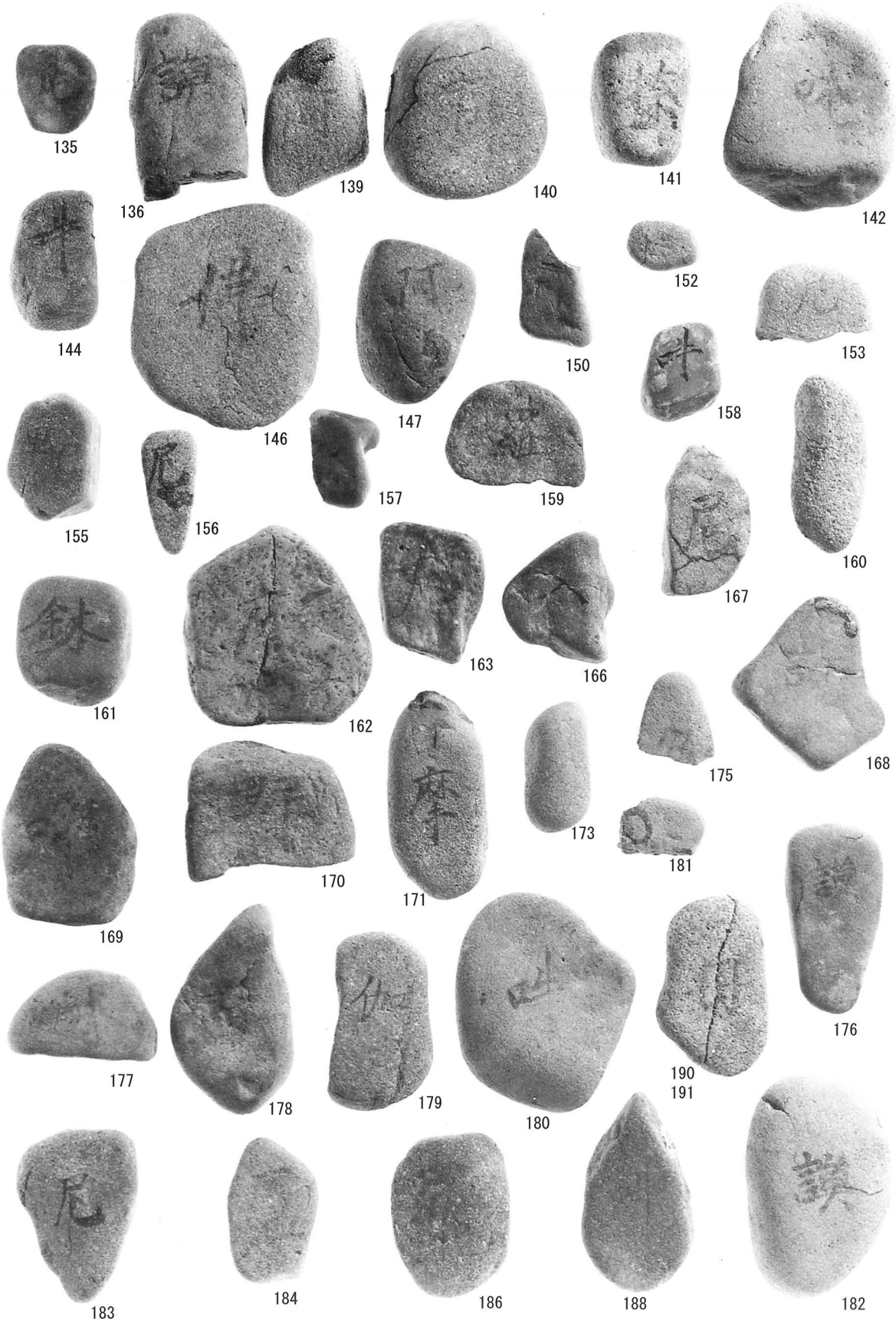
7　墓標（16号）

8　墓標（17号）

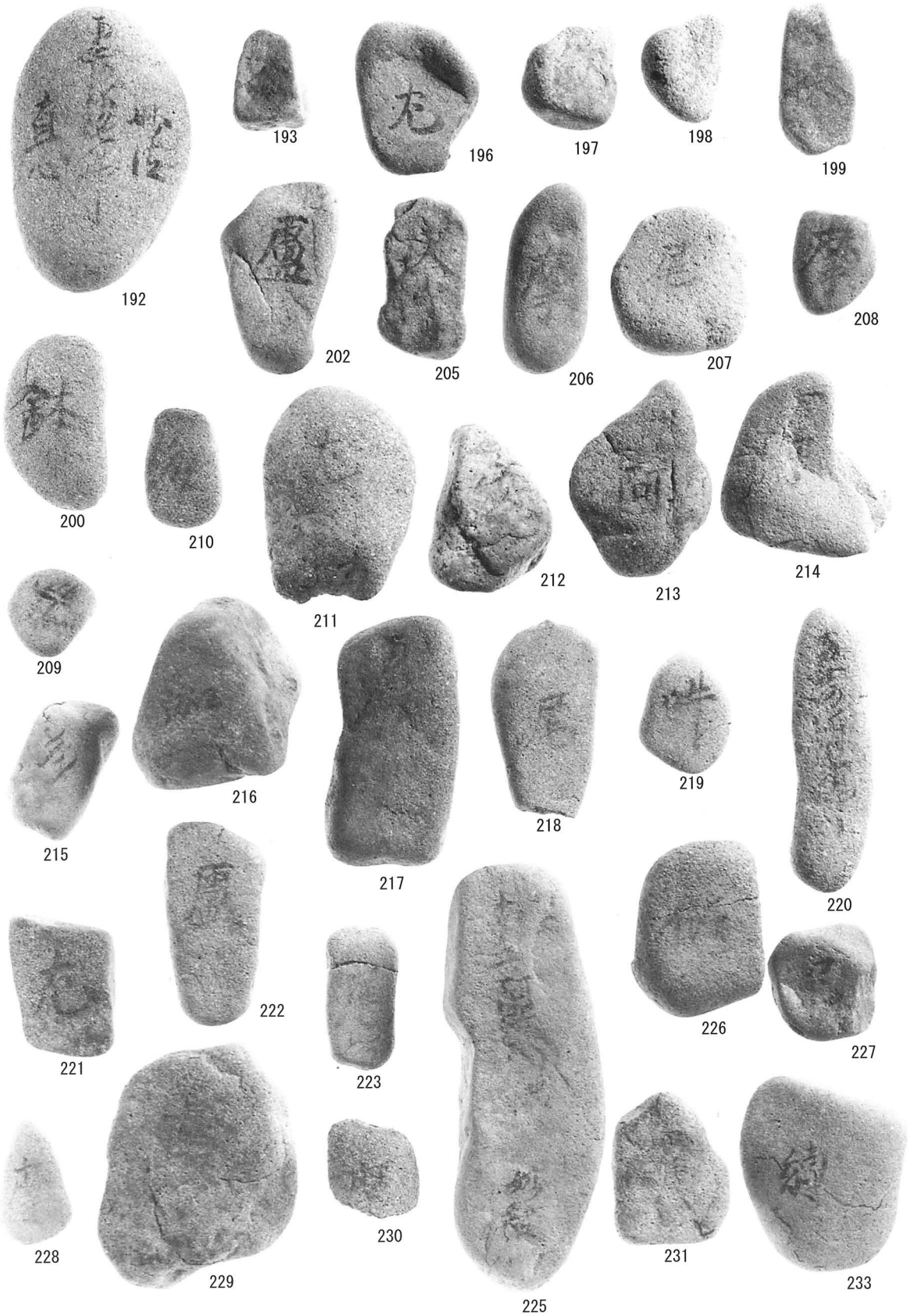
図版8　作山城跡出土礫石経(1)

図版9　作山城跡出土礫石経(2)

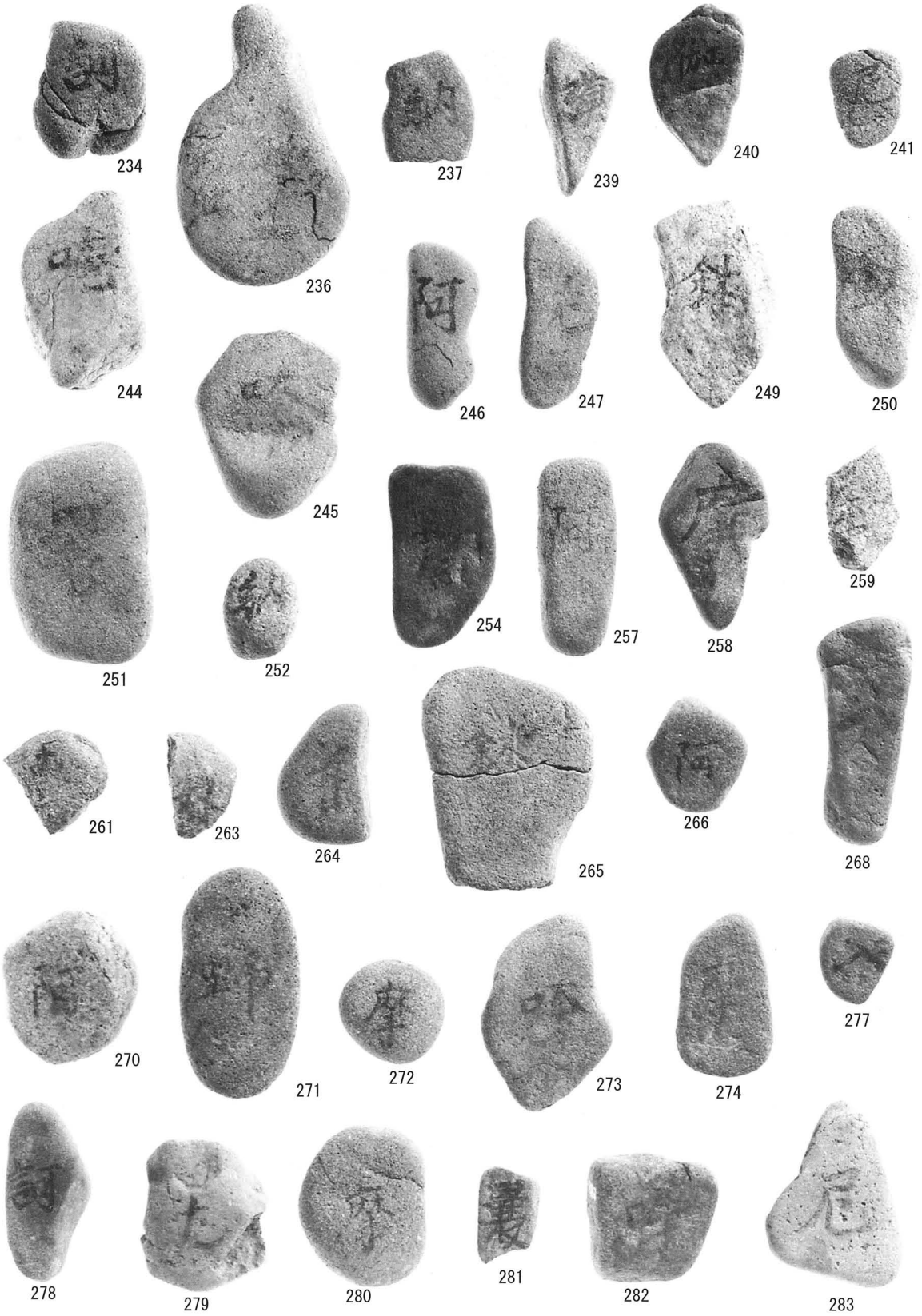
図版10　作山城跡出土礫石経(3)



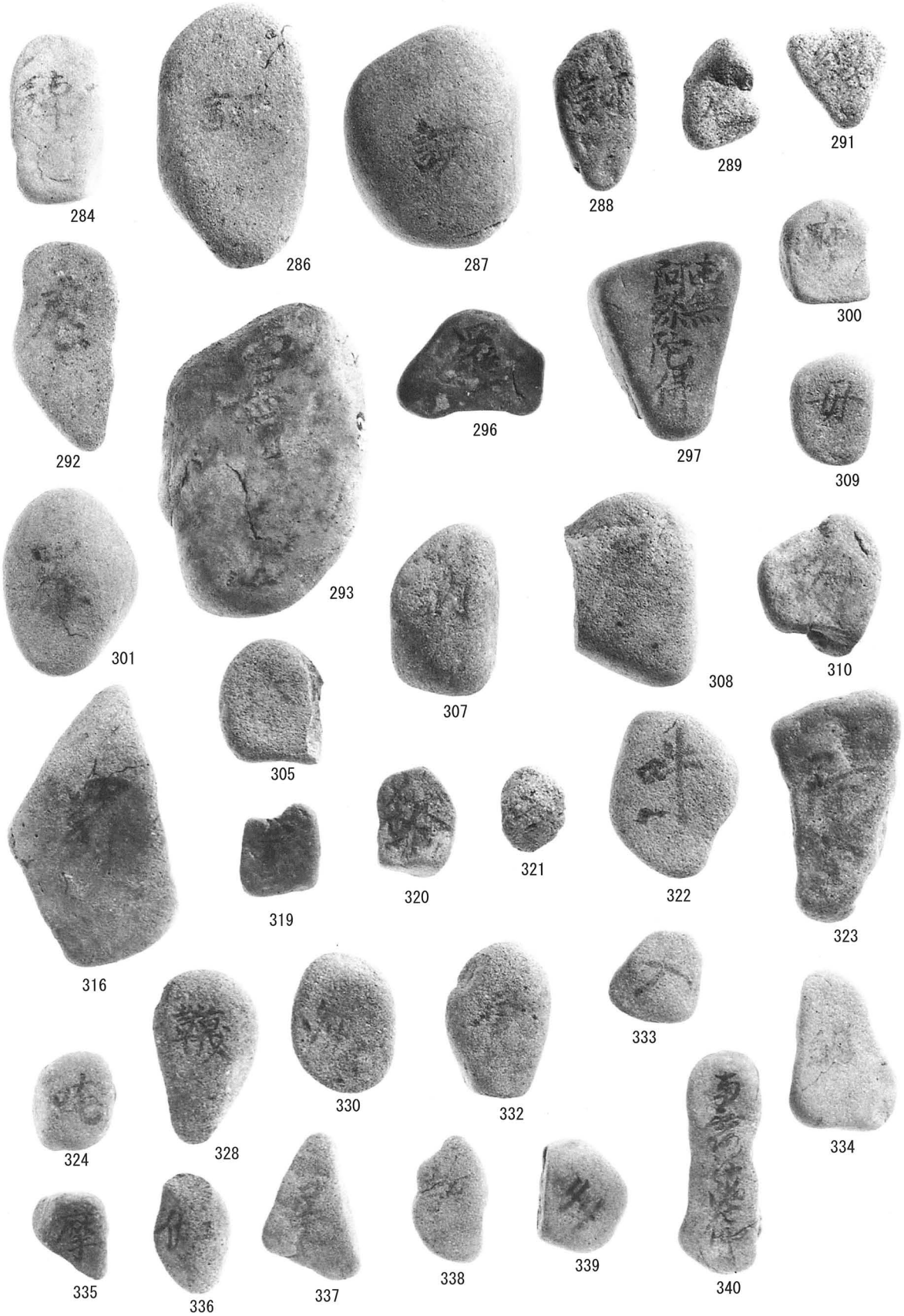
図版11　作山城跡出土礫石経(4)



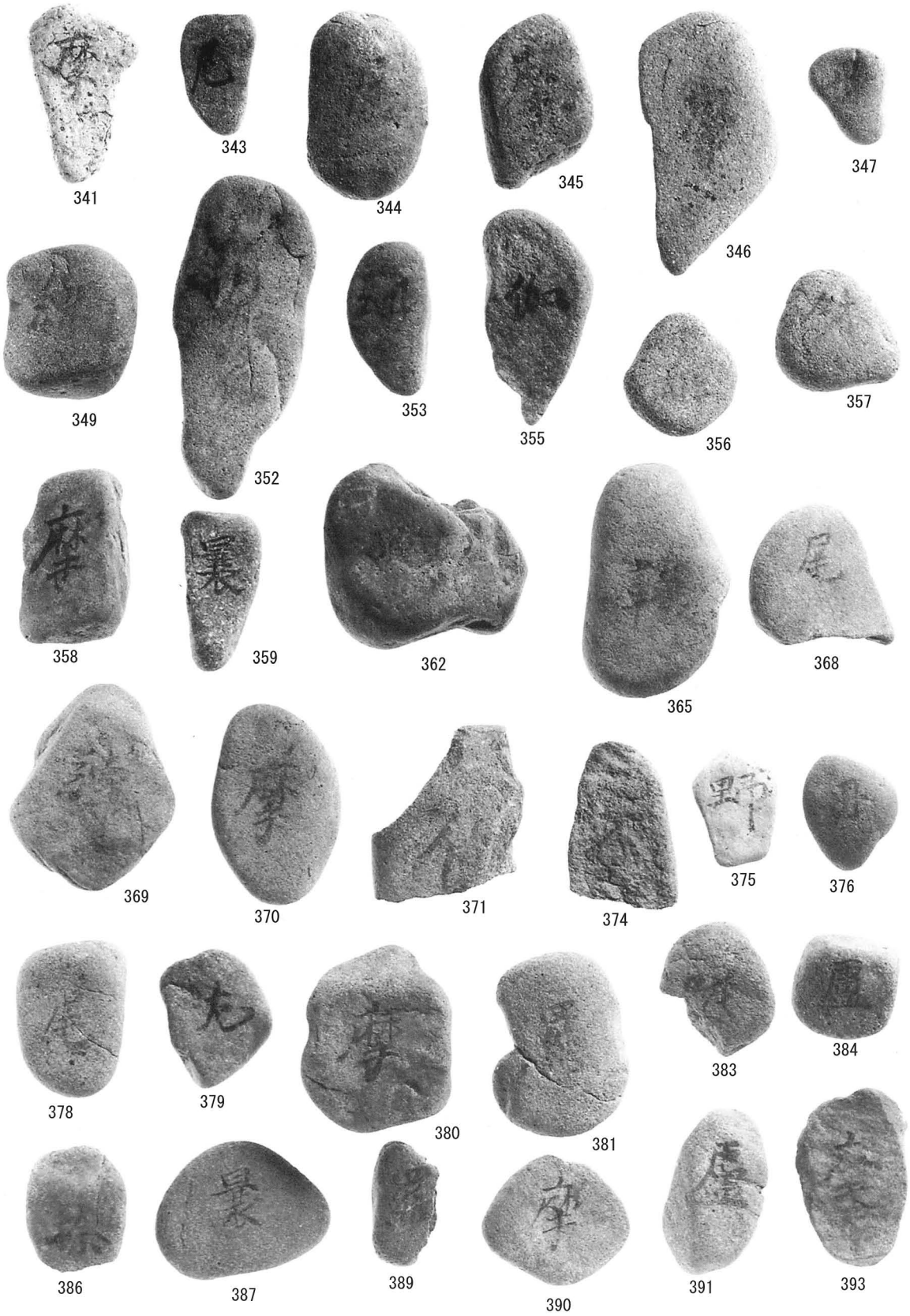
図版12　作山城跡出土礫石経(5)



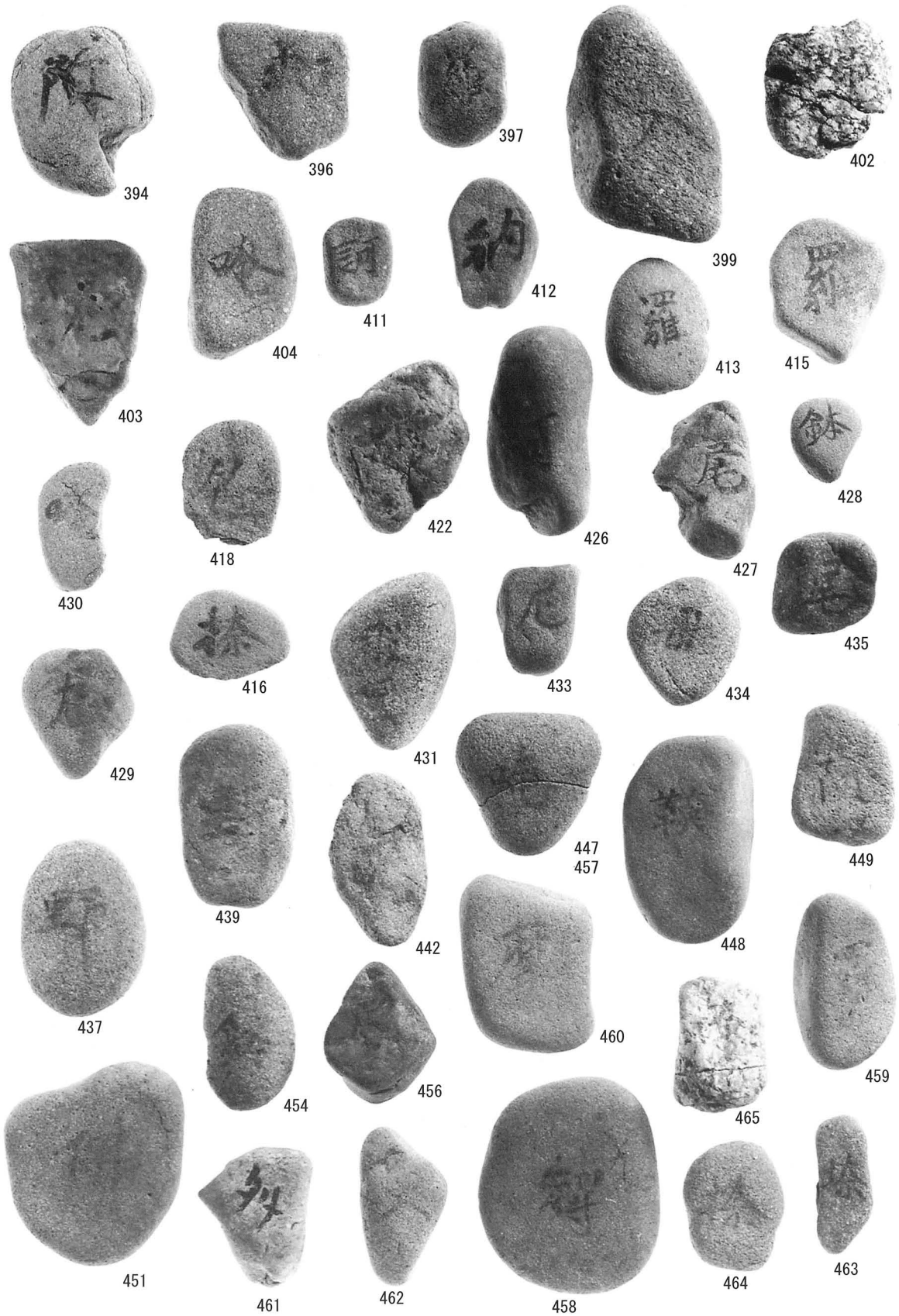
図版13　作山城跡出土礫石経(6)



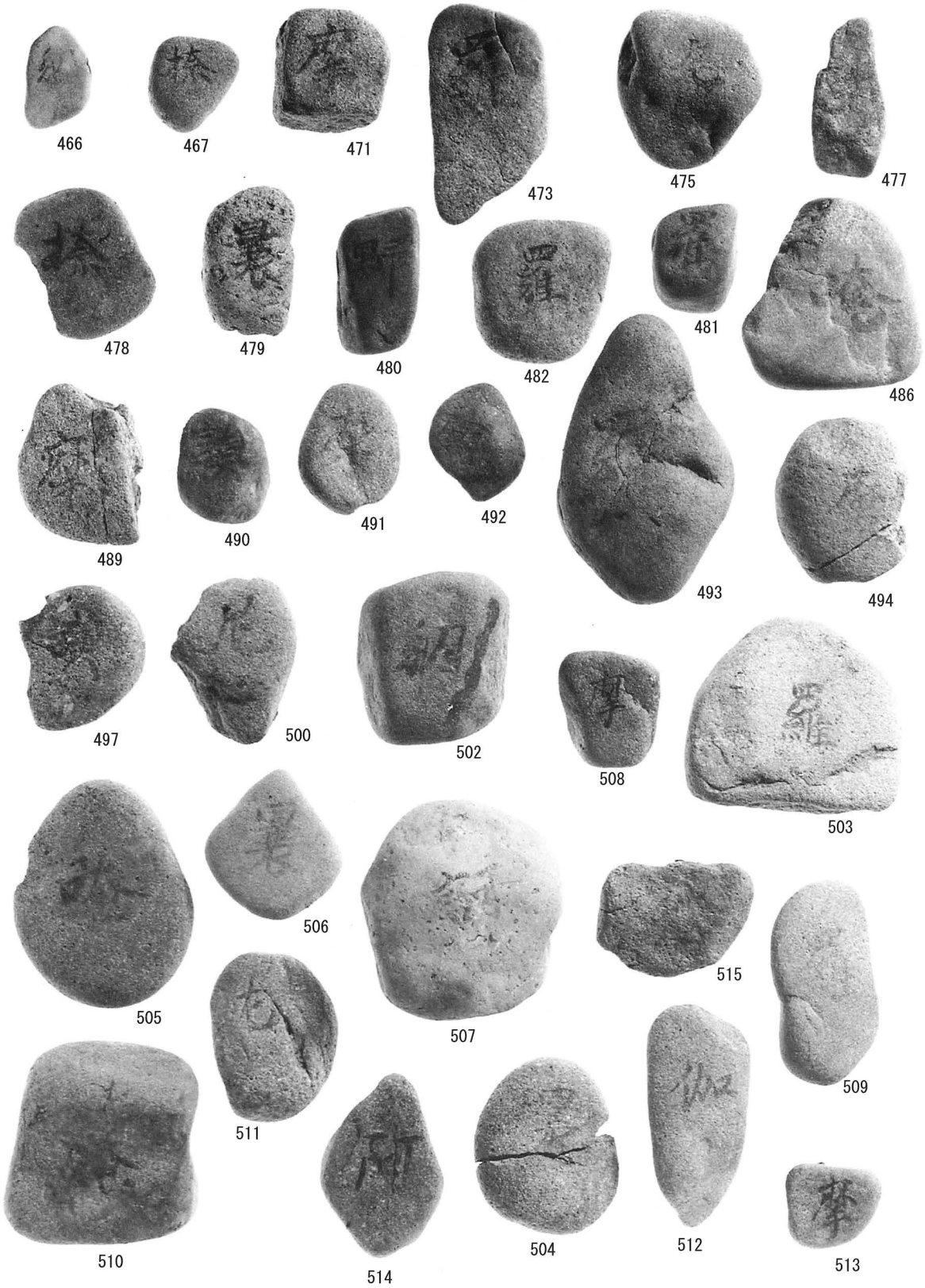
図版14　作山城跡出土礫石経(7)



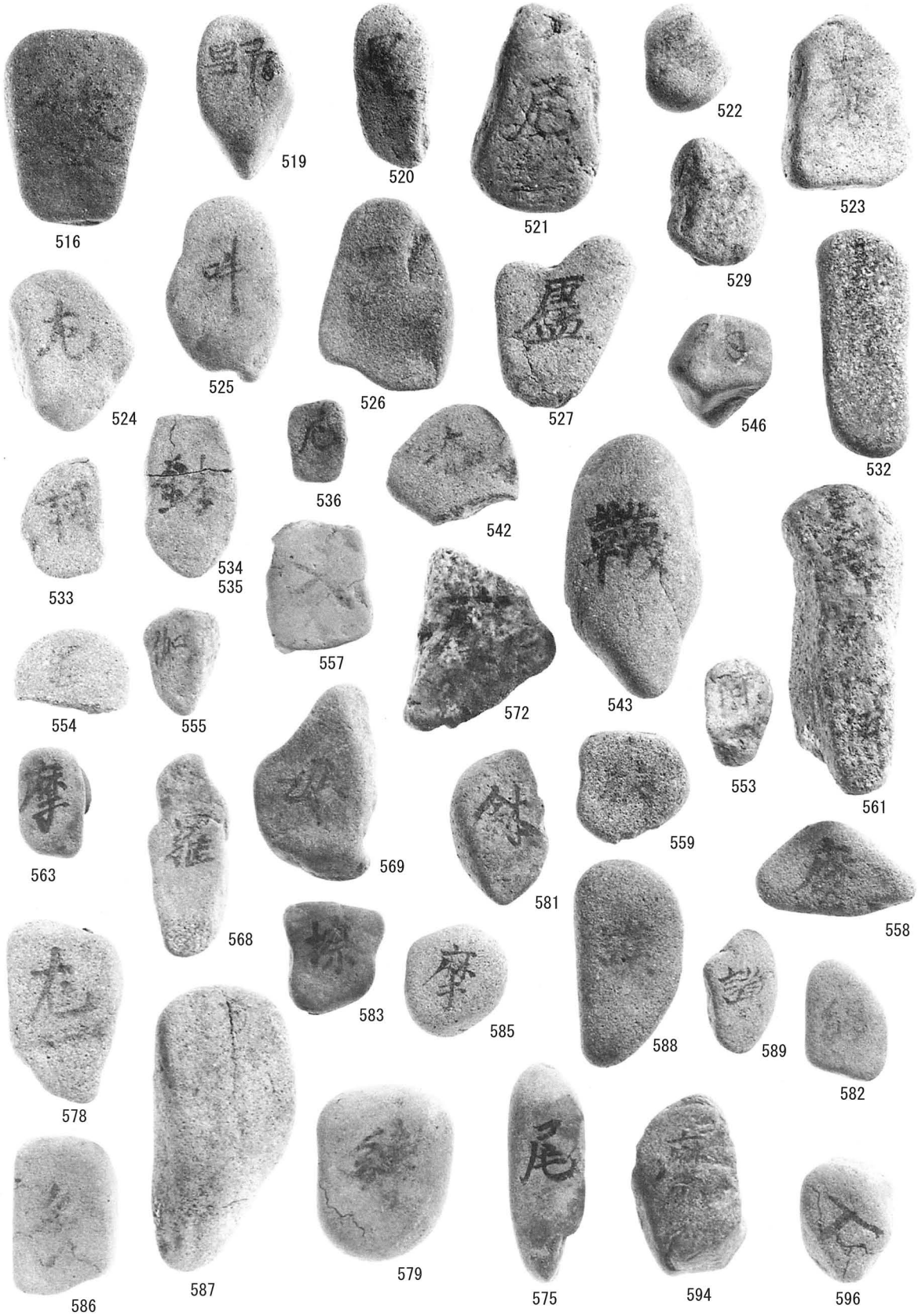
図版15　作山城跡出土礫石経(8)



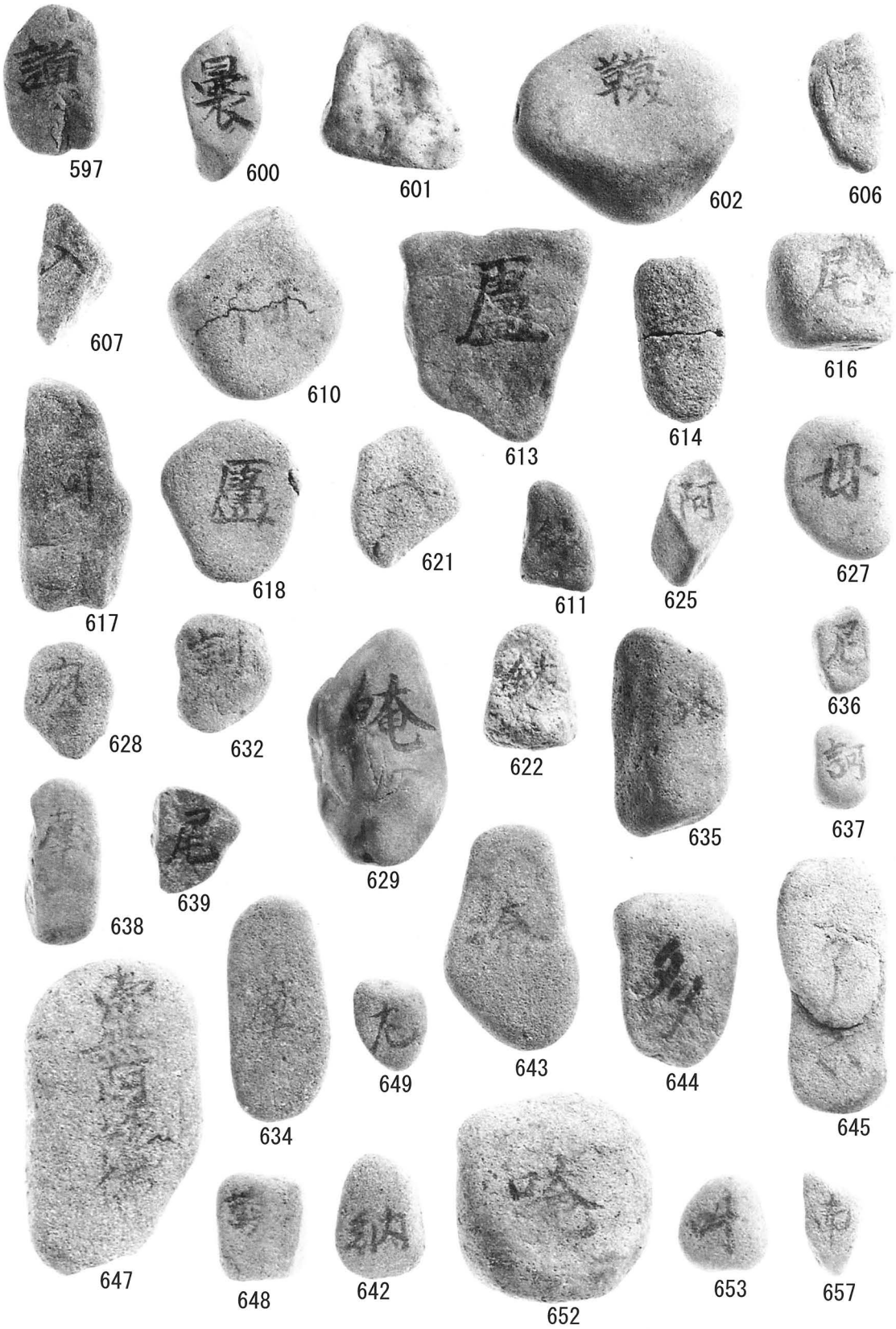
図版16　作山城跡出土礫石経(9)



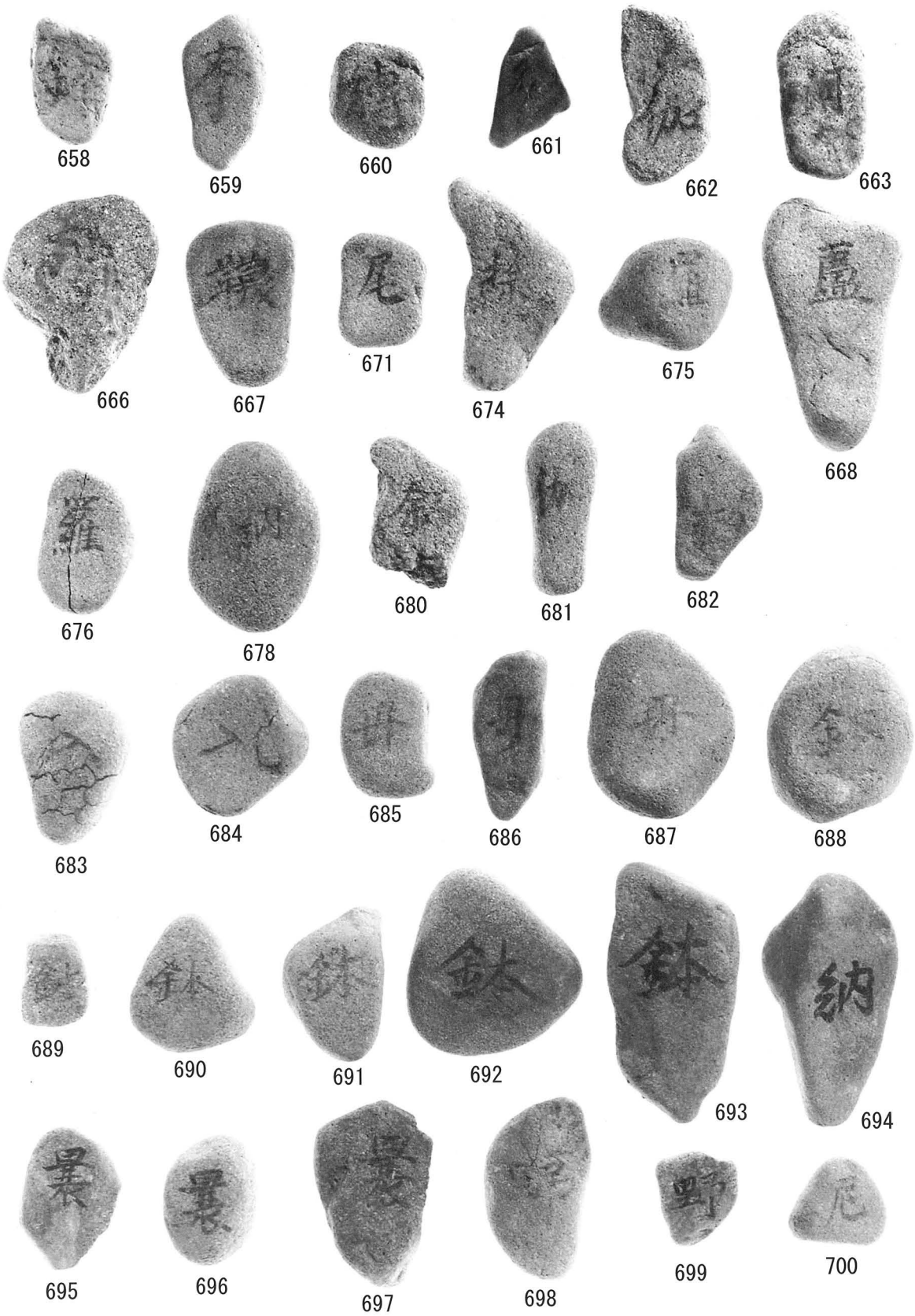
図版17　作山城跡出土礫石経(10)

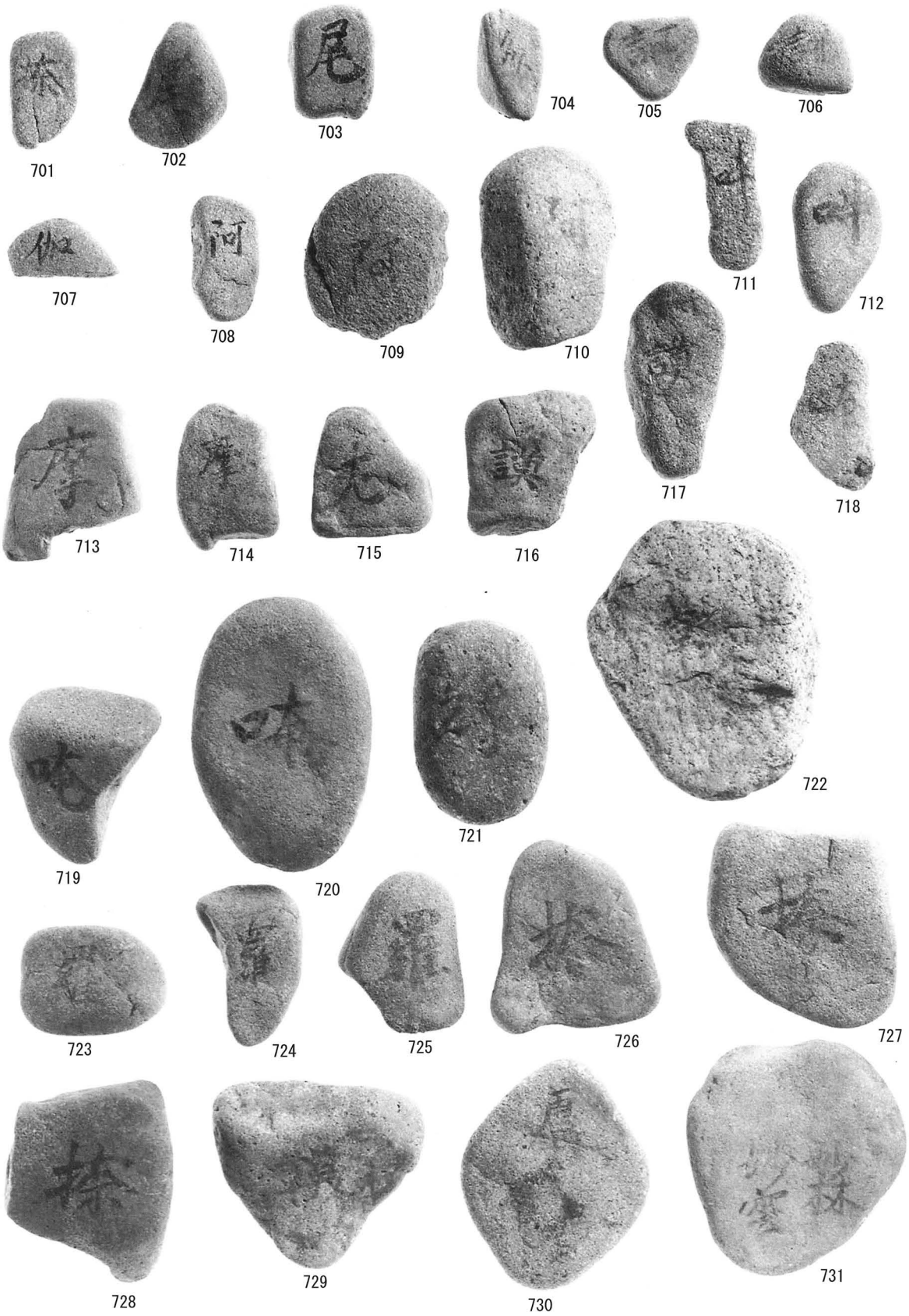


図版18　作山城跡出土礫石経(11)



図版19　作山城跡出土礫石経(12)




701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ふじおじょうあと　つくりやまじょうあと　かきのきこうじん
書　　名	藤尾城跡　作山城跡　　附 柿木荒神
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第117集
編 著 者 名	中西克也　中村茂央
編 集 機 関	高松市教育委員会
所　在　地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2008年12月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
藤尾城跡（ふじおじょうあと）第1次（だい1じ）	香川県高松市（かがわけんたかまつし）香西本町（こうざいほんまち）	37201		34°24′48″	133°59′50″	1993.12.9～12.17	50㎡	宇佐八幡宮社務所建設
藤尾城跡（ふじおじょうあと）第2次（だい2じ）	香川県高松市（かがわけんたかまつし）香西本町（こうざいほんまち）	37201				1996.2.5～3.14	31.8㎡	香西公民館拡張工事
藤尾城跡（ふじおじょうあと）第3次（だい3じ）	香川県高松市（かがわけんたかまつし）香西本町（こうざいほんまち）	37201				1997.1.8～1.10	206㎡	急傾斜地崩壊防止工事
藤尾城跡（ふじおじょうあと）第4次（だい4じ）	香川県高松市（かがわけんたかまつし）香西本町（こうざいほんまち）	37201				2007.8.6	9㎡	拝殿建替工事
作山城跡（つくりやまじょうあと）	香川県高松市（かがわけんたかまつし）香西南町（こうざいみなみまち）	37201		34°20′37″	133°59′55″	1987.3.1～3.31	100㎡	土取工事
柿木荒神（かきのきこうじん）	香川県高松市（かがわけんたかまつし）飯田町（いいだちょう）	37201		34°19′3″	133°59′36″	1998.5.25		祠改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
藤尾城跡	城跡	中世～近世	土坑，柱穴	弥生土器，土師質土器 陶磁器，瓦	特殊器台形土器 特殊壺形土器
作山城跡	城跡	近世～近代	土坑，柱穴	陶磁器，礫石経	
柿木荒神	散布地	弥生～近世	なし	弥生土器，陶磁器	

要　約		
	藤尾城跡	本書は平成5年から19年までに実施された4次にわたる調査を収録した。調査により，藤尾城跡に伴う確実な遺構・遺物は確認できなかった。しかし，藤尾城築城以前の建物に伴うものとして，藤尾八幡宮に関わる可能性がある遺構・遺物を確認した。また，特殊器台形土器・壺等の弥生土器も確認しており，弥生時代の遺跡が存在していた可能性がある。
	作山城跡	柱穴・土坑・溝等の遺構を確認したが，出土遺物は近世・近代のものであり，作山城跡に直接関係する遺構・遺物は確認できなかった。
	柿木荒神	祠の改修工事とともに，塚の一部改変に伴い遺物が出土した。弥生時代から近世に至る遺物を確認したのみで，当塚の詳細な時期・墳丘規模・埋葬施設等は不明である。

藤尾城跡　作山城跡
附　柿木荒神

平成20年12月28日

編　集　　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目8番15号
発　行　　高松市教育委員会
印　刷　　有限会社　河端商会